

諸帝の御崇信ことに厚く、尾州五社の一として、今、縣社に列せり。社殿壯麗、城内
寛廣、且つ古樹に富みて、幽邃なり。寶什多く、中、大鈴は俗に大鳴と稱し、昔國々
に配置したる驛路の鈴なりといふ。祭典中陰曆の正月に行ふ追儺の神事最も有名なり。

諸國里人談にいふ『この宮毎年正月に直會祭といふあり。神官旌旗を立て道の邊に出で、往來の人を捉ふ。さるによりてその日は諸人外出をうしむ。旅人などは旅館に逗留することあり。かく恐るれども自然とこの爲めに捉はるゝもの出来て、その人を沐浴をさせ、淨衣を着せ神前につれ行き、大なる組板、木にて造れる庖刀、生脛箒を設け置き、又人形をつくりて、捉れの代として板の前に据ゑ、その傍にかの人を居らしめ神前に備へ進むこと一夜なり。翌朝神官來りて件の備物捉人共に神前よりくだし、土を以て大なる鏡餅をつくりてかの人に負はせ、青銅一貫文を首にかけさせ追放すに、走り行きて必ず倒る。その倒れたる所に土餅を埋めて塚を築く』と。この奇祭今は禁ぜられたれど、尙ほ裸祭りと稱するものあり。

地蔵寺 一宮町字片端にあり。聖武帝仁龜年間に草創せし古刹にして、行基作地藏尊を本尊とす。現時の堂宇は後、良照和尚の再興せしものなりといふ。賽者多し。

妙興寺 一宮の南妙興寺村にあり。一宮停車場より約半里。古來著名の巨刹にして、臨濟禪家に屬す。開基圓光大師。はじめ北朝光明帝の貞永四年に工を起し、十八年を経

て、後光嚴帝の朝に成る。帝即ちこの寺を以て勅願所と定め、爾來足利氏歴世またこれを祈願所とす。これを以てその寄附に係れる珍什頗る多く、就中、和漢名家の書畫に絶品多し。永享年間足利義教富士遊覽の際當寺に宿して、『妙興報恩禪寺』の額を寄進せり。また寺に『國中無双禪刹』の扁額を掲ぐ。推して尾張第一の名刹となすべし。また現存せる覺皇寶殿の一字は、應永以前の建築物なりといふ。

萬徳寺 稻澤停車場より約四町の地にあり。山形村字長野に屬す。眞言宗の古刹にして、神護年間慈眼大師の開基に係り、中頃廢荒の後建長六年龜山帝の勅によりて常圓上人これを復興す。多寶塔あり、建長年間の建造にして、石造りの十三層なり。今特別保護に與る。

下祖父江松原 祖父江村大字下祖父江の西方に一堆の小丘あり。松樹丘上に茂生し深翠翫ぶ可し。況んや其地木曾川に瀕し風色の清絶なる胸襟を洗ふに足る者あるに於てをや。人稱して中島郡第一の勝地と爲す、強ち溢美にあらざるなり。且つこの地の

る者多く、夜をかけて難沓す

○關西線と尾西鐵道沿線 關西線は名古屋驛より西し、蟹江を経て彌富に達す。その間渺茫たる水田、稻よく實りて、到所小河水の縦横せるを見るべし。これ地質上最近に發達したる沖積層の地にして、往時は伊勢海の一部たりしこと、恰も東京の東京灣の一部、大阪の大阪灣の一部たりしが如し。而してその間を流れて伊勢灣に放瀉する大河に木曾川あり、揖斐川あり。ことに木曾河口の三角洲の如きは年々洪水によりてその形を變じ、その幅の廣くして海の如くなるは地理學上興味多きことなり。而してこの附近米の産地なることもまたそれに原因せるなり。彌富よりは尾西鐵道の一線この平地を北に走りて、津島地方を過ぎ、東海線の一ノ宮驛に連絡す。

●蟹江町 海東郡中の大邑にして、津島町を距ること東南に二里十七町、蟹江川に沿ひて市街をなし、水陸の便を備へて商業も盛んに、現今六千有餘の人口を有せり。元暦年間瀧川一益、織田信雄の爲めに、その城を擊破されたるは即ちこの地にして、

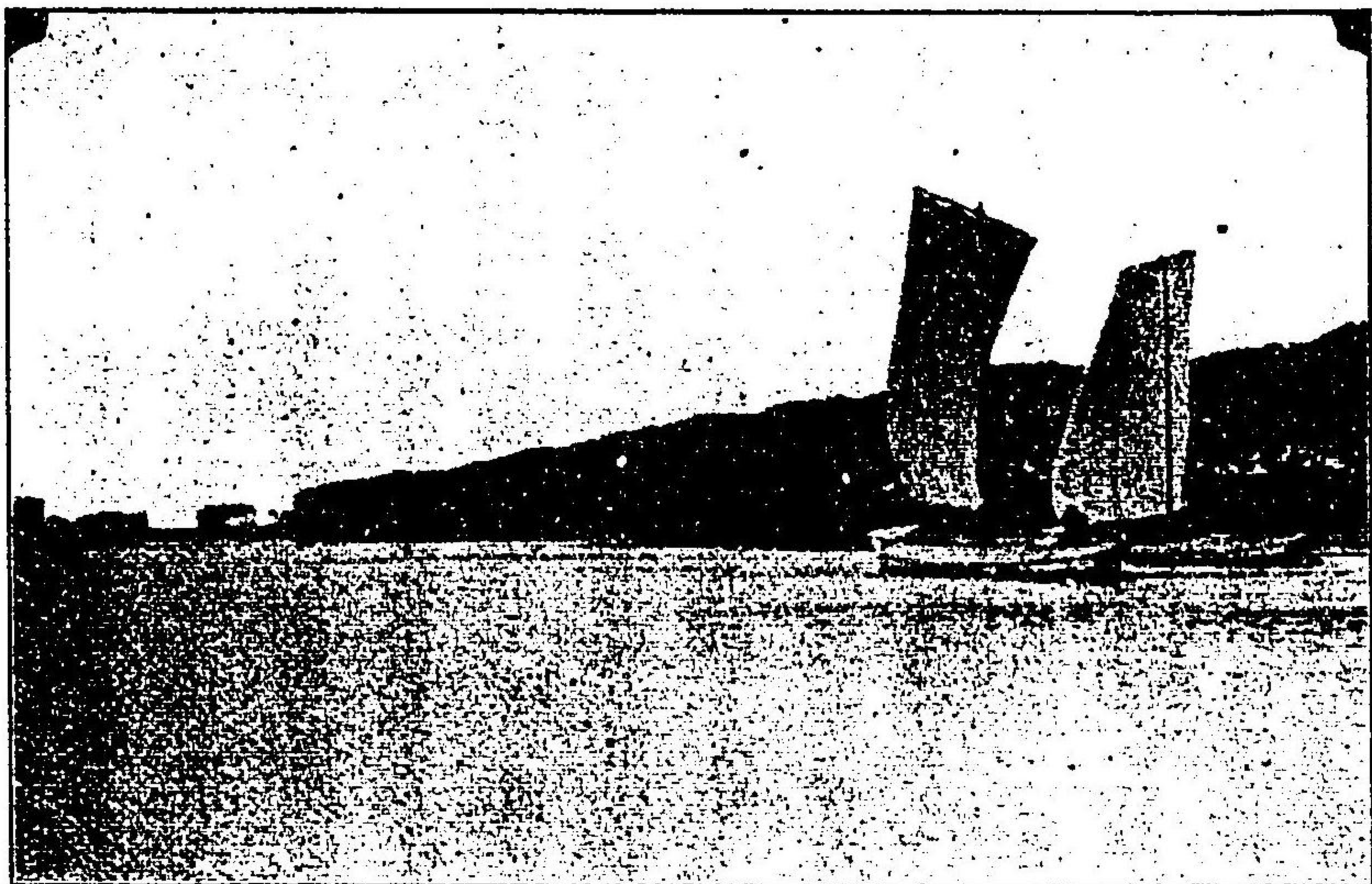
今なほ瀧川氏の城址を存せり。地の附近の諸川沙魚釣によし。

●牡丹園 蟹江停車場より二十二町、同村大字加島にありて、黒川氏の私有なれども種類數百株數千三百餘に上り、花期は公開して縦覽せしむといふ。

●彌富驛 は人家五六百を有する小村落なれども、尾西鐵道の分岐點なるを以て、將來繁盛に赴くべき形勢あり。驛の西を流る、木曾川は尾張伊勢の國界なり。

●木曾川の鐵橋 彌富停車場の西約十四町にして、渺茫たる木曾川の下流に架す。鐵橋の長さ二千八百四十八呎即ち八町に餘れり。更になほ伊勢桑名郡に屬せる長島驛を過ぎてなほ南すれば、再び三千二百六十二呎を有する大鐵橋を渡るべし。これ、全國鐵道橋梁中大井、天龍に架せるものに亞ぐの大鐵橋にして、河は即ち木曾川が國中の諸川を集めて東南流し、香阪にて二派に分れたるもの、一派——揖斐川にして、渺漫ほとんど天と相若く。

●森津の藤 海西郡大藤村の森津にあり。彌富驛より三十町にして達す。老樹一株、

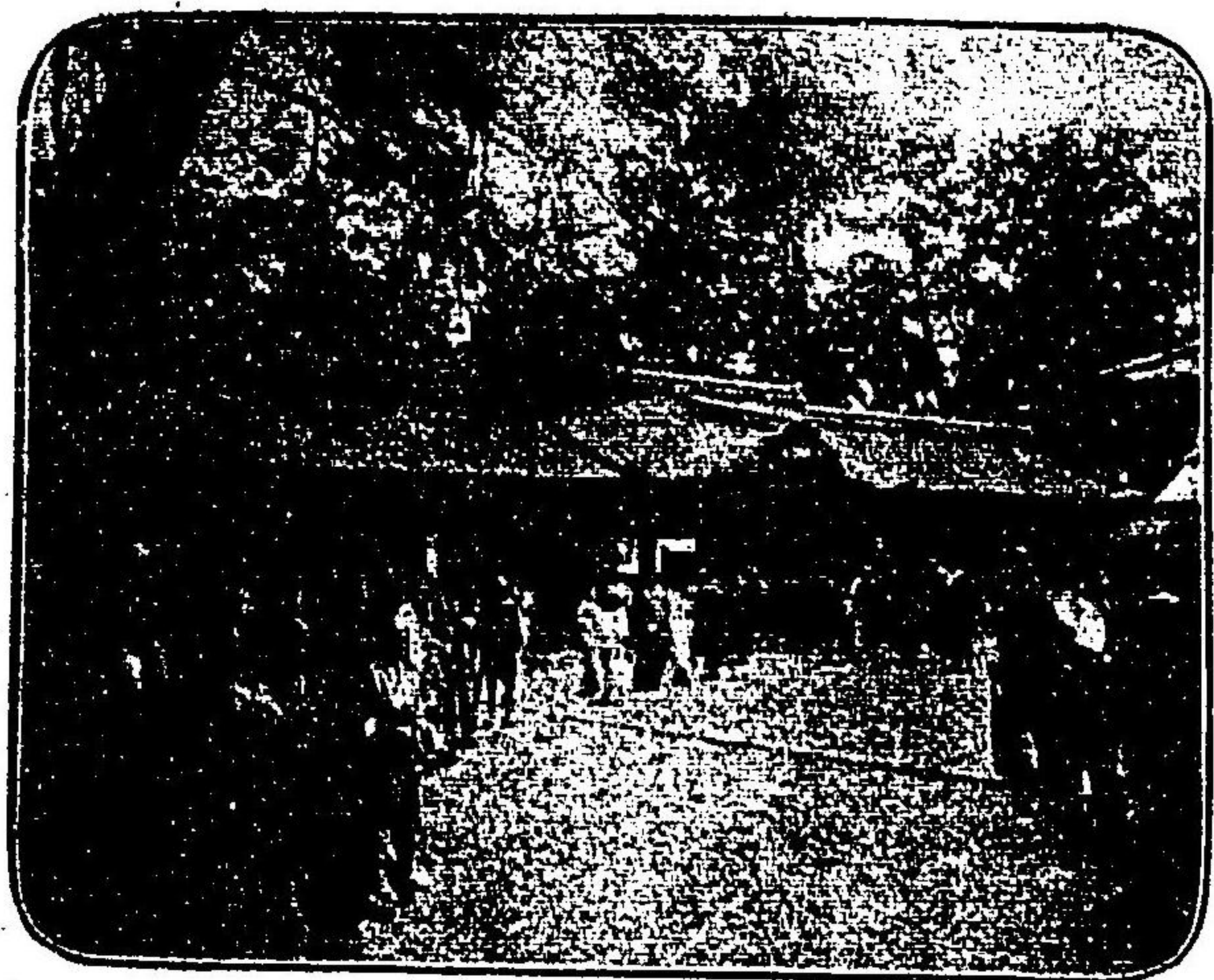


川 斐 掛

枝葉繁茂して方二十五間を覆ひ、花房また長くして四尺より六尺に及ぶものあり。凡そ三百年餘を経たらんかといふ。これを木曾川河岸より望むに一群の紫雲の如し。その地一農家の庭園なれど、花季は庭を開いて縦覽せしむるを以て、遠近より來り見るもの多し。

尾西鐵道は津島町の大祭に際して、特別臨時汽車を發車す。津島の大祭は尾張國中著名の大儀なり。

津島町 は佐屋川の東岸に位せる尾張西南部の大邑にして、人口一萬四千餘を有し、町に海東郡役所、中學校等あり。また尾西



尾張國

津 島 神 社

鐵道あり。關西線の彌富驛より分岐し、佐屋（この地は佐屋めぐりとして、往昔桑名より宮に船にて渡らざる旅客の往來せし地なり）を過ぐればその次驛は即ち津島町なり。町に成信坊あり。久遠山と號し津島第一の伽藍なり。

津島祭 町の津島神社は有名なる古社にして素盞鳴尊を祀り、欽明帝の即位元年に鎮座せし式内の神社なり。これ又尾張五社の一にして、織田信長、豊太閤等の崇信厚く、屢々社殿を修營し、社領を獻せしといふ。是を以て今なほ殿宇壯麗に、社域極めて宏濶なり。また老樹茂く、末社多し。今縣社に列せり。社はまた古來祭典の盛なるを以て聞ゆ。大祭は毎年陰曆六月

十四日十五日兩日を以て行ふ。所謂提燈祭とはこれなり。まづ、天王川に浮べたる數隻の大船に綵花を飾り、錦繡を加へ、これに一年の日數を象りたる三百六十餘の提燈を點じ大人形をつくり、船中鼓笛相和して、地方的特色なる曲を囃し立て、盛んに河中を溯回す。この壯觀譬ふるにもなく、遠近來り觀るもの夥し。これを以て關西線は特に臨時汽車を派するを例とす。蓋し、本邦祭典中、最も特色あるもの、一なり。津島町はまたこの社あるが爲め頗る繁盛し、旅舎料理店等多し。尙ほ天王河畔の櫻及び蓮花も世に知られて、花時遊覽の客少なからず。名古屋市より此所に至るは、關西線彌富停車場より、尾西鐵道によるを以て最も便とす。

津島町より名古屋市に至る道路東に向つて通ず。その道路上に神守の一邑あり。人口二千を有す。津島町より南方一里、津島川の沿岸に佐屋の地あり。往昔桑名より熱田に七里の渡をわたらざりしものは、皆なこゝを迂回して佐屋をまはりて名古屋に出でしものなりといふ。津島より尾西鐵道は六輪、森上の二驛を経て、萩原町に至る。六輪驛の東、日光川の岸に勝幡の一邑あり。

●立田の蓮池 海西郡立和村大字立田及び六つ和村大字戸倉の二村に跨れる大池にして、古來廣く世に知らる。蓮花多く、夏時芳香を追うてこの池畔に遊ぶもの多し。産出する蓮根また品質佳良にして、この附近の主要なる物産となれり。

●彌勒寺 寶地村大字島ヶ地新田にあり。曹洞宗に屬し、明應九年の創建にして、元祿中の再興に係る。堂宇十ヶ所あり。また寺城北は用水を隔て、國道に沿ひ、遠く美濃、伊勢等の諸山を望んで眺矚佳絶なり。

●萩原町 は名古屋、大垣に通ずる美濃街道と、南津島方面より來る巡見街道との交叉點にある小邑にして、一宮町より一里二町を隔てたり。起町はその西北にあり。また福澤町はその東にあり。共に美濃街道の小驛なり。

○中央西線沿線 名古屋市より美濃信濃に赴く中央西線は、今信州木曾山中野尻驛に達せり。國內に於ては、主として東春日井郡を西より東に貫き、勝川驛、高藏寺驛の二驛を経て美濃の多治見に達す。鐵路多くは土岐川(勝川)の流に沿へり。この線路

とその間半里乃至一里を隔て、名古屋市より陶業地瀬戸町に赴く一路あり。矢田川其南を流れ、更に其南に長湫の古戰場あり。更に其南に名古屋市より出で、三河舉母町に通ずる道路あり。今、中央西線を中心にして、その附近の名勝を記すべし。

龍泉寺 名古屋市より三里十八町志談村大字吉根にあり。松洞山と號し、延暦年間傳教大師の開基にして、天台宗に屬す。寺は巉巖屹立の上に位し。翠崖直ちに勝川の清流に臨み、崖上名古屋城頭の閃々たる金鱗と、尾濃の翠微とを飽迄恣にするを得べし。ことに楓葉の秋季を以て最も杖を曳くによろしとなす。この附近はまた天正長湫の役に、秀吉の三河勢と對陣せるところなればその古跡を探るも一興ならん。寺は賽者常に絶ゆるの時なく、ことに毎年節分の日及び四月五日七月六日の兩日は、參詣人夜をかけて群集し、頗る雜沓を極む。この寺中央西線の勝川驛よりすれば約一里にして達すべし。

正眼寺 和多里村大字三淵にあり。禪宗曹洞派の精舎にして、もと中島君下津村に

ありしを元祿二年この地に轉徙せしもの、創建は遠く應永年間のことに係り、當時の遺材をなほ存するものありといふ。境内幽邃閑雅にして、堂宇また尠少なからず。

長母寺 六郷村木ヶ崎にあり。勝川驛より約二十町。禪宗臨濟派にして、靈鷲山と號す。高倉天皇の治承三年の創立にかゝり、凡そ七百三十年を経たる古刹なり。無住大圓國師の住職たりし頃は寺門大に繁盛せしも、後暫らく廢頽し近世に及びて復活せり。寺は矢田礮の中洲にありて、風光掬すべく、清流は常に潺湲として堂背を洗ひ、境内老樹古木の間を躑躅花點綴して、觀光納涼共に佳なり。名古屋より一里十八町にして至る。

上野山 は長母寺の附近六郷村大字矢田にあり。山太だ高からずと雖も眺望快濶にして、且つ秋季は松茸を多く産するを以て、行遊の客尠なからず。この地名古屋を隔つこと東方一里に過ぎず。

小野道風の墓 と稱するものは小野村大字松河戸の八幡社域にあり。勝川驛よりは

一岩窟あり、深さ七八尺、清泉常に湧出して旱天にも涸れず。且つ水海潮の干満に従ひて増減ありと、奇とすべし。又山腹に天狗岩、屏風岩等の奇巖あり。この地の北に池田あり、美濃國に屬し、もし池田の地に朝霧籠むれば、この山に夕あらし吹きて天氣晴快となる。池田の朝霧、内津の夕あらしと呼びて人口に膾炙せり。この地美濃國多治見停車場より約一里半その間人車の便あり。

●●● 瀬戸町 は名古屋市より瀬戸街道を辿りて東北五里、東春日井郡の南部にあり。人口九千、陶業を以て大集落となす。宇北新谷に陶工元祖の一大碑あり、慶應年間の建造なり。

瀬戸焼は初め山城に加藤四郎左衛門春慶なるものあり。貞應中我が製陶法の海外に劣れるものあるを嘆き、これが研究を志して唐土に渡り、その地に止ること六年、具さにこの法を習得し、歸朝の後偏く各地を巡遊し、終にこの地に來りて始めて土質の製陶に適好なるを發見し、即ちこの業に着手せり。これ實に瀬戸焼の濫觴なりといふ。爾後名工の輩出ありてその製作いよく隆昌し、享和中よりは更に磁器の製法も考案せられ、二品共に良品を出して漸く四隣に傳播し、美濃に入り美濃焼となり、現今土岐・惠那可兒の三郡は其主産

地となれり。土岐郡は瀬戸に近く文化年中瀬戸より新製焼法を泉村に傳へて磁器を製せしに創まり、元祿中多治見・笹原・泉・下石に二十四窯を作り、其の後妻木・駄知等も之れに加はりて三十五窯となり、窯數次第に増加したれども皆瀬戸焼として諸國に販賣せしを以て美濃焼の名會つて顯はれざりしが、近來多治見を中心として其の附近の窯業漸次隆盛となり、多治見焼の名漸く世に顯はるゝに至れり。また瀬戸の陶器師にして其の居を轉ずるもの往々此の地に來り、窯業を營むを以て、益々多治見の窯業は隆盛の有様を呈し、後進の多治見は前進の瀬戸を凌がんとするに至れり。加之其の製品の如きも模様清楚にして氣韻高く、且つ其の價低廉なるを以て、能く顧客を引きヨーロッパ・アメリカ・支那南洋諸島に輸出し、製造價額は約百五十萬圓、製造戸數約五千三百餘、製品の多くは實用的にして、裝飾品は百分の三に當る。最も製陶の盛なるは土岐・駄知・下知・妻木の三村にして、其他同郡の諸村及惠那・可兒諸郡の諸村と共に皆多治見町に集りて此地の製品と合し、多治見焼として四方に輸出す。駄知村の窯業は明治十一年頃を以て始まり、始四周山を以て圍まれ、交通不便にして窯業も亦甚だ振はざりしが其の後道路の修繕交通の便を得し以來、頓に盛大と成り、今日の製造戸數は六百戸に達し、下知・妻木と共に肩を並べて本縣中最も製陶業の盛なる地たるに至れり。而して其製品は實用の者を主とし、精巧品は間々之を製するに過ぎず。精巧品の最も盛なるは市倉にして、他村に比して其産額多し。諸村各々業を分ち、酒杯・煎茶碗・咖啡茶碗・徳利等各村特有の製造を成し、一般に美濃焼なる一大特産物として四方に輸出す。製造所の規模は一般に甚だ小にして工場組織のものは獨り多治見の工場あるのみ。名古屋各市中四浦工場の看板高く店頭に掲げられたるは此の工場にして、一に又多治見焼の

名を代表せる如き觀あり。本縣陶業の機關たる陶器學校は土岐郡の土岐津町大字西山に郡費を以て設立せられ、盛に斯道の隆盛を計れり。(大日本地誌による)

●●●●● 雲興寺 瀬戸の東凡そ半里、赤津村にあり。應永年間の創立にして、禪宗を奉じ、寺域老樹多く、泉聲耳に澄みて、閑雅深邃なり。

●●●●● 龍ヶ淵 三河の國境に近き山間にあり。溪流の西岸斷崖を峙ちて、急湍雪末を飛ばす。また一奇勝なり。

●●●●● 長湫古戰場 瀬戸街道を印場村にて南に折れ、田徑の間を行くこと一里餘にして達す。地今に長湫或は長久手の村名を有せり。長篠、桶狭間と共に愛知縣下の三大古戰場と稱せらる。天正十二年三月徳川家康が、織田信雄を助けて小牧山の陣營よりこの地に出戦し、秀吉の軍を破りたるは皆人の知るところ、秀吉の將池田信輝森長可の墳墓は今なほ田疇の間にあり。憑吊するもの誰か感慨無量ならざらん。某漢詩人此所に遊んで詩あり。曰く『蘋蘩誰復弔英靈、破驛人家半掩局、草是無名蜂思遠、花猶有影

蝶魂醒、風聲落水銷兵氣、山色染衣余血腥、虎鬪龍爭空一夢、數峯夜約舊時青。』

●●●●● 岩崎瀧 岩崎村竹野山の西南六坊山の麓にあり。山間の小溪こゝに至りて飛瀑をなすものにして、瀑甚だ大ならずと雖も、一幕絶崖より直下し頗る壯觀なり。加ふるに四邊樹木の深翠の雪湍と相掩映するありて、更に一種の風色を添ふ。

●●●●● 蓮教寺 高社村大字高針の古谷にあり。寺傳に云ふ、長徳年間源頼光の尾張守たりし時創建せし所にして、惠心院權少僧都源信の開基に係り、當時大伽藍たりしが、承久の頃兵火に罹りて焼亡せりと。阿彌陀佛を以てその本尊とせり。

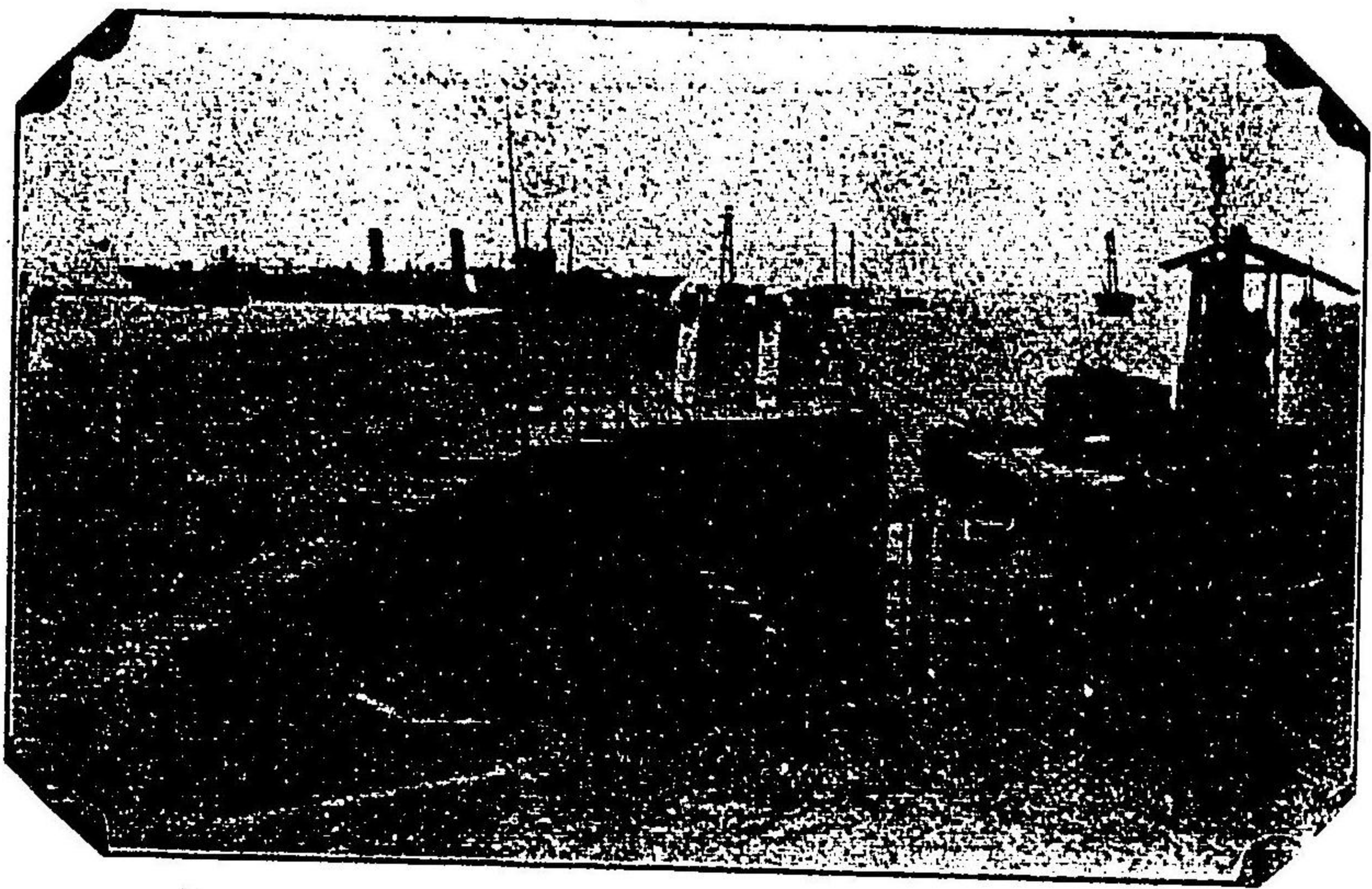
○小牧犬山附近 名古屋市より國の北部に赴く路は、春日井、小牧を経て犬山町に至るものあり。これを西方に並行して、西春日井郡を貫き、丹羽郡岩倉に出て、同じく犬山町に至るものあり。犬山町は木曾川を隔て、往昔の中仙道と相對し、その城壘は今日猶その古を語る。名古屋市より小牧に四里、小牧より犬山町へ三里餘あり。小牧山は徳川豊臣の古戰場にして、小牧町の西に特立す。

の連峰悉く眸中に攢り、遠く駿河の富士をも望見すべく、脚下には大池の漣漪を踏まへ、眺矚の風光容易に狀すべからざるものあり。

大縣神社 樂田村の東、本宮山の西麓にあり。垂仁朝勅建の古祀にして、大荒田命を祀り、當國二の宮と稱す。

本宮山 大縣神社の後山にして、一に二宮山或は眞神山ともいへり。海拔二千五百十二尺尾張の峻峰にして、山中に老樹奇巖多し。この山、尾張富士に對して或は大富士とも稱す。大風嶺はその西南の高峰にして、上に風、雨の二宮を鎮す。山腹に慈洞と稱する巨窟あり。南麓に祇鹿神社あり。地は全く三河國に屬す。

○名古屋大府間 東海道と東海官線との相交錯する間に、大高より岐れて大府に至る間とを記さんとす。この間には熱田町を始めとして鳴海町、有松町、大高町あり。桶狭間の古戰場は有松町の南半里にあり。大府は知多支線の分岐點なるを以て、人煙稍々盛なり。



熱田町 大高停車場より汽車は僅々十分程にして熱田停車場に達すべし。停車場は街東、東熱田の地にあり。町は古來熱田宮の名を以て世に知らる。東海道は昔時この地より舟にて伊勢國桑名にと渡りたるものにて、その間を間遠の渡しといへり。されば昔時にありては、旅客皆な此所に集り、名古屋は却つて寂しくして、この地は今日の名古屋にも劣らざる繁華を保ちしなり。

今はその繁華を名古屋に收められて、昔の如き繁華を見ずと雖も、二百萬圓の經費を投じて築港工事を完成し、名古屋に對する

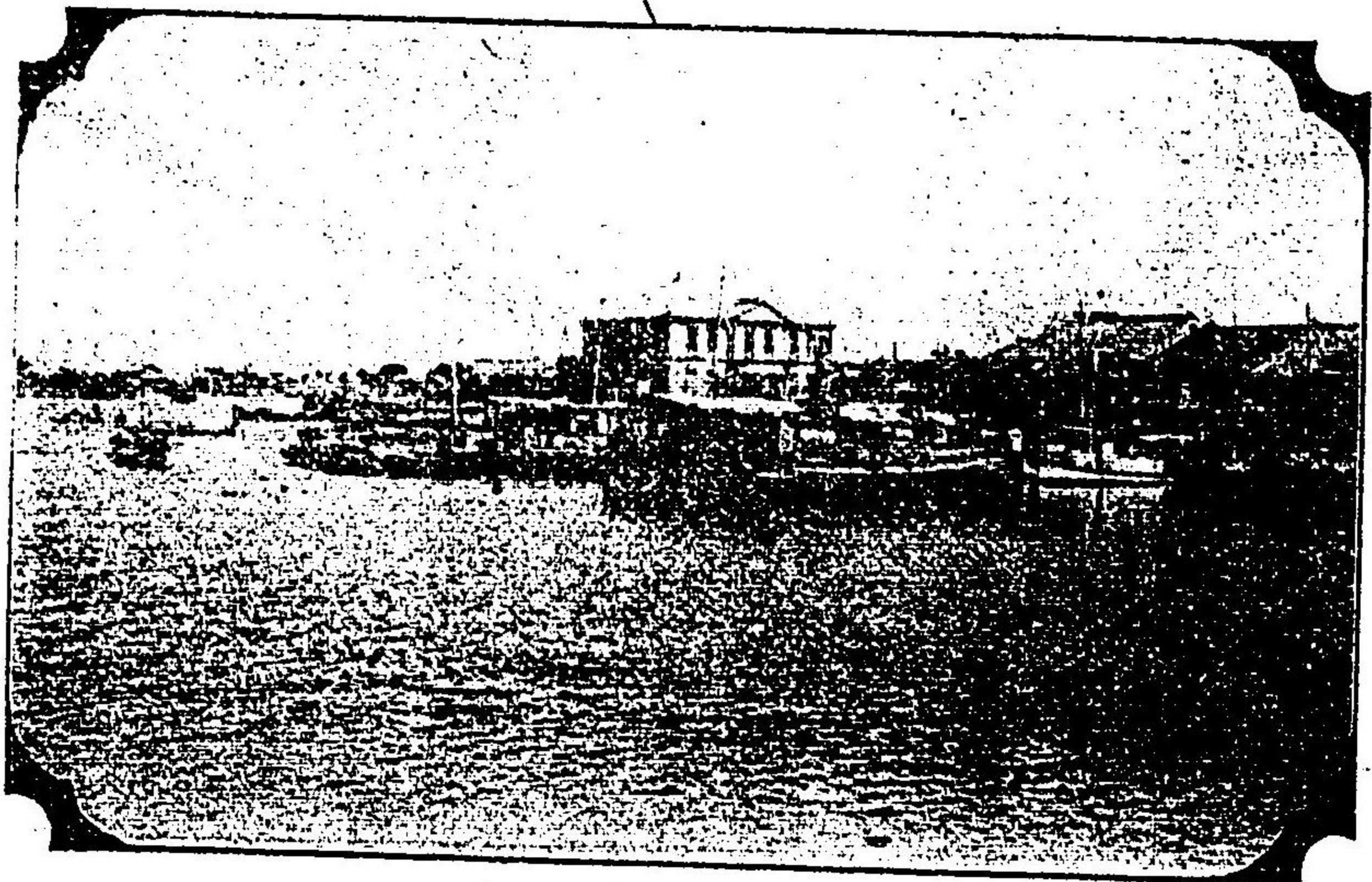
こと、恰も横濱の東京に於けるが如くならんとせり。されば今日は更に隆盛に越くべく、伊勢内海の諸港より紀州沿海を経て、大阪地方に往復する汽船の發着あるが爲め、更に交通上主要の地となるべし、且つ名古屋市をはじめ、美濃信濃各地の山地に供給する魚鹽は孰れもこの地を經由するを以て、木の芽浦に大なる魚市場あり。市場の盛況他に比類少なしと稱せらる。地に愛知郡役所、警察署以下の官衙あり、また會社銀行多く、現時の戸數六千百、人口二萬七千餘を有せり。麥稈眞田を名産とし、毎歳海外への輸出額尠ならずといふ。熱田町内田の海岸に常夜燈あり。寛永年間の建設にして、闇夜著船の目標となるものなりといふ。

●熱田神宮 ●は尾張國中第一の名祠にして、この境域は町の北旗屋町にあり。創建は遠く景行天皇の四十一年にかゝり、今の社殿は明治二十六年の改造にして、規模更に擴張せるところあり。祭神は日本武尊を主とし、天照大神、素盞鳴命、宮簀姫命、建稻種命を合祀す。皆古代高雅の風趣を摸し、千木高知り、宮柱太肅ましませる。誰か肅



熱田神社

然として襟を正しうせざるものあらんや。正殿の東側土用殿には即ちかの三種神寶の一なる草雉劍を奉祀しまつれり。境内老杉擡として聳え、古松これに點綴し、人をしめてまづ神威の高きを思はしむ。刑部小輔平雅連の歌に『神さびて彌影高き松杉に雲見る山を幾世へぬらん』とある雲見山は、なほ昔の面影をその儘に傳へたり。社殿は正殿の他に渡殿、釣殿、祭文殿、廻廊拜殿、勅使殿等ありて、建築甚だ宏壯を極めたり。境の西に神苑あり、奇石清泉の配置頗る瀟洒に、曳杖の客多し。蓋し、伊勢大廟に次



熱田海岸

一九〇
 ぎて本邦屈指の官幣大社の一なり。例祭は年七十度の多きに及べども、舊四月八日の花塔祭及び六月二十一日の大祭最も殷賑を極む。なほ境内の名蹟として、不實梅、泪川、玉の井の里、二十五挺橋夜寒の里、中の森等あり。八彊の鳥居四彊の御門と稱するものあり。即ち春敵、鎮皇、海藏、清雪の四門と、境の八方にある鳥居とを指す。攝社としては八劍、高坐、大福田、日割御子、氷上、上知我麻の所謂熱田七社をはじめ、その他諸社あり、多くは式内の古社なり。

八劍神社 神宮攝社の第一八劍神社は宮の南三町ばかりの地にあり。一に外宮と稱し、和銅元年の鎮座に係り、新造の寶劍を祀りてこれを神體となすといふ。本殿は神宮と同じく明治二十六年の修營にかゝり、その五月十九日を以て盛大なる遷宮式を舉行せられたり。

平家物語劍卷にいふ、「日本武尊草薙劍をば、桑の枝にかけ置き給ひしを、岩戸姫これを取り、紀大夫が田、一夜の内に森になりたる社の杉に、寄掛けて置かれたりけるが、夜々劍より光立ちければ、かの光杉燃えつきて、焼き倒れにけり。田に杉の焼けて倒れ入りたりければ、田も熱がりけるといふ心に、熱田とぞ名付けたる……さても草薙劍をば、寶殿を作りて置かれたりけるが、夜々に劍に光立つ、知法行徳の人ならでは見ることもなし、しかも新羅の帝に、沙門道行といひける高僧の日本に立つ劍の光を見て、帝に語りければ、何ともして彼劍を取りて、我に與へよと仰ありければ、さては取りて進ませ候はんとて、日本にぞ渡りにける。尾張の熱田に詣てつゝ、かの劍を三七日行ひて、九條の袈裟に裹みて逃げる間、寶劍袈裟を破る事得ずして、筑紫の博多まで逃去りたりけると、熱田明神安からぬ事に思召し、住吉大明神を討手に下し道行を蹴殺して、草薙劍を奪ひ取る。帝生不動といふ將軍に、七の劍を持って日本へぞ渡しける。生不動既に尾張國まで攻め来る。熱田の神宮懸き奴かなとて蹴殺し給ひにけり。所持の七の劍を召取りて、草薙劍に

加へて、寶殿に祀はれたり。今の八咫の大明神とはこれなり。

●●●● 頼朝誕生所 熱田旗屋町誓願寺の境内にあり。今一祠を存す。誓願寺は浄土宗寺にして、昔時熱田大宮司藤原季範の住所なりき。頼朝の母は即ち大宮司の女にして、久安三年四月八日頼朝はこの邸内に生れたりと稱し、今なほ産湯の池と稱するものあり。

●●●● 白鳥陵 熱田白鳥町法持寺の境内にあり。南北に長さ丘陵にして、南方に白鳥祠あり。北方に石棺を收めたる址あり。陸上に老樹鬱蒼す。往古日本武尊の伊勢に薨じ給ふや、朱鳥年間に至り草薙の御劍を熱田神社に勸請せしと同時に、尊の太刀、鉾、鏡等宮簀姫の許に残留し給ひたる遺物を、この地に埋め、以て陵墓をつくりたるものなりといふ。

平家物語劔卷にいふ「日本武尊失せ給ひし後、白鳥に化して飛び給ひし時は、長さ一丈の白幡二流と見えしなり。尾張國にて飛落ちぬ。そこをば白鳥塚と名付たり。幡の落ちける所をば、幡屋とて今にあり。兵衛佐頼朝は末代の源氏の大将となるべき故にや、かの幡屋にてぞ生れ給ふ」幡屋は即ち今の旗屋町なり。

●●●● 圓通寺 熱田町の田島にあり。曹洞宗にして、境内に秋葉三尺坊を安んじ來賽するもの多し。

●●●● 圓福寺 熱田神戸町にあり。時宗にして、龜井道場と稱し、傳教大師の開創にして足利尊氏の再建、嚴阿上人の中興なり。寺寶として、足利義教の和歌を認めし短冊等あり。

●●●● 本遠寺 法華堂とも稱す。田中町にあり。應安年間日澄上人の開基にして、寺傳にいふ、桓武帝の御宇傳教大師勅を奉じて熱田神宮境内に一字を創立し、自作の釋尊を安置す。後日蓮上人其所に參籠すること一百日、應安年間に至り日蓮上人の遺命によりて、日澄此所に徙したるなりと。寺は客殿はもと織田信長の書院なるを移築したるなりといふ。兎に角も注目すべき古刹なること疑なし。寺寶中信長所贈の香爐、豊臣秀吉規定の禁制札等珍とすべし。

●●●● 正覺寺 熱田傳馬町の東、鈴の御前社の北隣にあり。浄土宗にして、融傳和尚の創

建に係り、尾張三檀林の一にして、且つ後花園帝の勅願寺なりき。慶長六年回録にかかりて一時荒廢し、爾後澤道上人これを再建せり。阿彌陀如來の佛像を本尊となす。
鷲峰山 熱田旗屋町の西方にあり。一に寐山又は斷夫山とも稱し、順徳院の御製にも『雪ふればおのかね山やあれぬらん宿の梢につぐみなくなり』とあり。今、御料地に屬し、古樹蔚蒼として頗る良材に富めり。

高座神社 旗屋町の東、東熱田字高藏にあり。神宮攝社の第二に位し、熱田七社の一に屬せり。境内、老樹森々として、鳥語自ら寂寞瀟洒の風趣あり。

笠寺 熱田町の東一里笠寺村にあり。熱田停車場より約二十町にして達すべし。寺は天林山笠覆寺と號し、眞言宗に屬して、聖武天皇の御宇善光上人の開基なり。本尊十一面觀音は善光上人の作なりしが、昔時堂宇荒廢の時佛體も屋外に露出して、風雨の曝らす所となりしに、この邊りの貧女これを憐み、自ら着ぐる所の笠を脱ぎてその上に覆ひ、後女の大政大臣基經の息平朝臣の夫人となるや、朝臣に請ふて堂宇を再建

し、後世呼んで笠寺と稱するに至れり。今尾張四觀音の一として、來賽者頗る多し。寺寶に嘉禎、曆仁年間に發せられたる院宣等あり。

呼續地藏堂 鳴尾村字牛神にあり。明和元年の修造に係り、境内狹少なれど本堂、觀音堂、大師堂、秋葉堂等あり。本尊佛像是僧空海の刀と稱し、靈驗赫耀たりとの名遠近に喧すし。

海上寺 瑞穂村字奥の坊にあり。俗に粟藥師と稱す。眞言宗にして、本尊藥師如來は、空海の作と傳ふ。賽者甚だ多し。今の堂宇は天保年間の改築なりといふ。

願興寺 八幡村大字野立にあり。寺傳に據れば初め鎮西八郎爲朝この寺を古渡村に建てしが、織田信秀城を同村に築くに及んで此所に移せり。昔は七堂伽藍輪奐の美を盡せりと聞く。今眞宗を奉せり。

荒子の觀音寺 荒子村大字荒子にあり。淨海山圓龍院と號し、天平元年泰澄和尚の開創にして、永祿年間法印金運を中興となし、尾張四觀音の一たり。後、前田利家ま

た本寺を修造し、名刹の名高く、泰澄作観音像を崇信するもの多し。殊に初観音の日の如きは、境内の雑沓名状す可らざるものありといふ。

願成寺 柳森村大字高須賀の字郷中にあり。天平四年行基の開基する所にして、行基自作の薬師佛を安置し、嘗て聖武、孝謙兩帝の勅願所なりき。されば往古は境域廣潤、堂塔伽藍の結構頗る壯麗なりしも、今大に荒蕪して、堂宇の如きも僅に一二を存するのみ。寺内に弘法大師作と稱する兩金剛の廢物及び僧圓空刀の人丸像一軀を藏せり。

鳴海町 はもと海に瀕したる地にして、往時は鳴海瀉、宵月濱等の稱を以て著はれ、東海道を上下する雅客の唱吟に入りし地なりと雖も、滄桑の變今は海と一里餘を隔てて昔日の餘影も止めず。人口七千餘あり。商業殷盛、町に有松絞を嚮ぐ家多きを以て有松絞は却て鳴海絞の名を以て世に知られ、この地の産出の如く考へらるゝに至れり。鳴海を咏みし歌句二三を擧げんに、宗良親王「鳴海がた汐の満干のたびごとに道

踏みかふるうらの旅人」長門「行駒の影も夕日になるがたいそげや汐のまだ満ちぬまに」芭蕉「初秋や海も青田の一みとり」

萬福寺は鳴海町字本町にあり。眞宗にして、永享元年の草創にかゝり、寺域頗る狹隘なれど、鳴海町に於ける巨利なり。

千鳥塚は同町字山王山にあり。芭蕉の「星崎の闇をみよとや啼く千鳥」の一句を彫り。星崎とはこの地の四北海濱をいふ。山上の眺望甚だ廣潤に、南方海を控へ、青螺を望んで、詩思頗る動くものあり。

瑞泉寺は同町字相原にあり。應永年間の創建に係り、足利義滿深くこの寺を崇信せりと。寺寶中足利義滿寄附の唐畫星像二幅及び徳川家康寄附の香盤等あり。

大高村 は鳴海驛に隣接して、人口三千七百餘を有し、東西一里二町、南北十九町に亘れり。今、大高停車場を置く。

火上神社 大高町字氷上にあり。停車場を距ること十二町。社は熱田神宮七社の一にして、日本武尊の妃宮簀姫命及び建稻種命を同祀す。社傳に據れば當社は初め朱鳥元年を以て今の城の地に鎮し、熱田神宮に對して東宮と名付けしが、應永年間今の地

に遷徙したり。これを以て今なほ同山に舊址を存し、俗に呼んで御旅所といひ、毎年七月十一日本社例祭の日は神輿必ずこれに渡御すといふ。また毎年の例大祭には山車練物を出して、般賑を極むといふ。

長壽寺 は停車場より約二町の地にあり。臨濟宗にして、堂宇壯嚴、この地方の名刹なり。

大高城址 停車場より約七町の地にあり。南北十八町、東西六十間、今民宅となりて纒かに舊址を殘存せり。城は永祿二年桶狭間の役織田信長の所築にして、後徳川家康が十九歳の初陣に奇策を構へ、敵陣を冒して兵糧を入れたるを以て名高し。

有松町 は有松絞とて木綿絞の名産地にして、その業最も盛に行はるれば、今は愛知縣下の一富源たり。

桶狭間 は有松町と落合村との間にあり。大高停車場より約一里十五町、鳴海驛よりは馬車の便あり。この地、永祿三年五月十九日駿河の大守今川義元が、織田信長の夜

襲に會ひて斃れたる所、史上に名高き古戰場たり。今、荆棘叢生の原頭『今川上總介義元戰死所』の十字を刻せる一碑を建つ。明和八年千代倉某の建つる所、古戰場の中央部には尾張の儒官秦蒼浪の撰にかゝる桶狭間戰場と弔ふ碑一基建てり。寒烟衰草蕭條たるの光景、坐ろに行客をして梟雄の末路を偲ばしむ。

二村山 は大高停車場を距る二里、沓掛村にあり。一に嶺山と呼べり。源頼朝の歌にも『よそに見し小笹が上の白露を袂にかくる二村の山』と見えたり。山頂の展望甚だ平凡ならず、東方木曾の御嶽、駒ヶ嶽等の峻峯を望み、南方知多半島の諸山、伊勢の朝熊嶽等を指呼し、西は大海の蒼波、漁舟の點々たるを望み、北方越の立山、賀州の白山を始め、尾濃兩國の連峰を望むなど、まことに一場の活パノラマに對するが如し。秋月紅葉また愛賞すべきものありといふ。

○知多半島 知多半島は南方に斗出し、その幅一里乃至二里、長さ八里餘なり。鐵道線路は半島の東岸を縫ひて半田より武豊に至る。武豊より半島の南端師崎まで五里

半なり。道路良好なり。されどこの海上には衣浦を航行する小汽船あるを以て、旅客は多くこれに由る。半島の西海岸は大高より常滑町に至る間良好なり。又西海岸名和より半島の中央部を南北に過ぎて半田に至る道あり。半島總て緩漫なる丘陵を以て蔽はれ、しかもその丘陵は大半耕作せられ、農業盛に、物産多く、村落皆な富有なり。三河の渥美半島に比すれば、その開化の度目を睥たしむるものあり。従つて風俗すや淫靡たるを免れず。半田、龜崎には富豪多し。而して龜崎を起點とせる衣ヶ浦航行の汽船はこの半島の東岸各地に寄港し、更に篠島に寄港し、三河の渥美半島に連絡す。

大府村 知多郡に屬す。停車場は字南組にあり。武豊線の接續驛なるを以て、知多

半島東岸に向はんとするものは、この驛に乘換ゆるを要す。

延命寺 大府村字緒川にあり。寶龍山と號す。天台宗の精舎にして、後奈良天皇宸筆の額を樓門にかゝぐ。また同村に小川城址あり。乾坤院あり。

龜崎町 是境川の河口にあり。停車場をその西端に置く。衣ヶ浦を隔て、三河の高濱

と相對し風光やゝ見るべきものあるこの地古來有名なり。港津なれど河口泥沙堆を爲して、今は巨船を繋ぐに足らず、港としての繁華大に減退し、半田港に商權を奪はれたるの感あり。されどなほこの地は醸酒の産地たるを以て名高く、富豪多く市街また整正なり。

半田町 是龜崎町の次驛なり。海底深く巨船を容るゝに足るを以て港頭常に帆檣の林立するを見る。蓋し、知多灣に於ける第一の良港なり。人口九千、町に醸酒家多く知多清酒の名喧し。近年麥酒の醸造も試みられ、九三麥酒會社に於ては盛んにカブトビールを醸造す。知多郡はこの地に郡衙を置けり。

雁宿山 是明治二十三年海陸軍大演習の舉行されし折、大元帥陛下の御駐蹕あらせられし地、停車場より十町を隔てたり。東に衣ヶ浦を望み、風光の明媚言ふべからず。

常樂寺 半田町の南方半里、成岩町にあり。寺は文明年間空觀榮譽上人の開創にし

て、天龍山と號し、寶什多し。

武豊町 は武豊線の終端驛にして、半田より一里餘を隔つ。維新前は全く海岸の漁村たりしもの、その地形良港の要件を具へたるが爲め、今はこの海岸有數の繁華地となれり。停車場は海岸に近く、百餘間の棧橋ありて、荷物運搬の便に供せり。日本水路誌に曰ふ『武豊の錨地は冬季西風の期に於ては、船舶の碇泊に適す。その底質泥にして錨搔きまたよし』と。清韓地方に往復する船舶の寄航するもの多し。

觀兵臺 は町の西方の丘陵にあり。この丘もと迎戸山と呼べりき。明治二十三年海陸大演習の際、大元帥陛下の登臨あらせられし所、衣ヶ浦を下瞰して眺囑佳し。また中腹に鳳翔閣と稱する御休憩所今に存せり。夏時遊客妙なからず。

野間の大師堂寺 鶴林山と號し、野間大坊の稱呼を以て著はる。武豊停車場を距ること西南大約四里、野間村大字野間にあり。白鳳年間役の行者の開創と傳へ、義朝以來源氏に緣故深く、現存の樓門の如きも頼朝建立のものとして名高し。中世衰頽の後

徳川幕府及び尾張侯の手によりて修復せられたり。本堂以下伽藍嚴然、所藏の寶物また妙なからず。殊にこの寺の名高きは、源義朝が長田忠致に弑殺せられし古蹟なるを以てにして、その弑されし浴室の古蹟今なほ當寺の上方字田上に存し、俗に地名を御湯殿と唱へ、法山寺と稱する禪刹あり。また當時義朝の首を洗ひたる池は當寺の門前にある小池にして、通俗血の池と稱せり。建久元年源頼朝天下を一統して後、先考の菩提を弔はんが爲め、大に土工を起して七堂伽藍を建築し、怨敵長田忠致父子を縛して義朝の墓前に曳出してこれを磔殺す。今東南の山を長田山と稱するは、その遺骸を埋葬したるものにして、半腹に磔松といへる一松樹あるはその墓表なりといふ。源義朝の墓は本堂の東にありて、傍らに鎌田政家、池禪尼、平判官康頼の假墓及び織田信孝の墳墓あり。はじめ義朝の長田忠政に弑せらるゝや、せめて木刀にてもありしならばと切齒せしを以て、里民瘡を憂ふるもの木刀を捧げてこれを祈る時は必ず靈驗ありと傳説し、奉納の木刀今墓前に堆し。また、織田信孝は天正十一年秀吉に逐はれて、

この寺内安養寺に入りて自刻し、今なほその辭世及び血染の幅物あり。寺の境域一千九百餘坪、本堂、鐘樓、樓門、客殿等相連り、壯麗偉大を極めたり。寺寶中、弘法大師光明皇后の眞筆、小野小町假名書の法華經、義朝の佩刀、探幽筆義朝最後の圖并に尾州侯義直眞筆の圖解、賴朝筆の大槩若經等最も珍品たり。建築としては賴朝建造の古樓門を推すべし。

この附近義朝に關する古跡頗る多し。野間の南一里内海村宇間部の山中に御所奥と稱する谷あり。義朝主従の村民より響應を受けたる所。また同所山嶺の姥聖石は義朝の從金王の一老婆を擊殺せし所。北隣奥田村の風谷は義朝暗殺の時長田父子の潛居して一夜を明せし所。亂橋は野間村にありて、金王玄光等の奮戦せし古跡、大亂、小亂、首塚松等附近にあり。又阿久比村字坂部なる水掛地蔵は金王の古跡にして、今一寺を存し金王の乗馬の轡を保存せり。

●●●●●
 師崎海水浴 知多半島の最南端にありて、武豊停車場を距ること四里半、巖岩突兀として海上に突出し、波濤の相吞吐せる様また奇觀なり。篠島群島を近く目睫に望み西方伊勢志摩の群山、東方渥美の翠色は遙かにこれを煙波漂渺たるの間に觀望すべし。

ことに海水頗る清澄なれば、夏期浴遊に適す。海水浴旅館二三あり。前面篠島、日間賀島及び佐久島にも各海水浴場の設けあり。而して群島間には汽船の往復もあれば、

夏季島廻りをなすも一興なるべし。

●●●
 篠島 師崎の東南に横はれる島なり。後村上天皇が皇子たりし時、北島親房と共に東奥に赴かんとして船大風に逢ひて漂着したるはこの島にして、今日猶その遺蹟を存せり。人家は島の北側にありて南風を保障し海水浴場として甚だ佳なり。又旅店の設備も完全せるを以て、名古屋より行いて遊ぶもの多く割合に紳士風なり。汽船は毎日師崎、半田、龜崎に通ず。風景の美なるは、いふまでもなし。また島に愛知水産試



尾張國

験場あり。漁撈、製造及び養殖の三科より成り、明治三十三年本島へ置かれたるものなり。

羽豆神社 師崎の南角羽豆岬にあり。古來著名の大祠にして、建稻種命を祀り、延喜式に列す。

豊濱海水浴 師崎を距ること西に一里、伊勢海に臨める豊濱村にあり。土地僻遠なれど、海水の清澄なると風光の快豁なるを愛して來遊するもの尠なからず。武豊より人車を通ず。また熱田より日々汽船の便あり。

常滑町 は半島の西岸に位する一市邑にして、人口六千七百、武豊町を西北に距ること二里六町なり。この地古來より陶器の製作を以て世に知られ、常滑焼の名は弘く喧唱せらる。今、この地方の製陶家二百六十、年々の製品價額三十萬圓に近しといふ。また地に陶器學校の設けあり。

大野海水浴 常滑町を北に距ること一里餘、大野町にあり。町は交通便利なる一小邑

にして、人口二千餘を有す。傳へていふ、今を距ること五百七十年前此地の海水に浴して病を治したるものありと。蓋し本邦海水浴の嚆矢なるべし。降つて明治十四年同地海音寺の住職土地の有志者と相謀りて浴場を設け、醫師をして海水を分析せしめしに、水質は氣管支病、神経病、皮膚病、胃弱等に特效ありと定められたるより、その名俄かに顯はれ、相州大磯と匹敵する浴場となれり。されど海水はやゝ濁れり。風景は伊勢の海を隔て、四日市と相對し、白砂青松、奇巖怒濤の奇觀あり。町の内外に海音寺、青海山、宮山、城址、齋年寺等の名跡あり。中、海音寺の域内に來迎石あり。齋年寺には雪舟筆達磨二祖斷臂圖を珍藏せり。この地より横須賀までは北方二里を隔つ。

大野海水浴に到るには武豊線半田驛にて下車し、西方三里ばかりを人力車にて行くべし。大高驛にて下車すれば陸路五里にして達す。また熱田よりは鳥羽に至る汽船ありて、途中大野に寄港す。

三河國

二〇八

三河國は尾張の西に位し、北は信濃及び美濃に界し、東は遠江國に連り、南は全く海に瀕す。東西二十餘里、南北十七里、面積二百七十七方里を有し、其形菱形を爲す。郡を分つこと十、渥美、八名、北設樂、南設樂、寶飯、幡豆、額田、東加茂、西加茂、碧海即ち是なり。愛知線これを管す。地勢山嶽多く、所謂山地を成し、北方信飛兩國に蟠れる木曾山脈と、東南甲信遠の諸州に連亘せる赤石山脈の餘脈なる弓張山脈との間に北設樂南樂等地方の山嶽を挟み、頗る複雑にして高峻たる山嶽を形成す。從つて國の地形東北に高く西南に低く、遂に海に至る。木曾山脈に屬する諸山多くは傾斜緩として山頂鈍く、弓張山脈に屬する諸山之より稍々急峻なる趣を呈せり。而して南北設樂山嶽最も峭峻を極む。木曾山脈に屬する山嶽に二本塚山(一一〇〇米)漆間山(一二六八米)牧の島嶽(九七四米)其他離山、白鳥山、碁磐石山、鞍掛山等あり。離山

の南には、上津貝村の小盆地ありて、海拔六八〇米の高距を保つ。設樂郡の北境には龍頭山(一〇三四米)段戸山(一〇〇五米)八ッ嶽、小八ッ嶽(一〇六二米)等あり。弓張山脈に屬するものは、海拔高距甚だ大ならざれども、木曾山脈の諸山に比すれば、傾斜稍急にして、山頂またかれの如く鈍ならず。溪谷よく發達し、樹木繁茂し、滿山蔚然たるを以て、容易に彼此を別つを得べし。弓張山は八名郡大郷村の東に聳え、高さ六九三米を有せり。其他城の山(六七八米)大森山(五〇一米)等あり。此山脈は南するに従ひ次第に陵夷し、石巻山(三一九米)に至りて盡く。南北設樂郡の山嶽は一般に急峻にして、山側には溪谷少く、山相皆奇なり。鳳來寺を以て聞えたる鳳來寺山その尤たり。其他神田山(一〇〇二米)御郡山(八四〇米)等あり。而してこれ等山嶽の盡くる所、東に豊橋平原あり。西に岡崎平原あり。豊橋平原は豊川及び其他の灌溉する所にして寶飯、八名、渥美の諸郡に跨り、地味豊沃にして人煙稠密なり。國中第一の都會たる豊橋町には豊川に沿うて此の平野の中央に横はれり。御油、新城の諸邑は其北隅にあり。

岡崎平原は碧海、渥美、額田の三郡に跨り、矢作川及び其支流これを灌漑す。平原低平にして海拔高距十數米に過ぎざる所あり、田圃よく開け、人口の密度大に、國中最も重要の生産地として知らる。岡崎、西尾、刈谷、知立、舉母の諸邑皆なこの中にあり。河川は東北より西南に流れ、矢作川、豊川の二大河國の脈絡を爲す。矢作川の支流に足助川、太平川あり。國の東南より西南西に突出せる渥美半島は、尾張の知多半島と相對して、其間に三河灣を擁す。半島には丘陵起伏す。

沿革 古へ國府を寶飯郡に置く、今の國府村大字國府の地即ち是れなり。鎌倉幕府の初め、源範賴暫く國守に任せられ、建久正治の間安達盛長之れが守護たり。降て足利氏の時に至り。吉良満貞守護の職を奉ず。自ら八名郡西條に居り、其弟尊義をして幡豆郡を領し、東條に居らしむ。後寶正の初めに及びて、吉良氏大に衰微し、國內擾亂を極む。足利義政乃ち細川成之を遣し代つて守護の任に當らしむ。天文年間今川義元駿河より來りて當國を侵し、遂に東條義安(尊義八世の孫)を捕へて駿河に幽し、西

條義昭(満貞七世の孫)を東條に徙して自ら州東の地を奪ふ。是時に當り徳川家康額田郡に起りて岡崎に居り、西境を略取す。既にして義元を刳撃し、其地を攘有すること十一年、其桶狭間に敗死するや徳川氏又舊疆を恢復し、尋いで西尾(牧野氏)吉田(小原氏)の諸城を抜き遂に全州を併吞す。天正年間豊臣氏東征の後徳川氏を關東に移封し、池田輝政を吉田に、田中吉政を岡崎に封せしが、關ヶ原の役後又徳川氏の有に歸し、池田、田中の二氏を他に徙封して、松平家清を吉田に本多康重を岡崎に本多康俊を西尾に戸田尊次を田原に封じ、且つ水野勝成をして刈谷の舊邑を襲がしむ。爾後又封を國內に受る者舉母に本多忠利あり、奥殿に松平乗次あり、西大平に大岡忠則あり、西端に本多氏ありしが、文久年間奥殿藩主松平乗謨を信濃の田野口に徙して八藩と爲す。維新後吉田を改めて豊橋と稱し、板倉勝達を陸奥の福島より徙して重原に、安部信發を武藏の岡部より徙して半原に封じ、總べて十藩と爲せしも幾くならずして皆縣となし、又尋いで之を廢し、岡崎に額田縣を置き一國を管治せしめしが、明治五年十一

月に至りて愛知縣に合し、今尙ほ尾張國と共に其管轄に屬す。

交通 官設東海線は遠江より來り、先づ豊橋平原に入り、二川驛を経て、豊橋驛に達す。豊橋驛は線路中の大驛にして、豊川鐵道の一線これより北に岐る。これより少時東海道と並行して西し、小阪井より海岸路に沿ひて分れ、其間に一丘陵を隔つ。これが爲めに東海道の御油驛は同名の停車場と二十餘町を隔つ。蒲郡驛より見たる衣ヶ浦は、東海線路中屈指の名勝として知らる。岡崎町、又停車場に二十餘町を隔つ。これより矢作の鐵橋をわたり、安城、荻谷の二驛を経て尾張に入る。豊橋驛より岐れたる豊川鐵道は吉田驛（豊橋）を發して、小阪井、牛久保を経て、豊川町に達し、これより豊川の峽谷に沿ひて東北に向ひ、一つ宮、長山、東上、新城、川路を経て、長篠に至る。豊川稻荷の參詣者を目的とす。長篠より北設樂地方に赴く道路二つに岐れ、右すれば本郷に達し、左すれば田口町に至る。岡崎町より東西加茂郡の地方に赴く道路は、九久平に至り、足助川を渡りて二つに岐れ、右は足助町に至り、左は舉母町に至

る。岡崎町より足助町へ七里、舉母町へ五里と稱す。渥美半島に赴く道路は海岸を縫ひて南すれど、田原町までは豊橋町より絶えず小蒸汽の便ありて、陸路を行くもの稀なり。豊川河口より同半島福江町に航行せる定期汽船あり。蒲郡より伊勢神社港に航行する汽船も亦日毎に一回づ、發着す。

産業 米は岡崎平原及豊橋平野に産す。麥は渥美寶飯二郡を最とす。甘藷は海岸地方多くこれを産す。藍も亦碧海、寶飯、幡豆に出づ。牧畜は馬匹を飼養するもの設樂加茂地方に多く、農夫は多くこれを運搬養耕に用ゆ。鳳來寺山の杉は頗る著名に、豊川矢作川沿岸の山には、杉、檜の美林相連る。渥美半島は、水産稍々盛に、衣ヶ浦には烏賊、鰻、海參等を産す。乾鰻業また盛なり。三河木綿は地質堅緻なるを以て世に聞ゆ。

○豊橋町 舊時吉田と稱し、松平伊豆守七萬石の城邑、中世今橋と呼び豊橋に改めたるは維新以後なり。静岡、濱松、名古屋と共に東海道中の都邑にして、繁華の度に於て

種々の差こそあれ、その地形、その發達の狀況等は皆相似たり。昔は遊女多かりしが哩言にも『吉田通れば二階からまねく』といへり。北に七八里乃至十里にして山嶺を帯び、南方一二里にして沙濱より成れる海岸を控へたるさまなど静岡、濱松等と酷似せり。而して街道は東西に通ずる東海道を主線とし、南北に通ずる伊那街道、別所街道、渥美街道、縦横に相交又す。町の廣さ東西十八町、南北八町、人口二萬四百を有す。停車場は花田村字中郷に置けり。豊川鐵道に行かんとする旅客はこの驛にて乗換ふるを要す。町の北方を豊川流れ、一里にして海に入る。長橋あり、木造にして百二十間餘、豊橋の名は實にこれに起因せり。またこの水路を利用し、渥美半島港に達する汽船あり。

この汽船は伊勢參宮には甚だ便なり。まづ停車場より豊川に至れば其所に衣浦汽船會社あり。小蒸汽數艘烟を吐きてあり。これより海路は衣浦を経て知多半島をめぐり、直に伊勢灣内を航して神社にいたる。神社より伊勢神宮まで二里位なり。二見ヶ浦に近し。この舟路の時間は十時間位なるべし。されどこの船時々中絶するを以て、旅客この便を利用せんと欲せば、宜しく豫め會社又はその地の旅店に問合せすべし。またこの岸

より渥美半島の島村に寄航し、これより衣ヶ浦の篠島(この地海水浴場あり)を経て、知多半島の諸要地師崎、牛田、武豊を過ぎて、尾張の龜崎にいたる航路あり。この航路は前の伊勢航路に比して、比較的確實なり。

源光行の海道記にいふ『時に日重山にかくれて、月星隱にあらはれ、明曉をばやめて豊川の宿にとまりぬ。深夜に立出で、見れば、豊川は流ひるく、水深くして、まことに極たる大なる波しなり。河の石瀬に落つる浪の音は、月の光にこえたり。川邊に過る風の闇は、夜の色白し。また諸の鄙のすみかには、月よりほかに眺めたるものなし』云々。

吉田城址 字八町にありて、今歩兵第十八聯隊の營所に充てらる。城は永正年間駿河の太守今川氏の臣牧野氏親の所築にして、後松平氏の裔大河内氏の領に歸し、王政維新後廢城となれり。

吉田神社 兵營の表門と相對する所にあり。素盞鳴尊を祀り、昔は吉田の午頭天王と稱せしもの即ちこれなり。或はいふ、鎌倉時代の創建ならんかと。例祭は毎年六月十四、十五の兩日にして、神輿の渡御あり。土地名物の烟火の催しあるなど、頗る盛んなり。而してその神事多く典故に據るを以て名あり。

●●● 悟真寺 關屋町にある淨土宗の名刹たり。貞和五年善忠上人の開基、本尊阿彌陀如来の坐像は、胎内に開山傳來の三尊佛を藏せりといふ。境域廣く、堂宇鱗次、輪奐の美を盡せり。中、書院に御隠れ御殿と稱するものあり。長祿の役家康此所に三日滞在せりと傳ふ。徳川氏との縁故厚かりしを以て、幕府時代には殊に權勢盛んなるものありしといへり。寺内にて製出する納豆は世に謂ゆる八橋納豆と稱へ、豊橋町的一名物たり。曾て後水尾院の御所に献納し『ひくしほに渡りかゝれば三河なる濱名はをしてこゝに八橋』との御製を賜はりたりと。八橋納豆の名蓋しこれより起れるなり。明治十一年至尊東海巡幸の際この寺を以て行宮所と定められき。

●●● 東觀音寺 豊橋の南方三里、小澤村大字小松原にあり。天平五年聖武帝の勅によりて僧行基創立、同僧正作馬頭觀音を本尊とし、臨濟宗を奉せり。境域高く老樹これを圍んで、境幽静たり。本堂、阿彌陀堂、多寶塔以下數字を有し、頗る海山の眺望に富む。

東海官線を東すれば、二川驛あり。二川驛に入るに先ち、旅客は窟觀音の小丘の中に立てるを見るべし。

●●● 二川町 もと五十三次の要驛たりしも今衰微して振はず。停車場は字大岩にあり。人口二千三百。



●●● 二川岩屋觀音 二川停車場の附近にあり。山を大岩山と稱し岩石多し。觀音は行基僧正の所作にして、大岩寺に安置す。寺は天正二年の造營と稱し、背後に大岩窟あり。その高さ八十尺、矮松繁茂せる平原に屹として聳立す。東海鐵道の車窓より望み得べし、俗に龜岩と呼ぶ。岩上丈け

十二尺の聖観音立てり。寺、今昔日の壯觀を止めざるもなほ古刹たるを失はず。またこの山は躑躅松茸の名所として名あり。春秋の候、遊覽の客尠しとせず。去來句あり『岩鼻やこゝにも獨り月の客』

○豊川鐵道沿線 即ち豊川の流域是なり。初めは豊橋平野(寶飯郡)にしてやがて豊川の峽谷に入る。汽車は、八名、南設樂の郡界(豊川)を北に走りて長篠に至る。八名郡役所は東上郡の東二里富岡村にあり。南設樂郡役所は新城町にあり。北設樂の一郡は全く北部に僻在し、山地にして、名邑少く、唯田口町あるのみ。田口町には、長篠驛より山里六里を隔つ。この沿線には豊川稻荷あり。鳳來寺山あり。

●吉田 吉田村大字下吉田村柿本に城址あり。永祿年間の所築にして、老杉古檜の間今なほ壘址を存せり。七瀑は下吉田字七瀑にあり。三輪川の上流、飛泉七折して落下するもの、一瀑の高さ二十一尺、二瀑の高さ四十二尺、三瀑の高さ三十尺、四瀑九十六尺以下各一二間の落下を有せり。瀧岩石に激して或は廣く、或は狭く、飛沫飛んで

水聲頗る俗耳を洗ふに足る。紅葉の候は、飛泉錦繡に相映發して、更に一段の美を増すといふ。また、附近に子抱石なるものあり。城山城址は下吉田村字城山にあり。眺望佳絶にして、ことに觀月に妙なりといふ。また下吉田村に淺間山あり、山頂の展望濶達にして、東北に富岳を望み、西に本宮山、煙巖山の深翠を掬み、夏時避暑に適すといふ。頂きに一小石祠あり。同じく下吉田村字田中に滿光寺あり、曹洞宗にして、山を青龍山と稱し、天文年間の創立に係り、寺格高し。若干の寶物を藏せり。

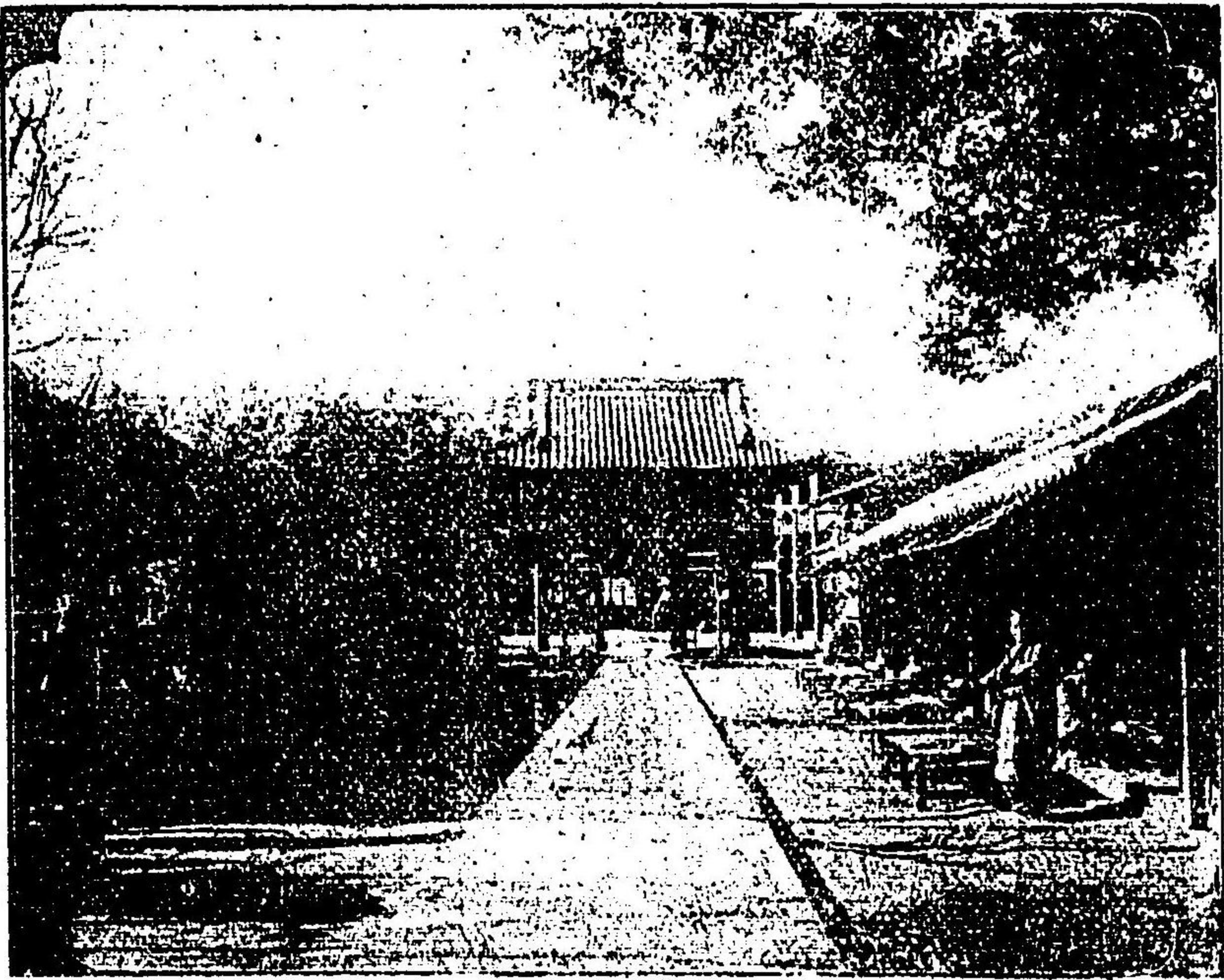
●西郷 大藏神社は西郷村大字中山の大山といふ地にあり。伊弉諾、伊弉冊の二神を祀りて、遠く上古の創立に係るといふ。五本松城址は字城屋敷にあり、今、田圃の間わづかに壘石の跡を存するのみ。城主西郷家員の墳墓は大山の地にあり。

●石巻山 三輪村の北方に聳え、八名の南端に位せり。古生層の山嶽にして、式内石巻神社あり。山頂の眺矚頗る開豁、東北に富士を望み、脚下には濱名湖の白帆を算へ、而して西南には三河灣一帶の風光を望み、伊良湖崎、姫島、小島、大島、佐久島、日間

賀島、篠島等の島嶼波光と映帯して、その勝景、容易に狀すべからざるものあり。こ
とに山に温泉あれば、鎖夏には最も嗜好ならん。夏時豊橋より登臨するもの多しとい
ふ。眞言の名刹、法言寺はこの山麓にあり。

菟足神社 豊秋村大字小阪井にあり、俗に八幡とも呼ぶ。社傳にいふ、祭神は菟上
王なり。白鳳年間神告によりて八幡宮を併せ祭る。祭式に雀十二羽を射取りて祭牲と
す、と。この神事を風祭りかざまつと稱して、古來諸書に著はる。社に古鐘一口あり、應安年
間の鑄造と稱し、表に『三河國寶飯郡渡津郷菟足神社』の十三字を刻せり。なほ附近
の村落多く太古の石器、土器を發掘す。

山本勘助の碑 は豊川線牛久保停車場より三町の所にあり。地は即ち勘助の居村に
して、その宅址と稱するものあり。勘助は明應年間當國賀茂に生れ、武田信玄の軍師
として高名なりしはよく世人の知るところ、竹中重信、眞田幸村等皆この戦術を學びた
りといふ。永祿九年川中島の役に戦死して、今その墳墓は信州松代の隣村寺尾にあり。



豊川稲荷

また同村長谷寺に同人の守本尊な
る摩利支天像を安置せり。
豊川稲荷 豊川停車場より下車
す。豊川町はこの稲荷より繁華に
赴きし町にして、人口二千餘、稻
荷の門前より長く店舗をつらねた
り。著名なる本尊陀积尼天を安置
せる寺を妙嚴寺といふ。禪宗曹洞
派に屬し、開基僧義易、嘉吉元年
の創立といへり。また一名豊川閣
とは故有栖川宮熾仁親王の命名し
たまふ所なり。堂宇の結構は凡て

神社に擬し、本尊を指して明神と呼び、鎮守神靈祭典等總て社祠の用語を使へり。本尊陀枳尼天は康元年間僧寒嚴義尹の作と稱し、往時は織田、豊臣、徳川諸氏の崇信も淺からざりしといふ。殿堂の建築頗る宏莊華美にして、境内に本堂、開山堂、吃枳天本殿、奥の院、萬燈堂、籠堂等あり。庭園また幽雅にして、池泉樹石の布置巧妙を極め、本尊と共に世に著名なり。ことに躑躅、牡丹の候最も見るべしといふ。祭典法會の重なるものは十月十六日より二十二日までを第一大祭とし、舊十一月十六日より二十二日までを第二大祭とし、賽者陸續として群集し、爲めに汽車は臨時列車を發するにいたる。まことに、豊川線はこの寺あるがために敷設せられしといふも過言に非ざるなり。なほ豊川停車場前に三明寺辨財天の五主塔あり。名所圖會にいふ「寶曆の頃まで牛久保西島の稻荷社に參詣人多かりしが、この稻荷より豊川の平八狐が許へ婿をつかはしたるより、豊川の方繁昌し、西島稻荷はいたく衰ふ」

●**砥鹿神社** 一の宮停車場より下車すべし。文武天皇大寶年間の創建にして、大己貴

神を祀り、今、國幣小社に列す。由來三河の一の宮と稱し、境内廣く、老樹森々として、神威自ら高きと覺ゆ。祭事は五月四日を大祭とし、別に一月二月の小祭あり。本宮は上方本宮山の頂にあり。俗に呼んで峰の社といふ。

●**本宮山** 砥鹿社の北に峙立し、標高二千五百尺。雜樹森然として繁茂し、山中奇岩怪石多し。本宮の名は砥鹿社の本宮を鎮せるより起る。近傍諸山の上に屹出し、觀望また雄偉なり。駿、遠、三、尾の山河は皆これを眸中に收め得べし。一の宮の南方上表山より一里半にして、山頂に達すべし。

●**牛の瀧** 東上停車場より約八町の所にあり。瀧の高さ六十餘尺。溪澗藍を湛え、兩岸奇巖相列びて、松樹繁茂し、また一偉觀なり。

●**新城町** 南設樂郡役所の所在地にして、人口三千を有し、豊川の西岸に位せり。停車場の東南六七町なる豊川上流の沿岸には、櫻淵と稱する櫻花の名所あり。花時は櫻花碧流と相映じて、美觀なり。また對岸に蜂の巢岩と稱するものあり。無數の小孔を

穿てる奇石なり。

鳴澤瀧 段戸山の南麓にあたり、瀧のかゝれる山を澤戸山といひ、川を鳴狭川といふ。一二三の三段に分る。三の瀧の長六十尺にあまり、幅九尺にして、断崖の上より落下し、四邊飛沫霧の如し。瀧の上方や、平らかなる所に不動尊の堂あり。老松楓樹鬱蒼して、夏時涼氣掬すべし。

野田城址 新城停車場より二十町にして達すべし。野田は千秋村に屬して、設楽谷の入口にあたる。城は永正年間の所築にして、天正中城主菅沼新八郎定盈伴りて武田信玄に降り、月夜短笛を吹きて信玄を襲し、油断に乗じて鐵鉈を發し、信玄をして致命の大傷を負はしめたる有名の城址にして、今の根古屋の地、その城址にあたりといふ。大槻盤溪詩あり『驚倒暗中跳銃丸、野田城上笛聲寒、誰知七十二疑冢、不似一棺湖底安』

茶臼山 川路停車場より十町の距離にあり。長篠役に織田信長が本營を置きし遺跡なりといふ。

長篠古戰場 豊川線の終點なる長篠停車場より十町の地、岩城附近はその古戰場に當れりといふ。天正三年織田、徳川の兩將が、長篠城主松平信昌の援軍となりて、武田勝頼を撃破せしは史を讀むもの、均しく知るところ、武田の名將勇士多くは此所に敗死して、武田の家運はまた起つ能はざるに至りしなり。長篠城址は今なほ美和川岩代川合湊の地點崖上に存し、その北方の丘陵は勝頼の陣營を張りしところといはる。山水清爽の間、往年の城跡壘址を指呼するもの、誰が感慨無量たらざらん。戦没將士の殘冢、また多く丘阜流水の間に存せり。鳥居強右衛門の墓は信貴村字有海にあり。強右衛門の礎せられし所といふ。

風來寺 南設楽郡の東北風來寺山の山腹に位し、豊橋より九里十五町、長篠停車場より一里二十町は隔つ。同停車場より山麓門谷まで人力車を通せり。その道路寒狭川の流域に沿ひて、行々一の瀧、二の瀧、三の瀧あり。川に別れて阪路に就き、登ること

一里にして門谷に達す。芭蕉阪中の吟なるものあり『木枯しに岩吹きとばす杉間かな』
 また門谷に一宿して『夜着ひとつ祈り出して旅寝かな』門谷より橋をわたり、樓門に
 入りて石階を躋ること九町、一町毎に石標あり。且つ道の左右には老杉翁鬱として日
 光を遮り、僧坊その間に點在す。寺は推古帝の勅願によりて僧利修の開創に係り、爾
 後文武天皇の御宇大寶年間に造立せしめ給ひしものにて、煙巖山と號し、天台、眞言
 の二宗を兼修せり。寺域一萬九千餘坪、三河第一の靈場たり。境内に本堂、開基堂、
 常行堂、三層堂、鏡堂、鐘樓等をはじめ、數多の堂宇山湖に點在し、就中開基は飛
 驒匠の造營にかゝり、三層塔は源賴朝の發願により、梶原景時の建立せしものなりと
 いふ。諸堂の上方に東照堂あり。殿宇最も壯麗にして、一山の偉觀を極む。寺地は前
 面石垣を以て築きあげ、背後は老杉翁鬱たる山を負ひて、颯目頗る佳絶なり。なほ山
 中奇勝夥しく、奥の院、六本杉、勝岳院、隠し水、高座石、巫女石、尼行道、行
 者返り、猿橋等の諸名跡ありて、皆それらの物語を有せり。松高院の下に妙法瀧あ

り。長け五十尺に餘り、兩崖磊塊、天工の妙を盡し、飛瀑それにかゝりて、殊に點綴
 の宜しきを得たり。推して以て風來寺山中の一絶勝となすべし。山の高さ五百九十米
 地質火山岩よりなるといふ。

風來寺より同寺と並稱せらるる遠州秋葉山に巡る道あり。東行八里餘にして、大野、細川、巢山、神澤、熊
 村石村を過ぎ、天龍川を渡りて、月倉より秋葉山にのぼるものとす。その間もとより、人車を通ぜざれど、
 山湖の風物甚だ奇なり。殊に巢山の西南十數町の地に前出阿寺の七瀨あり。むかし、風來寺の盛大なりし頃
 は秋葉、風來めぐりとて、この道を通ずるもの多かりしが、秋葉三尺坊の可麗齋に押され、近世風來寺の衰
 運に向ひしより、道路また荒廢に歸して、寂寥たり。

川合 今、三輪村と呼べり。同村明神山に奇石多し。山は海拔四千九百餘尺の高峯
 にして、脈絡線繞し、西北より南東に連亘すること約一里半、山中凡て巖石にして
 絶壁峻々として屹峙す。中に、乳岩、胎内竇、岩橋等の奇石あり。

段戸山 段嶺村大字田峰の北方にあり。國內北部の高嶺にして、西方加茂郡の出來
 山に連結す。その最高所は四千二百尺に及び、山谷數里に蜿蜒せり。山は良材を多く

産し、十數里の間笈を利して、寶飯郡の前芝港に運搬すといふ。また村麓に段戸牧馬場あり。

田口 田口町は山間の一邑にして人口二千を有し、飯田街道に當る。大字田口に福田寺あり。應永年間の創建にして、上杉朝公の開基にかゝり、臨濟宗を奉ず。本尊は行基作地藏菩薩にして、境内に武田信玄の墓あり。信玄野田に傷きてこの地に歿すと。また長篠役に戦歿せし馬場美濃守の墳、この寺にあり。五輪塔一基、古色掬すべし。且つ地域高燥にして、風光佳なれば、好古の士は宜しく一訪して憑弔の意を表さるべし。また田口村大字清崎の宮の所に一鑛泉あり。炭酸性泉にして、常溫四十九度、無臭淡黄色なり。今、北設樂郡はこの田口に郡衙を置けり。地は山間僻遠の村落にして、伊奈街道はこれより信濃の飯田に通せり。

夏焼鑛泉 稻橋村大字夏焼に在り。本村の通衢を距ること凡そ二町許り、淺間神社の側なる岩罅より湧出し、笈を架して之を浴槽に導く。無臭無味淡黄色の炭酸冷泉にして、多量の炭酸及び鹽酸を含み、常溫五十三度、浴客は毎年平均三千人の外に出づと云へり。

○東海官線沿線 豊橋より御油に至りて、豊橋平野を離れ、暫らく海岸近き丘陵の間を過ぐ。衣ヶ浦の晴波處々に隱見す。蒲郡驛は海山の勝にすぐれたるを以て名あり。又海水浴あり。これより汽車は幡豆郡の東部に連る小丘陵脈と寶飯額田兩郡の界を成せる小丘陵脈との間をすぎ、北向して岡崎平原に出づ。全く海と離れ去る。幡豆の一郡は矢作川の灌漑するところにして、矢作川の古水路は其中央を貫流し、他郡と異なる一種の發達を成し、西尾町その西部にあり。郡役所を其地に置く。鐵道線路は岡崎をすぎ、碧海郡を一直線に横断して、尾張に入る。舊東海道は其北に並行し、其間大凡一里を距つ。碧海郡に於ては、知立町其の主邑たり。

前芝海水浴 豊橋の西方二里、豊川川口の北岸にあり。地の海岸よりは竹島、大島小島、姫島、佐久島、日間賀島等を眺むべく、旦夕の風色甚だ佳なり。關西地方より

の旅客は御油停車場より下車するを可とす。その間一里。

●**國府町** 豊橋の西北に當り、東海國道の一驛なり。人口一千九百。御津村の御油停車場より馬車の便あり。地は昔時國府廳の所在地にして、その遺跡今湮滅せるも、字的堀に守公神社と稱する鎮守祠あるは國家擁護の爲め勸請したるものにして、その地は即ち往古國守として來任せし藤原豊成の宅址ならんかといふ。また國府町の東北半里、平幡村大字八幡に國分寺址あり。聖武帝朝建立國分寺の一にして、往時は境域方八町に亘り、七堂伽藍巍々たりしも、後世廢絶し、永正年中僧機外わづかに再興して今國府庄山と號し曹洞宗太源派に屬せり。

●**財賀寺** 陀羅尼山と號す。眞言宗を奉じ、平幡村字財賀にあり。僧行基の開創、弘法大師の中興にかゝり、空海自畫の像、力珠姫の持念佛なる文珠像、文覺上人畫不動像を寺寶とせり。寺はまた三河七御堂の隨一なりといふ。

●**西明寺** 同村字八幡にあり。長徳年間大江定基の開基にして、多田滿仲の持念佛像

を本尊とす。後ち最明寺時頼この寺に寄寓して、最明寺と號せしが、延徳中徳川家康の命により今の寺號に改めたり。寺は御油を距ること七八町の所にあり。

●**御油町** 寶飯郡役所の所在地にして、豊橋を距ること二里二十三町、人口約一千五百を有せり。停車場は南方一里、御津村字西方にあり。御油の名は上古持統天皇の宮路山に駐蹕したまひしとき、この地より油を獻じたるより起れりともいひ、また油を獻じたるは持統天皇にあらずして、草壁親王なりともいへり。字膳の棚に踊山神社あり。村社にして毎年舊六月二十四日を以て例祭を執行す。社記によれば建仁年中藤原俊成の創建にして、もと蒲郡にありしを文安元年今の地に徙せるなりと。末社九祠のうち、八面社はもと楠神社といひ、また稻荷社は字河原畑にありて、俗に畑中の稻荷と稱せり。

●**狐屋敷** 御油の古城址にして、永享年間稻石光朝なるもの此所に築城してその子孫居れりといふ。東西六十間、南北百間ばかり、今なほ濠湟の遺形らしきものを存す。

十返舎一九の膝栗毛に赤阪の松並木にて、喜多八野狐を恐るゝの事あり。蓋し、この附近街道に材を取りしものなるべし。

東林寺 御油今齋に在り。浄土宗西山派にして招賢山白蓮院と號す。永享年間龍日月藏の開基せし所に係り、本尊は矢作の里より遷せし天竺佛にして、舊と金高長者の女淨瑠璃姫の念持佛なりし者なりと云ふ。古へ徳川家康岡崎の城に在るの日放鷹の途上駕を當寺に枉げたることありといへり。

鳥居松 御油の内字遠見山の頂きにあり。松樹自ら華表の形をなせるを以て名あり。傳へていふ、昔家康公の臣林孫八郎東三河の先鋒たりし時、常に遠見のものをこの山に置きて敵の兵機を察せしめ、この地より岡崎城に至るまでの間、凡そ九ヶ所に釣鐘を排置して遞次相通じ、終に以て城中に傳達せしめたりと。

御津神社 俗に船洲明神といふ。御油停車場より三町にして、御津村字廣石にあり。縣社に列し、仁壽年間の創建にして、大國主命を祀り、本殿の神額是有栖川熾仁親

王の御眞筆に成れり。また俚俗當社の神詠と傳ふる和歌に曰く『大島や千代の松原いしたゞみ崩れゆくともわれは守らん』と。今、御津山の南麓に岩壘ありて、その地に本社の別宮を鎮し、岩壘のあらしと稱せり。社はまた南に海灣を望んで、景勝の地なり。

大恩寺 御油停車場より八町、大恩寺山にあり。浄土宗を奉じ、往時は塔頭十三院を有し、參河屈指の巨刹なりしも、今や、衰運に向へり。寺域に徳川一門及び戸田采女正以下の墓あり。また近年金作りの鰐口をこの地より發掘せりといふ。

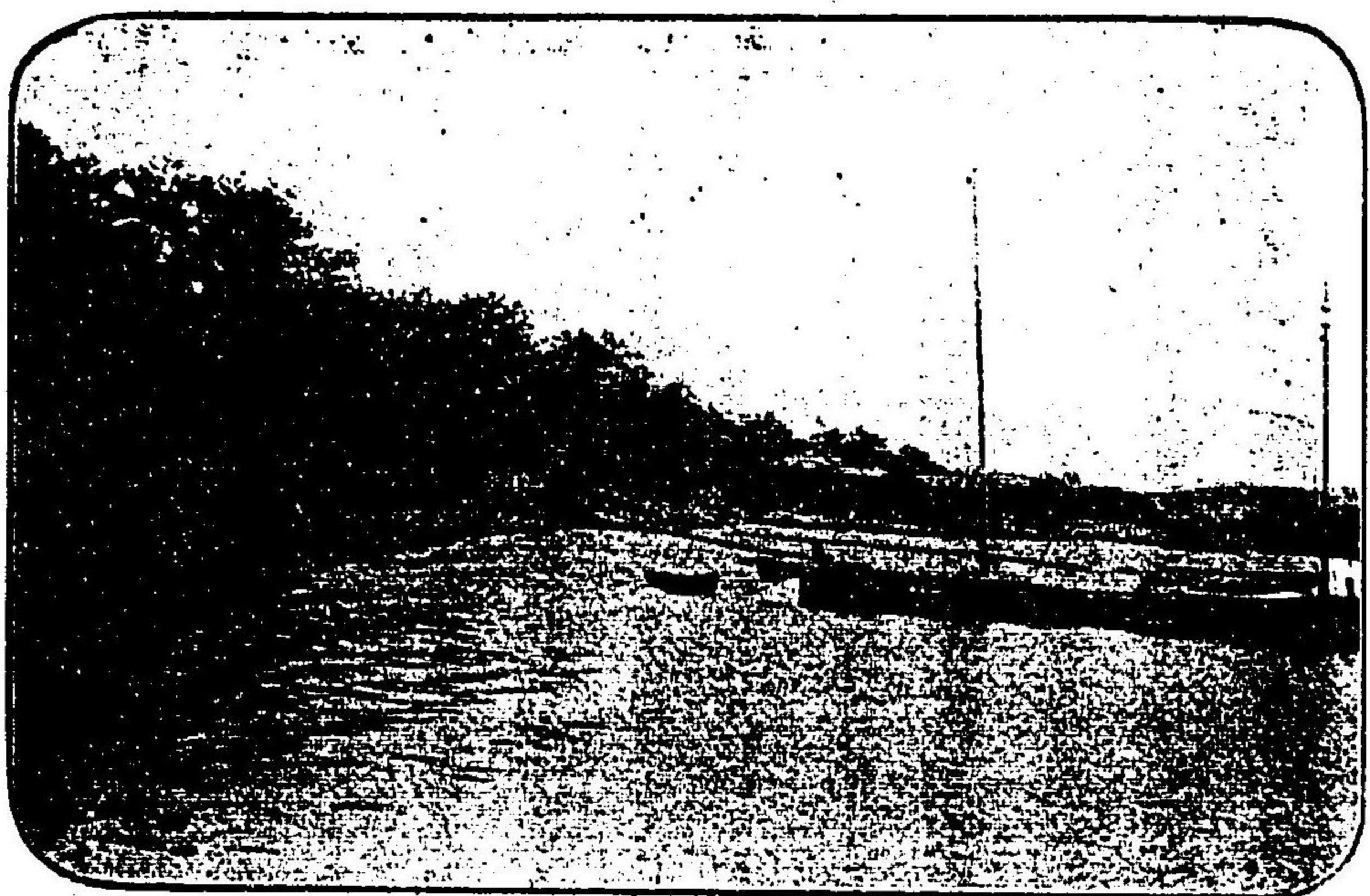
新宮寺山 同停車場より十二町の地にあり。海灣山川の展望に富みて、山頂に日清役戦死者の碑あり。また山の眺望臺はこの附近に有名なるものなりといふ。

御馬海水浴 同停車場より九町、西御馬村にあり。なほ御津の西方にも海水浴場の設備あり。

宮路山 寶飯郡赤阪より御津に跨がれる高山にして、海拔四千六十二尺、大寶二年

持統天皇當國巡幸の際この山を以て行宮に充て給ひしより宮路の名あり。今、山頂に二の丸と稱する平地あるもの即ちその遺址なりといふ。また山頂に宮道天神の本殿あり。天神は村社にして、その拜殿は遠く二十町を隔てし山麓に建てり。もと天武帝の御宇草壁皇子の草創と稱す。皇子の宮址は山中の一峰、嶽ヶ城にあり。その峯に登れば隣邦十二ヶ國は悉く眸中に集りて眺眺頗る佳なりといふ。山はまた紅葉の名所にして、保元の頃藤原師長の當山に紅葉を賞しまた平宗盛のこれに登りしことは源平盛衰記以下の書に見えたり。今も晩秋登臨の客頗る多しといふ。山に烏帽子岩、車引、汲水堂等の名勝あり。奇蹟また妙なからずして、御輿休石、藤の棚、三足龜、片葉石莖、三葉楓等の特産あり。御油停車場を隔つこと二里、その間馬車及び人車の便あり。

●●●●●
 浦郡海水浴 浦郡停車場を距ること南七八町にあり。その地三面翠巒をめぐらし、一面渥美灣に臨みて、左右に渥美知多の兩半島を控へ、前面竹島、大島、佛島、龜岩等の島嶼を眺め、その風光の明媚なる真に瀬戸内海にゆづらすといふ。加ふるに灣内



三 河 浦 郡 海 岸

波靜かに潮水清澄なれば、夙に海道の海水浴場として聞ゆ。單に汽車にて通過するもその景勝は東海道中稀に見るの佳景たり。衣ヶ浦の碧波は來りて車窓に展げ、前面に羅列せる島嶼間には白帆の點々として深碧の海波に掩映するあり。彼方渥美半島の小山脈には白雲搖曳して旅客の眼を樂しましむるあり。その景、その境、一度この線路を過ぎたるもの、決して忘るゝ能はざるものたり。附近また名勝多く、涼の森あり、戀の松原あり、舟に賃して島廻りをなすもまた興深かる業なり。竹島の翠松中に辨財天

あり。江州竹生島、相州江島、藝州宮島等と共に海内七辨天とさへ稱へられしもの、旅客一度は必ず賽すべきものたり。竹島の西方龜岩には海水浴ありて、旅亭の設置あり。蒲郡はまた冬季海水温泉の便もありといふ。停車場前の出船場よりは、鳥羽二見ヶ浦、師崎等に日々往復する汽船あれば、旅客はこの便によりて伊勢參宮するも一興なるべし、而してその航路は波濤ゆるやかにして、風波の憂ひあることなし。

尙ほ蒲郡海水浴場より訪ふべき名勝としては、停車場より西南二里に三河第一の名勝ともいはるゝ三根山觀音寺あり。またその西一里餘の海岸に宮崎神社、宮崎海水浴あり。この項後に詳説すべし。

西郡城址 蒲郡停車場より十町、西郡の地あり。もと今川氏眞の臣鶴飼長助の居城なりしが、永祿年間徳川家康の兵火に焼かれて廢棄し、今わづかにその遺址を存せり。

赤阪町 東海道五十三驛の一次にして、御油の西北十六町にあり。この地昔時は『招婦』を以て著はれ、維新前までなほ妓樓の設けありしといふ。東海鐵道布設され

てより漸次衰へ、今さびしき町並なり。地に五井外記の古城址あり。且つ白鳳中より長徳年間にいたるまで、草壁皇子歴世の領地なりしを以て、同皇子に關する舊蹟尠なしとせず。芭蕉曾てこの地を過ぎ、句あり『夏の月御油より出で、赤阪や』と。

長福寺 三頭山と號す。淨土宗鎮西派に屬し、赤阪町字西裏にあり。寺傳にいふ、昔一條院の御宇三河の長者宮路長富その女力壽の死を傷みて一字を創建し、大江定基の寄進になれる惠心僧都作聖觀音像を安置せり。後興亡一ならず、大永二年に及びて淨土宗の僧善與慶印上人再び宮路町の宅趾に堂宇を建立し、以て今日にいたれり。而して寺の上方に女臚石なるものあり。傳へていふ、大江定基三河の國守となりて久保村にあるの日、前出宮路長者の女力壽を寵愛すること切、而して任滿ち京に歸へらんとするや、力壽離別を惜んで悲嘆止まず、終に自ら舌を嚙んで死す。定基痛哭死體をまもること一七日、即ちこれを山頂に葬りて墓を建つ、女臚石は即ちそれなりと。而して定基これより厭世の心を發しその京に歸るや、直ち叡山に登り、惠心僧都に就

いて僧となり、名を寂照と號す。後入宋して清凉山にいたり、遂に吳門寺に留まりて死す。世に圓通大師と稱へ、名を異朝に轟かせしはこの人なりと。東關紀行海道記等この事を弔ふ記事あり。海道記にいふ『やはぎを立ちて赤阪の宿を過ぐむかしこの家の遊君、花顔春こまやかにして、蘭質秋香ばしき女ありけり。契りを三州の吏、妻妾にむすべり。妾は良人に先んじて世を早うし、良人は妾に後れて後を出づ云々』。赤阪は古來情事の巷、今化して淋しき田舎町となる。地を過ぐるの旅客必ずや多少の感慨なくむばあらず。

●正法寺 長福寺と同所にあり。太子山と號す。眞宗にして、寺傳にいふ、昔聖徳太子諸國を遊化して偶々此地に來り、自ら木像を刻して草堂に安す。後弘仁七年僧萬卷こゝに至つて病死す。こゝに於て同僧の法弟等謀つて、寺堂を建て同人を以て開基とせり。爾後源範頼の長子範圓こゝに居り、たま〜親鸞上人のこの寺に來つて滞在するや、範圍いたくその説に服し、遂に請ひて弟子となり、名を了信坊と改たむ。これ

より了信坊を以て中興の祖となす。

●萩村 萩村は赤阪の北方や、東によれる所にあり。龍源寺は同村字大門にあり。虎岳山と號し、曹洞宗にして、建久年間伊豆河津祐義の孫伊東六郎の開基創建に係り、後明應中僧周鼎これを中興せりと。西に隱虎洞、東に降龍池なるものあり。共に中興僧の古蹟を傳へ、且つ寺寶に龍齒と稱するもの一箇あり。萩村の山間に二瀑あり。一を長根瀧と稱して、高さ二十五尺を有し、字瀧澤にあり。樹木四邊に繁茂して避暑によろしく、夏時來遊者多し。一を萩澤の瀧と呼んで同じ名の字にあり。高さ二十五尺を有して、眺望一條の白布をかくるに似たり。水源を萩澤口に發して、下流山陰川に入る。

●立信寺 長澤村字金山にあり。長澤山吉祥院と號し、淨土宗に屬して、文永九年の草創なり。本尊阿彌陀像は惠心僧都一刀三禮の作と稱して因縁深し。また堂内の聖觀音は僧行基の作と稱し、河原佛は惠心僧都の作圓光大師の再開眼と傳へ、共に尊き。

佛像なり。

岩路寺城址 長澤村字御城山の本城と稱する地にあり。もと松平三河守の居城なりしといへり。また地の東南に小屋ヶ澤と稱する谷あるは、むかし草壁皇子の敵兵に追はれて潜匿したまひし舊地なりと傳へ、なほ附近に天子の入、關白の入、以下の入等の字あるも、これに因由するならんといへり。また長澤村の鳥屋が根城は永祿中今川方の勢これを守りて徳川家康に攻陥せられし古戰場なり。

歌例ヶ岳 宮路山の山嶺にして、長澤村字東霧山にあり。山頂、南を望めば渥美灣の風光ことごとく眸中に撰まり、水光山色相掩映して顧盼皆佳ならざるなし。山また紅葉を以て名あり。秋季錦繡の頃にいたれば幽人の杖を曳くもの勢なからずといふ。

長澤村三瀑 長澤村に三瀑あり。一は字下谷下にかゝりて。螺ヶ瀧と稱し、落下三十尺を有せり。一は字八王子にありて、不動ヶ瀧と稱し、高さ二十二尺を有せり。他は三瀑中の尤にして、孟宗ヶ瀧と稱し、字金山にかゝりて、直下三十五尺幅二尺を有す。尚ほ長澤村の西千束に鰻塚なるものあり。里俗傳へて阪上田村磨に亡ぼされし巨鰻を葬むる塚となす。

法藏寺 二村山と號す。御油より二里、本宿村にあり。淨土宗に屬し、大寶元年行基菩薩の創建、聖觀音大士を本尊とせり。觀音は文武天皇皇后の祈念佛にして、曾て出生寺の名を賜ひき。鐘樓の傍らに日本武尊の遺跡なる嘉勝水あり。また草紙掛松あり。徳川家康幼時この寺に於て書を教翁洞惠に習ひ、その草紙を掛けたる松なりと傳ふ。寺に室什多く、家康の甲冑、源義家の甲冑、吃又平の畫枕屏風、本多作左衛門の書下馬札、太古の風鐸、天國御守劍、清康自注唐本大學、矢田姬化粧具、松平權兵茶子鎗、光明天皇勅額、後花園天皇宸筆、今川義元制札、豊太閤制札、親氏自筆願文等あり。大林寺、大樹寺と共に最も徳川家に由縁ある寺と稱せらる。なほ本宿の背後に二村山あり。古來その名を傳へられたる嶺にして、十六夜日記にも『村山を越えて行くに

野も山もいと遠くて、日もくれはてぬ。はるくくと二村山を歩きすきてなほ末たどる野邊の夕闇。』と載せたり。

廣忠寺 曹洞宗に屬し、龍谷村大字桑谷にあり。徳川廣忠の開基にかゝり、神君の弟惠最和尚を開山とせり。時域後に山を負ひ、前に一條の清流を帯べり。

藤川 東海道の一驛にして、むかしは宇治川とも呼べり覽富士記『誰かすむ都のたつみしかはあらでこや東路の宇治川の里』芭蕉『こゝも三河むらさき麥のかきつばた』古來紫麥の産地と見えたり。

本宗寺 藤川の西北二十町、美合村にあり。龍登山と跪し、眞宗を奉ず。境内廣潤にして、舊時は堂宇十五ヶ所を有せしも、明治にいたりて悉く破壊し、今は本堂、庫裡、新書院、山門、玄關、鐘樓のみ存せり。寺傳に曰ふ、文明年間本願寺蓮如上入本郡の土呂郷に曳錫し、滯寓すること三年、遂に本宗寺を建立し實圓僧都を以て住職に任じ勅許院家たり。之を日本眞宗末寺の上首とす。是時に當り當國眞宗の僧徒等兵

を構へ家康に抗す。家康怒りて宗門を絶滅せり。然るに石川日向守の母妙西尼は家康の叔母なり。深く當寺の絶滅を悲み家康に哀訴して再興を請ふこと甚だ切なり。家康乃ち之を許し命じて再興し朱印を與ふ。時に天正十二年なり。堂の東南は萩山に對し、西南は小豆阪を望みて眺望最も開豁佳絶なり。春稍と閑はなる頃には、躑躅花競ひ開きて頗る美觀を呈すといふ。

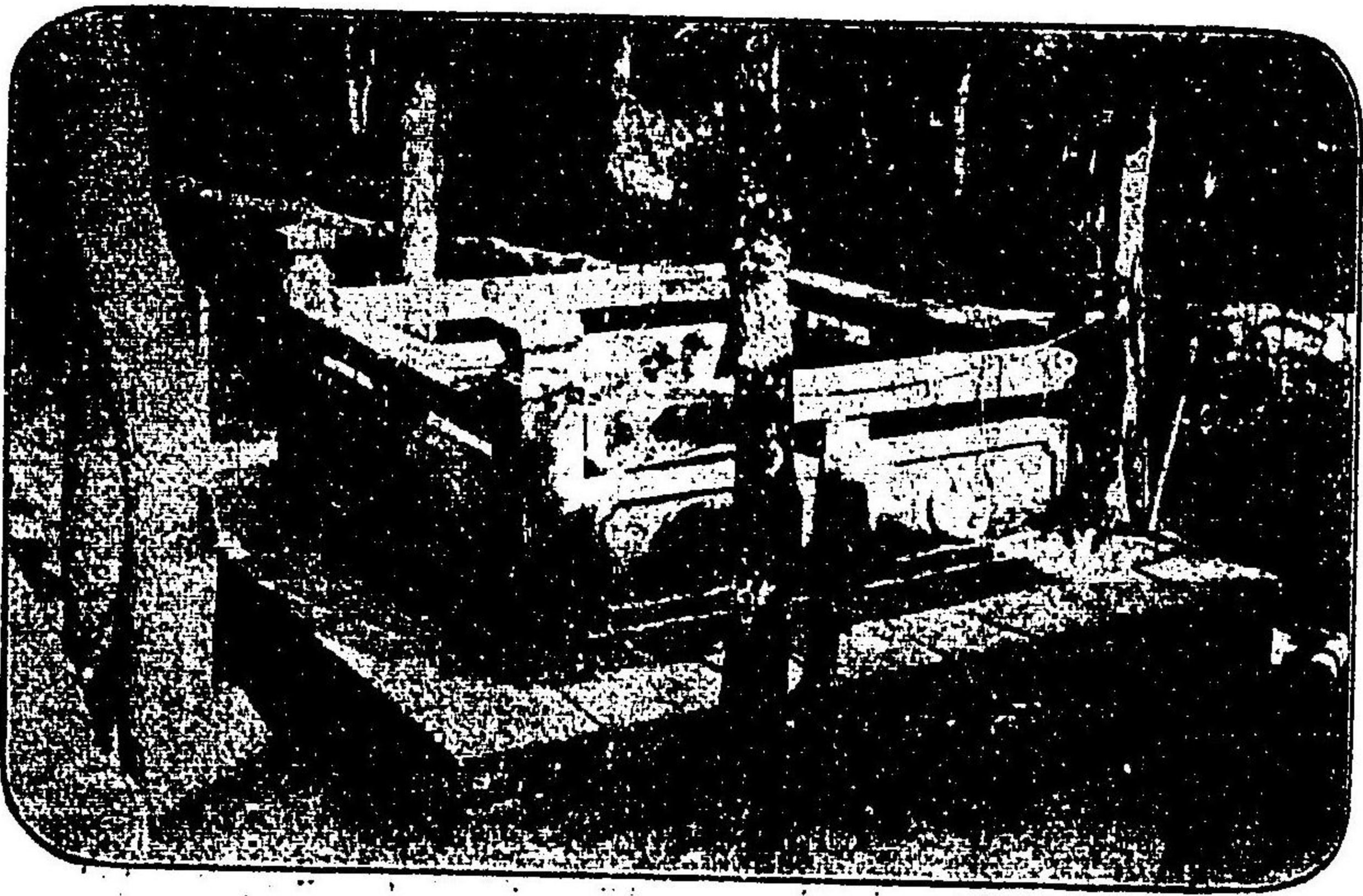
小豆阪古戰場 小豆阪一に厚木阪に作る。美合の西南半里のところにある。天文年間今川義元織田信秀とこの地に戦ふ。今川方の先鋒は朝比奈泰能にして、織田の先鋒は織田信廣より。織田方は西より上り、今川方は東より入る。此時小豆阪七本鎗といふことあり。津田信光、織田信房、下方匡絶以下の七騎これなり。また承祿六年には徳川家康の勢と勝鬚寺の一揆との接戦この地に於て行はれたりき。

小美 岡崎町の手前一里の所にある村落なり。村は大平川の流に沿ひ、老松生茂りたる兩山の間に挟まれて、清瀬甚だ急に香魚多く、また山間の一仙境なり。近傍丸

山附近に古墳多しといふ。

勝鬘寺 岡崎のうち字針崎にあり。岡崎停車場より五町。永祿年中一向新宗の徒數千人渡邊某を首領として、寺を城廓に擬して立籠り、徳川家康に叛きたる三河三箇寺の一なり。寺域に櫻樹十數本あり。花時行遊の士少ならずといふ。

岡崎町 は西三河唯一の都邑にして、戸數四千五百、人口一萬九千を算せり。停車場は町の南方約半里、字羽根にありて、町まで鐵道馬車を通ず。地は徳川氏勃興の所として頗る著名に、關ヶ原役後維新前にいたるまでは、本多氏五萬石の城邑たりき。矢作川その西を流るゝを以て、水運の便多く、昔時その旺盛三河に冠たりし時に比すればやや衰微の趣あれど、なほ豊橋と並び稱して三河東西の二都邑たるを失はず。額田郡役所、岡崎區裁判所及び名古屋地方裁判所支部、愛知縣第二師範學校、第二中學校等の建物あり。名産としては八丁味噌、松茸罐詰等あり。殊に八丁味噌は古來その名高し。また三河萬歳は起源をこの地に發し、繁き小唄に『岡崎女郎衆よい女郎衆』たる節



(岡崎公園) 東照宮産湯の井

調あり。岡崎の名はむかし西郷禪正この地に築城の時、地形躍龍に似たりしかば、就れが『尾』か『頭』かといへりしに起因すといふ。菅茶山詩あり『松間指鷗尾、城入晚江中、驛馬橋聲鬧、津樓筏影叢、遙峰低大野、平楚迥長江、照代開基地、山河鎮鬱葱』岡崎城址 龍城とも稱す。康正町にあり。今開きて公園となす。城は永和中松平泰親の創建にして、徳川家康は實にこの城中に於て呱呱の聲を挙げたりといふ。今なほ家康産湯の井あり。地はまた高丘にありて、最も眺望に富み、矢作、太平の二流を眸中

に收め、岡崎全市の瓦葺を脚下に瞰み得べし。殊に櫻楓多ければ、春秋の候杖をひく
に佳なり。産湯井の傍らに東照宮あり。郷社にして、家康を祀り、毎年舊四月十七日
の大祭は甚だ盛んなり。林春齋曾て岡崎城と詠じていふ「累世先君多戦功、岡崎城
廓登蒼穹、國家根本從茲始、欲唱幽風歌大風」
岡崎天満宮 岡崎町大字中村にあり。郷社にして、建保二年の創建にかゝり、道臣
命及び菅原道實を合祀す。社境東に遠く本宮山を望み、北は六所山に對して、風光
頗る佳なり。

甲山寺 岡崎町の東北六俣にあり、天台を奉じ、また地の二巨刹なり。

隨念寺 岡崎町の東北にあり、淨土宗を奉ず。

松應寺 町の北西能見にありて、同じく淨土宗に屬せり。

伊賀八幡宮 町の北伊賀にあり。

大林寺 岡崎町の西八帖にあり。淨土宗西山派にして、明應二年松平頼嗣の創建良
俣上人の開基なり。境内に本堂、方丈、客殿、勸學所、庫裡、土藏、鐘樓、山門及び

安養院、正受院、安勝院、福正院、受福院、運正院等の寮舎あり。また寺内に松平頼
嗣、同信貞、同廣忠、母子の墓あり。推して以てこの地の一大名刹となすべし。

是字寺 瀧海寺と稱する曹洞宗寺にして、三島村大字明大寺にあり。寺記にいふ家
康公の祖松平清康岡崎にありし時、正月元旦の夢に左手に是の字を握ると見たり。覺め
てこれを奇とし瀧海寺の住僧模外をして占せしめしに、是の字には日の下の人なり。
恐くは卿或は卿の後裔に天下を握る人あらんと。清康大に喜びてこの寺を創建し寺領
を寄附せりと。現存の堂宇、本堂、庫裡、書院、表門、觀音堂、白山社、地藏堂以下
十箇あり。また同村に潮釜六所神社及び明大寺城址あり。城址は西郷彈正の築くとこ
ろといふ。

高隆寺 岡崎の西方高隆寺村にあり。天台宗を奉ず。

瀧山寺 岡崎の西北十町、常盤村にあり。天台に屬す。役小角の開創と稱して、當國
の一名刹なり。山を瀧山といひ、中に一條の溪流を挿みて流域に沿ひ村落をなす。寺

の入口に仁王門あり。飛驒の内匠の築造と傳ふ。更に數町にして、一小丘あり。その石階をのぼれば頂きに達す。本堂には薬師如來を安置し、傍らに東照宮祠あり。また一瀑あり。

●●●●●
大樹寺 岡崎停車場より一里半を隔て、町の北方大樹寺村にあり。曾て家康今川義元に破られて、この寺に隠れしことありといふ。永祿六年一向門徒の一揆起るや住僧登譽家康に味方して大功あり。また寺寶吉瑞貫木は僧素堂といふものこれを以て敵數十騎を斃し、家康を守護して凱歌を奏したる吉瑞の兵器にして、參詣者の乞ふにまかせ随意に縦覽せしむるといふ。開基は浄土宗の僧勢譽にして、文明年間松平親忠これを創建せり。

●●●●●
圓福寺 大樹寺村の北方岩津にあり。浄土宗西山深草派の總本山にして、法然上人刀彌陀、觀音、勢至の三尊を以て本尊とす。寺境北は猿投山を負ひ、西は濃、江等の諸山相羅列し、而して矢作川の清流一條山を抱きて走る。月夜扁舟を裝うてこの地に遊

べば妙味言ふべからざるものあらん。

圓福寺緣起にいふ、開祖圓空立信上人は、大和十市國源行綱の孫にして、洛西三鈷寺彌天鑑智國師に師事し、建長三年國深草に一寺を創立し、深草山眞宗寺と號す。後嵯峨天皇圓空の學徳を嘉みして數々法義を問ふ。後深草天皇も亦た信すること篤く勅額を賜ひ官寺とす。攝政藤原政通も其僧糧を資く。永仁元年火を失ひ烏有に歸し、二世顯意上人新に大和の十市郡に遷營す。徳治元年三世覺空上人相謀りて、京都猪熊綾小路に相し更に再建す、花園天皇乃ち勅して寺號を改め圓福寺と云ふ。後ち天正十三年豐巨秀吉山城の深草村に朱印を與ふ。又延寶年間繪旨を賜はり、紫衣を着するを許され、實に一大名利なりしも、元治元年の兵燹に罹り、諸堂悉く焼失し、尋で寺領を返上し唯だ二百十六坪を有するのみに至れり。今時の住職太田麻空先徳の漸盛せんことを慨き、之を再興せんとするも境内狭少なるを以て未利と議し、三河國額田郡岩津村妙心寺と名稱を交換し、妙心寺は京都に移り、圓福寺は妙心寺の跡に來り移る。時に明治十六年十月五日なり。後ち漸次に開祖廟、方丈、庫裡勸學院等を新築し、頗る見るべき者ありと。

●●●●●
信光明寺 同村にあり。文明年間松平信光の創建に係り、浄土宗にして、慈覺大師刀阿彌陀如來像を本尊となす。本堂、釋迦堂、開山堂、神殿、惣門、山門、書院、方丈、寶庫、庫裡、等あり。什寶には釋迦立像、後土御門院の勅願繪旨、後柏原天皇の賜

紫綸旨、善導大師の畫彌陀如來、圓光大師の書六字名號、春日畫十三佛、琢摩畫世尊像、惠心僧都の書六字名號、其他古書畫、古器物の歴史、美術、工藝等の參考に資する物甚だ多し。その釋迦堂に安置する釋迦像は傳教大師の作にして稀世の逸品なりといふ。圓福寺と並せて岩津の二大名刹となす。なほ同村眞福寺に天台の古刹眞福寺あり。

●岩津天神 圓福寺の境内にあり。一月二十五日の初天神及び舊九月二十五日の秋祭りには、參詣者頗る多く、近郷の流行神なり。

●矢作川 一に矢矧川に作る。三河第一の大河にして、源を美濃國惠那郡阿賀瀧山に發し、三河に流れ來つて足助川を合し、岡崎町の西を過ぎ、碧海郡河野、川島の東部に流れて前濱新田にいたりて海にそぐ。新田義貞この河に於て高師泰と戦ひまた平氏が源行家をこの河に攻めしこと、源平盛衰記に見えたり。

●矢作橋 海道著名の長橋にして、岡崎城址外にあり。木橋にて延長約二百八間、む

かし豊太閤が少時日吉丸と呼びしとき、この橋上に臥して蜂須賀小六に邂逅せしはよく世人の知るところなり。下流、岡崎、安城兩停車場間に鐵橋を架せり。

太平記卷十四、矢矧河原圍の條にいふ「さる程に十一月廿五日卯の刻に、新田義貞、脇屋義助、六萬餘騎にて、矢矧河原に推し寄せ、敵の陣を見渡せば、その勢二三十萬餘騎もあらんと思しにて、河より東橋の上下三十餘町に打ち圍みて、雲霞の如くに充滿たり。義貞、長濱六郎左衛門尉を呼びて、この河いづくが渡りつべき所ある委しく見て參れと宣ければ、六郎左衛門只一騎、河の上下を打ち廻り、やがて馳せ歸りて申しけるは、この川の様を見候に、渡りつべき所は三ヶ所候へども、向ふの岸高くして屏風を立てたるが如くなるに、敵陣を汰へて支へて候。されば此方より渡りては中々に敵に利を得られんと存じ候。只且つ河原面に御警へ候ひて、敵を欺き誘き寄せんに、などが勝つことを一戦に得ては候ふべきと申しければ、諸卒皆この儀に同じて、わざと敵に河を渡させんと、河原面に馬の懸場を築し、西宿の端に南北廿餘町に警へて、射手を河中の洲崎へ出し、遠矢を射させてぞおびきける。案に遠はす足利勢上の瀬を打ち渡りて諸々より打ちかゝる。義貞はかたてより馬廻りに勝れたる兵を七千餘騎圍ませて、諸軍を諫め下知せられける。敵一萬餘騎、陰に閉ぢて圍まんとすれど、圍まれず陽に開きて懸け亂さんとすれど敢て亂れず。かけ入りては討れ、破りて通れば切り落され、少も漂はず戦ひける間、人馬共に氣疲れて左右に分れて警へたる所に、總大將義貞、副將軍義助七千餘騎にて、香泉の浜を踏みて、大海を渡らん勢の如く、閑に馬を歩ませ、鋒を雙へて進みける間、敵一萬

餘騎、その勢に僻易して河より向へ引退き、その勢若干討れにけり。日已に暮れければ合戦は明日にぞあらんすらんと、鎌倉勢皆河より東に陣をとりけるが、如何思ひけん、爰には叶はじとて、その夜矢矧を引き退き、鷺坂にぞ陣をぞ取りたりける。

淨瑠璃姫墓 矢作橋の西、矢作村の慶念山誓願寺と稱する古刹にあるもの、名高き

淨瑠璃姫の墓なりと傳ふ。また橋の西畔田圃の中にありて竹林を姫の父矢作の長者の

宅址なりと云へり。むかし承安の頃義經奥州に下るの途次その長者の宅に宿し、この

姫を愛す。後、義經東國に至るや、姫愛慕惜かず。即ち附近の池水に身を投じて死す。

後ち信長の侍女小野阿通この事を仕組みて院本十二段をなす。これ即ち淨瑠璃の起源

なり。尙ほ同村に勝蓮寺あり。一向宗の宗祖上人の遺跡を傳へて參拜多し。因に矢作

の地名は往古日本武尊東征の折、この地にて矢を矧がしめたまひしより起れるなり

といふ。

安城 一に安祥あんしやうに作る。東海鐵道の通過驛にして、十年前までは淋さびしき一寒村に過

ざざりしが、愛知縣立農林學校の設立せられてより、漸次繁榮し、今、人口三千六百餘を

算するにいたれり。世に名高き三河の烟火は多くこの地より製出す。矢作村より西方三里を隔てたり。

安祥城址 停車場より十八町の地にあり。一に城森じやうもりとも呼べり。文明年間松平信光

この城を攻め、後天文十八年三月今川義元松平廣忠をたすけて、城主織田信廣を攻め

たりき。

本多父子碑 安城あんじやうにありて、同じく停車場より十八町を隔つ。父本多忠豊は享保天

文の頃數十度の激戦に殊功ありし人、息忠高は天文十八年織田信廣との戦にて、安祥

城に切死せし勇士なり。而して家康の四天王と呼ばれたる鬼平八郎忠勝は實に忠高の

子息なりといふ。碑は寛政年間大學頭林銜の撰に係りて、二基相並びて建てり。

蓮華寺 安城停車場より凡そ一里を隔て、碧海郡本郷村にあり。芙蓉山と號し、曹

洞宗にして、僧行基を開基とす。境内老松多く、遠近これを望むに一奇觀なり。春秋二

季の彼岸會に賽者多し。寺域別に景行天皇皇子氣入産命の陵あり。命は三河の國造に

任せられてこの地に薨去あらせられたりといふ。兆域七百五十餘坪、今、宮内省より監守を置けり。

●●●●●
上宮寺 志賀須香村字佐々木にあり。佐々木の地今藤野村と改む。安城驛より約一里、その間人力車の便あり。寺は太子山聖徳院上宮寺と號し、推古天皇の朝聖徳太子の草創にして、後寛元年間鎌倉四代將軍の時佐々木入道盛綱入院以來その名大に揚る。境内凡そ二千四百五十餘坪、本堂、書院、庫裡、方丈、茶所、太鼓堂、經堂、鐘樓、山門等の堂宇あり。寺寶として傳ふるもの太子作本尊阿彌陀如來像、太子の袈裟、狩野元信畫太子傳三幅、土佐光乘畫法然傳、親鸞上人手寫の涅槃經等あり。この寺はまは勝鬘寺、本證寺と共に三河三ヶ寺の一にして、永祿年間一向宗徒一揆の魁けたりしものなり。はじめ家康の臣酒井雅樂助の指揮にて菅沼某上官寺の粉を手籠にす。宗徒一千四百餘人忽ち蜂起し菅沼某を懲らし、尋で家康に反抗す。吉田城主小原資永、上野城主酒井忠尚等またこの機に乗じて、反心を抱き一揆を助けたれば、終に

西參の大騒擾を惹起せり。世或はこれを本證寺の一揆ともいふ。矢作よりこの地に至るまで道程約三十町。

●●●●●
本證寺 佐々木の西南、三川村大字野寺にあり。眞宗大谷派三河三院家の一にして雲龍山と號し、僧教圓の開基に係る。この寺の僧空誓といふもの、名代の惡僧にて一揆騒動の折の働き並々ならざりしといふ。什寶として別れの如來なるものあり。これより南方矢作川を渡りて幡豆郡西尾に達す。

●●●●●
妙源寺 一に妙眼寺に作る。中郷村大字桑子にありて、安城驛より一里二十七町、人力車を通ず。寺は正喜二年の創建にして、安藤薩摩守信清坊の開基に係り、眞宗高田派に屬す。本尊は親鸞上人自作の阿彌陀如來にして、境内の太子堂は柳堂と稱し、六百餘年前より未だ一度も梁柱を替へたることなしといへり。徳川家康本願寺衆徒と交戦の時此寺に陣し、黒本尊を信祈し遂に懇望し携へ去れり。今の東京芝増上寺に安置するもの則ちこれなりと云ふ。寺寶頗る多く親鸞上人畫法然上人像、同畫八祖眞影

及び十祖眞影、運慶作三尊佛、巨勢金岡畫太子繪傳三幅、同如來傳三幅、專心僧都異曼陀羅、宋の徽宗皇帝畫描等あり。毎年舊七月七日八日兩日の蟲干には公開して、庶人の縦覽に供すといふ。

西端の桃林 安城驛の西南二里半、西端及び東端兩村の田圃二里四方は、一圓の桃林にして花時頗る美觀なり。安城より俣を通ず。

刈谷町 境川の東岸に位し、戸數六百六十五、人口二千八百餘を有し、字花山に停車場を置けり。地は昔時徳川家康の外祖水野忠政の居城なりしが、後土井利信を封せり。白魚を以て名産となす。この地より岡崎まで四里。

刈谷城址 字城郭にあり。今の刈谷小學校の地は昔時の本丸跡にて、なほ濠溝の形ちを殘せり。はじめ天文年間水野忠政これに住み、同信元、信近、佐久間信盛、水野忠重等を経て、延享年間徳川九代將軍の時土井利信これを領し、以て明治廢城にいたる。

知立町 岡崎の西方三里二十町にあり。もと池鯉鮒の文字を以て記せし地、烏丸光廣卿の曙記にも『池鯉鮒にて御肴に鮒の見えければ狂歌す』とはし書して『この里の名におひたりとおさかなの料理をしたる池の鯉鮒』とあり。また東海道の一名驛たりき。今人口四千を有し、碧海郡役所、警察署等の所在地として、郡の中心をなせども汽車は南方一里を隔て、刈谷の停車場まで赴かすんばその便に頼る能はず。故に昔日の位置はむしろ半ば刈谷に奪はれたるが如し。

知立神社 知立町字神田にあり。仲哀天皇元年の創建と稱し、式内の古社にして、今縣社に列せり。古へより惡蛇除けの御符を出すを以て廣く世に知らる。社の池水に昔は多く鯉鮒を飼育せりと。今老樹蒼鬱として社邊をめぐり頗る莊嚴なり。また多寶塔、神籬門等あり。毎年四月大祭を行ひ、知立、刈谷に神輿渡御して頗る雜沓を極む。社は又碧海郡八座の一なり。

八ッ橋 知立町の東十町ばかりなる街道の北側八ッ橋と記せる標木より、北に曲が

りて行くこと八町ばかりにして、牛橋村字八橋あり。小流の傍らに小丘あり。また側にや、凹みたる池形の如き芝生あり。これ昔杜若のありし跡と傳へて、世に名高き名所なり。刈谷停車場よりは約一里十三町を隔て、その間人力車の便あり。昔はその澤の水を八方へ蜘蛛の如く穿流し、それに八橋を架したるなり。在原業平伊勢物語にいふ『むかし男ありけり。あづまの方に住むべき國求めにとて、三河の國八橋といふところにていたりぬ。其所を八橋といひけるは、水行く河の蜘蛛なれば、橋を八つ渡せるに よりてなむ、八橋といひける。その澤の木の際におり居て、かれ飯くひけり。その澤に杜若いと面白く咲きたり。それを見て友の人の曰く、杜若といふ五文字を句の上にするて、旅の心をよめと云ひければよめる。唐衣きつ、馴れにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ』皆人かれ飯の上になみだ落して、ほとびにけり』と。後ち廢絶して、阿佛尼鎌倉へ下向の時は橋も杜若も無しと見えたり。また光行海道記に『行ききく三河の國八橋のわたりと見れば、業平杜若の歌よみたりけるに、皆人かれ飯

の上に涙おとしける所よと思ひ出でられて、その邊を見れども、かの草と覺しきものはなくて稻のみぞ多く見ゆ』といふ旨を記して、年久しき廢蹟なりしも、一度業平の歌に名高きより、後世文人詩人の所懐を寄するもの多く、定家、家隆、爲家、芭蕉、物徂徠、釋六如等諸名家の詠吟多し。夫木集西行法師『さみだれば原野の澤に水みちていづれ三河のぬまの八橋』

●無量壽寺 同所にあり。八橋山と號す。裏手の池に杜若を植ゑて、首夏の候來觀してむかしを偲ぶ人多し。且つ寺境遙かに、富士に似て美人山の橋ある村積山の翠微に對して、眺望佳なり。寺は慶雲年間の創立にして臨濟宗妙心寺派の中本山なり。在原業平作と傳ふる觀世音像を本尊とす。本堂、庫裡、山門、鐘樓、鎮守堂、寶藏、書院以下十三字あり。また寺内に業平手植と稱する竹及び葭あり。もと業平東征の日この寺に寓したりといふ。業平墳と稱するものあり。業平の元慶四年に没するや遺囑して遺骨の半ばを分ち、この寺に贈り葬りしと傳ふ。又杜若姫の墓あり。姫は小野篁の長女

にして、業平を追慕してこの地に來り死す。よりて共に寺内に埋むと。その他、八橋及び中興梅谷等の遺物寺に多く、阿保親王像、業平木像、八橋古柱、宋の佛鑑禪師書業平の愛器と稱する樂太鼓、筑紫琴等あり。寺の縁起にいふ、昔文德帝深く密圓上人の道徳を嘉みし、勅して諸堂をこの地に創立し勅願所となす。天台、密兩宗を兼修し貞觀年中遂に密宗の學頭となる。文明年間に至りて火を發し、ことごとく烏有に歸す。南溟禪師これを再建し禪宗に改宗せり。降りて文化年間にいたり、自在庵梅谷といへる僧八橋村に來りて留錫し、遂にこの寺を再興し移り住す。和歌山侯等深く梅谷を信じ崇敬すること厚しといふ。また無量壽寺の西五町あまりに逢妻川あり。業平の杜若姫に遭ひし古蹟なりといふ。なほこの寺の末に在原寺あり。楓樹を植ゆ。いづれも業平の故事を偲ばせざるは無し。

大濱町 刈谷より北の方衣ヶ浦の海濱に沿ひて南下すれば、高濱、新濱、大濱の諸邑落あり。いづれも鹽の産出に名あり。中に就きて大濱は海水深ければ船舶の出入も

多く、汽船も知多半島に往復するもの期を定めて發着す。海水浴また開かれ、來遊するものは稱して衣ヶ浦中の第一景となす。西南にあたり權現鼻の石堤角あり。北に龜崎、半田の兩港を望み、近く武豊港と相對して風光佳絶なり。町は大濱、新川の二つに分れ、人口合せて一萬二千五百を有せり。

熊野社 大濱町字上の切にあり。天喜二年の創立にして、今郷社に列せり。社宇八棟、末社七祠、毎年九月八日を以て祭典を行ふ。社傳に據れば往時源賴義及び徳川氏の祖宗等篤くこれを崇信し、大に功を成したりといふ。寺寶に藏人佐元康の書簡等あり。

稱名寺 東照山稱名寺と號す。大濱町にあり。名高き時宗の名刹にして、延元年間の開基にかゝれり。今、本堂、庫裡、書院、客寮、徳川家廟、鐘樓等凡て二十餘宇あり。寺寶として菅公像一軸、牧溪畫一軸、聖徳太子畫彌陀如來一軸、その他徳川祖宗の遺物等あり。また徳川氏の祖、長阿彌この寺にて入寂せりとも傳ふ。寺境町の中央

高所にあり、海岸に近く、遙かに尾州の知多半島を望みて、眺賜佳良の一勝區なり。

幡豆郡地方を此處に脱くべし。海岸路は蒲郡より丘陵を越え、三里半にして上横須賀に達す。これより西尾町に一里半あり。

三根山観音寺 蒲郡停車場を距ること二里餘、東幡豆村大字上り澤にあり。神龜元年行基菩薩作聖觀世音を本尊とし、真言宗に屬せり。山は幡豆、額田、寶飯諸郡に跨るを以て三根山の稱あり。山の南面には伊良崎と羽豆崎と内海を抱いて、一大明鏡を展き、東方には富岳の天際に屹立せるあり。その他志摩、伊勢の諸山を烟波の間に望んで、眺望最もすぐれたり。

辨天島 東幡豆村の前面海上にあり。島は蕞爾たる一黒子の地に過ぎざれども、中に一字の辨財天祠を鎮せるを以て著名なり。辨財天は佐久島屬嶼の辨天、蒲郡の海上にある竹島辨天と共に三河三辨天と稱せらる。且つ島上東に近く端田ヶ鼻を望み、西に琵琶島を控へ、北方には陸地の峰巒の繚繞するあり。碧灣を擁して風光頗る佳、ま

た幡豆郡の一名勝とすべし。

宮崎海水浴 東幡豆村の西海濱にあり。脊に山巒を負ひて、地勢頗る好く海に蟠まりて巨礁あり。これに天然の浴地を作す。前面には幾多の島嶼横はりてその間に千船往來し、白帆點々として清漣に映す。洵に郡内の一仙洲たり。式内郷社宮崎神社あり。參籠社、社務所繪馬堂の建物を有し、別に若宮八幡、御鍛神社、神明社、大神宮、熊野權現等の社祠あり。社寶として寶劔一口、鐵弓二張以下を藏す。また一の華表の下に姪子社あり。社境小丘にありて、老松繁茂し、前面海に臨んで矚目愛すべし。

平原の瀧 幡豆郡の東部平原村になりて、有名なる茶臼山の半腹にかゝれり。落下丈餘にして、水は數條に分れ、傍らに一堂宇あり。前面蜿蜒たる青山を望み、老松楓樹鬱然として、天日を蔽ひ、溪水奇石の趣甚だ幽雅なり。且つその勝はなはだかの養老の瀧に酷似せるを以て、別に小養老の稱あり。岡崎停車場より南方約三里を隔つ。人力車を通せり。

●●●●● 横須賀町 矢作古川に沿ひて、人口約二千を有し、近傍に一城址あり。東條城と稱し、古東條氏の居城なりき。

●●●●● 西尾町 横須賀の西方一里にあり。もと松平氏六萬石の城邑にして、附近郡村の一小中心をなし、繁華岡崎、豊橋と併稱せられしも、その地一方に僻して交通の便を缺けるより、今は遙かに二町に後れたり。人口七千を有し、幡豆郡役所を置かる。地に西尾城址あり、横須賀の東條に對して、西條と呼べり。この地、安城より三里、岡崎より五里、共に馬車を通せり。

○足助舉母附近 即ち東西加茂郡の地なり。東加茂郡其の大部花崗岩の山地にして平野なけれど、土地比較的平坦にして高原性を帯び、驛邑多く其間に散在す。道路は岡崎町より矢作川及び足助川に近く北し、足助川の上流に足助町あり。舉母町は矢作川の上流西岸に位し、尾張愛知郡に通ずる道路の衝に當る。道路は良好ならざれども車を通ず。

●●●●● 足助町 足助川の南岸に枕み、岡崎を距ること七里十六町餘、人口二千二百を有し、東加茂郡役所の所在地として、また飯田街道の要區として、三河高原唯一の中心となせども、實は寂寥たる一邑に過ぎず。むかし元弘年間慷慨義を擧げ節に殉じたる足助重範及び新葉集に『吉ともとわが偽のなきまゝに人の契りをなほたのむかな』といへる國風をとめて、後人をして忠烈にして且つ風流兒たるに感激せしむる足助重春等の出でたる地として夙に名高く、宗良親王曾て遠州にありし時、足助重春に誘はれて咏める和歌に『ひとすちに思ひさだめぬ八橋の蜘蛛に身をも嘆くころかな』とあり。足助氏の城址は今同郡眞弓山にありて、故品川彌次郎子撰文の二碑を建てたり。また足助町字宮平に八幡宮あり。白鳳二年の創立にして、内殿、拜殿、等の社宇及び末社數祠あり。毎年舊八月十五日を以て祭禮を行ひ、神輿渡御の事あり。又陰曆の八朔に射的會あり。その社境は遙かに東北の飯盛山を望み、足助川祠背を流れて、清流奇石の妙趣に富む。

●●●松平村 徳川氏祖宗の地として名高き松平村は、東加茂郡の南境、ほとんど岡崎と足助との中間にあり。四邊山をめぐらせる一盆地にして、隣村に通ずるにも山阪を上り谿谷をわたるの峻ありと雖も、史に志ざせるものは、訪ふて英雄創業の跡を忍ぶもの尠なからず。地に浄土宗高月院あり。松平親氏、泰親父子の靈廟ある所にして、徳川氏の世には寺領百石を給せられたる巨刹なり。東照宮實記に曰ふ『この村に太郎左衛門信之とてこれも近國にかぐれなき富豪あり。たゞ一人の女子ありしが、如何なる故にか婚嫁をもとむるもの數多ありしを許さで年を経しに、今親氏やもめ居し給ふを見て、その女をあはせて家を譲らんと請ふこと頻りなり。親氏もとより大志おはしければ、かの酒井村にて設け給ひし忠廣に酒井の家をゆづり、身は信重が懇願にまかせ松平村にうつり、其女を妻としその譲りをうけて松平太郎左衛門となられたる云々』又三河記には『我等先祖尊氏に居所を拂はれて爰彼に流浪す、必ず尊氏の子孫の末を絶して木望を逐べしとあり。然れども徳川氏の源氏の裔なりと云ふを史家の議する者

も少からず。且又此村は事業を興すべきほどの地にあらず云々』

●●●東加茂の鑛泉 足助町を距ること三里十五町、矢作川の上流に單純泉笹戸鑛泉あり。

また東加茂の北部山間矢作の上流に牛地鑛泉あり。同じく郡の北部にして、阿摺川の岸に沿ひ榊野鑛泉あり。就れもその質單純泉なり。

●●●駒山 東加茂郡の東北部にして、美濃の惠那に近き生駒村字牛地の附近にあり。山中、千古の老杉巨松森々として枝を交へ、清泉奇岩の間を迸しり出づ。昔し楠氏の宗族悉く國に殉し足利氏の大に志を天下に得るや、楠氏の族にして忠勇の名高き恩地左近は竊に再舉を企て、装ひを變じ猿曳となりて此地に來り潜伏したり。今尙ほ其遺蹟の徴するに足るもの甚だ多しといふ。

●●●猿投山 三河西部の高原に於ける高峯にして、西加茂郡廣澤村に屬せり。一に鷲取山ともいふ。山麓は尾張國赤津に跨り、海拔七百米を有せり。山上に神祠あり。猿投神社の別宮となす。

猿投神社 狹投にも作れり。山の麓字猿投にあり。祭神大碓尊の墓はこの山にありと稱し、尊東征の途次此地に於て薨去せりと傳ふ。登路二條、一を男阪といひ、一を女阪といふ。男阪は頗る峻峻にして、女阪や、平夷なるより人多く女阪を攀つ。な

ほこの村に一瀑布あり。高さ九尺、幅十二尺、甚だ壯觀なり。

射穂神社 伊保村大字上伊保の北山といふ地にあり。式内にして、白鳳元年の創建に係り、五拾功彦命を祀る。中古、藏王權現と稱せり。またこの附近古墳多く、發掘の器具武器等多し。

護持山千鳥寺 七重村大字千鳥の梨本にあり。曹洞宗を奉ず。寺記にいふ。明德元年足利義滿近江の國に護持禪院を創建し後醍醐帝の第五皇子金龍禪師を開基とす。後永享年間將軍義教令してこの地に移し今の寺號となすと。寺に義滿寄進する所の王摩詰の畫あり。珍とすべし。

大象山龍田院 益宮村大字古瀬間の字千浦にあり。大永元年鈴木重政の開基にして、曹洞に屬す。寺は曾て徳川の名臣板倉勝重の僧となりて遺世し居たる所なり。

野見山 野見村に屬す。高さ五百四十尺、山頂に式内野見神社ありて、野見宿禰を

祀る。且つ山上老松疎らに茂りて、矢作川その麓を流れ、また近傍の一景勝なり。

梅坪 もと郷十三宅氏の所領にして、その城址は村の中央靈岩寺の高丘にあり。靈岩寺は梅坪山と稱し、舉母城主三宅康貞の開基にして、曹洞に屬し、境内に本堂、開山堂、庫裡、禪堂、鐘樓等あり。聖觀音菩薩を以て本尊となす。また同村西山畑の田間に大將塚または藤塚と稱する一丘あり。古櫻樹一株その上に盤踞す。里人いふ元弘の忠臣兒島高德の骨を埋むるところなりと。容易に信ずべからず。

舉母町 梅坪の南一里にして、矢作川に沿ひ、岡崎を距ること三里半の地にあり。本と内藤氏二萬石の城邑にして、人口四千を有し、西賀茂郡役所の所在地なり。物産として木綿、漆の類を多く出す。この地古來衣の里として名高き勝區、咏吟の詩歌多し、從三位泰邦の東行説話に曰ふ『左の方に衣街道といふところあり、衣の里へ行く道とや。春は霞梅櫻、夏は卯の花、郭公、名に負ふ衣の里と聞きつたへ侍れども、程遠ければ見にも行かれず云々』また定家集には『わきもこが衣の里の梅の花さぞ紅

の色にそふらん』また千載集には『立歸りなほ見て行かむ櫻花衣のさとに匂ふさかりを』と詠めり。

●●●●●●●● 舉母城址 字舊城にあり。廣さ大約十一萬二千六百坪、周圍石をたゝみ塙を設け二所に石壁あり。高さもの二十餘尺、これ檜臺なり。寛延二年内藤政苗上州安中城より封をこゝに移し、はじめて築く所なり。然れども城檜完成せずして他所に移れり。

●●●●●●●● 舉母名跡 舉母の地なほ若干の名跡あり。落別王の墓は字兒子にありて、兒子口社と稱し、高丘老樹繁茂せる間に五輪塔あり。口碑にいふ、落別王乗馬してこの地に來り薨去す。即ちその馬をも併せ葬るものこの社なりと。熊野の庵址は字初陣にあり。

熊野は遠洲池田の長者某の女にして、容色あり、平宗盛これを聘するも應せず。終に落飾してこの地の庵に住せりと。内藤氏の儒臣川西函洲の墓は町内神龍寺にあり。函洲はかの渡邊華山と併稱して、三河二奇士の一人と呼べるもの、天保年間遺表を内藤侯に上りてこの地に屠服せり。

●●●●●●●● 長興寺 舉母の南東大約一里半にあり。地を根川村字長興寺と稱し、建武年間の創立なりといへり。

●●●●●●●● 西加茂の鑛泉 西加茂地方甚だ鑛泉多し。今、その重なるものを擧ぐれば、日面村字御山に炭酸泉日面鑛泉あり。木瀬村に鹽類泉木瀬鑛泉あり。飯野村に單純泉飯野鑛泉あり。

○渥美半島 國の東南隅より西南西に突出せる半島にして、尾張の知多半島と相對す。半島は丘陵を以て蔽はれ、東より西南に蜿蜒して、或は起き或は伏す。越戸の大(三二八米)最も高し。半島の南岸大洋に面せる邊は全く平滑なる沙濱を成せども、北岸、渥美灣に瀕せる地は、比較的出入に富み、二小灣入あり。一は田原町の東北に、一は福江町の北にあり。道路は豊橋より海岸を過ぎて田原町に達し、これより丘陵の間を縫ひ、宇津江坂を経て福江町に達す。半島の絶端は、伊良湖岬にして、岬端にある小山(一四〇米)は志摩の神島と青螺相望み、風光絶佳なり。

田原町 豊橋町の南方五里にあり。もと三宅氏の城邑にして、人口三千六百を算す。山影海光と相映じて頗る風情あり。豊川河口よりこの町に小蒸汽を通ず。町に明應年間の築造にかゝる古城址あり。また幕末の志士渡邊華山はこの地の出生にして、今その墳墓あり。

泉龍院 野田村にあり。大洞山と號し、禪宗にして、僧茂林の開創なり。寺に龍の遺鱗と稱するもの三片を藏せり。

長興寺 野田村大字大久保にあり。龍雲山と號す。同じく僧茂林の草創に係る。蘆ヶ池は野田村大字蘆にあり。周圍約二十六町を有する瀦溜池にして、池岸の翠巒、影を池中に倒にして、また夏時の一勝區なり。池畔阿志神社あり。

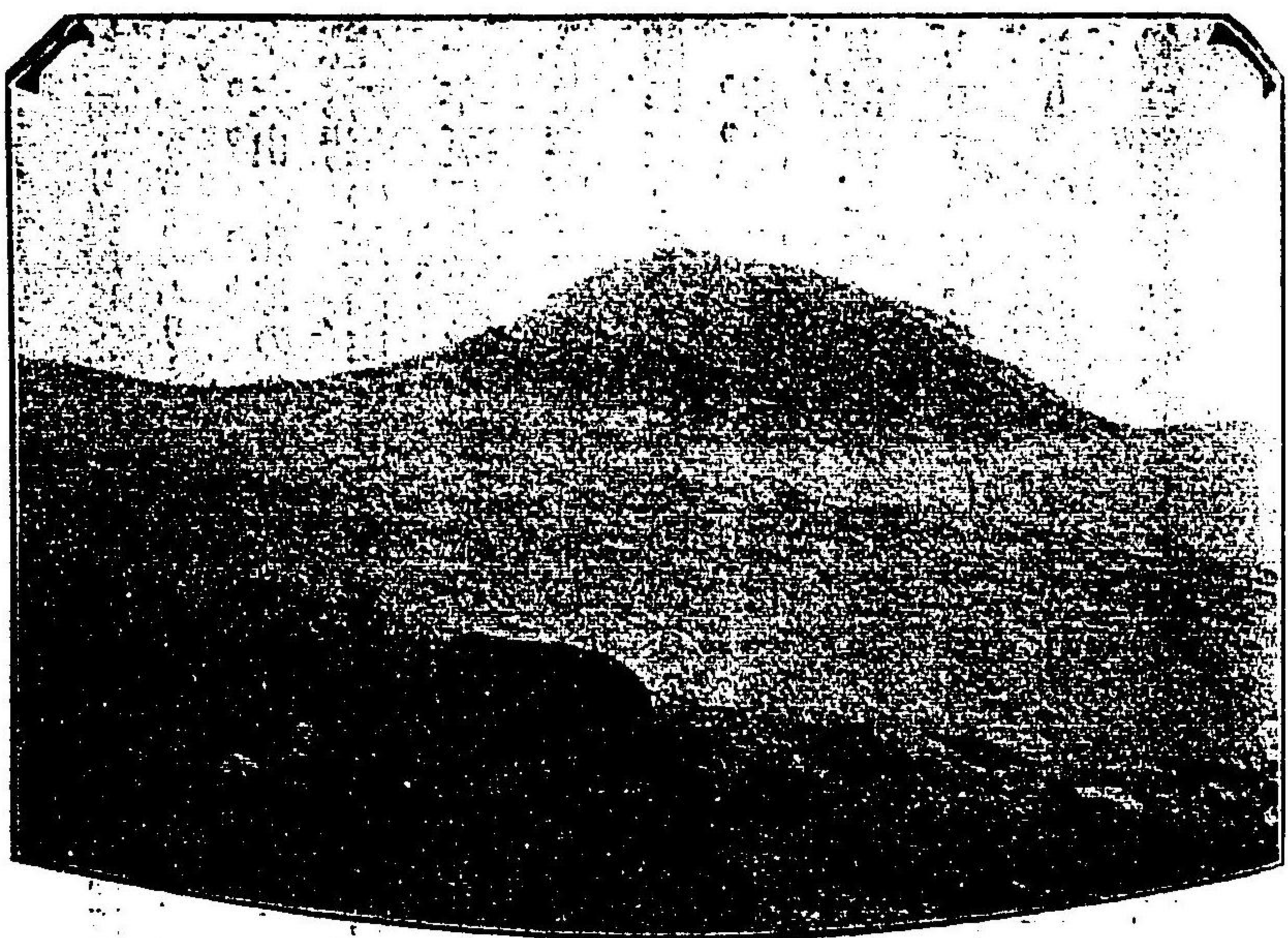
宇津江阪 田原町より三里、道は松並木と丘陵の間を穿てり。阪の眺望頗る絶佳にして、眼下には衣が浦の烟波を下瞰し、遠く海を隔て、伊勢の諸山の宛がら塗染せるが如きを見る。その快蓋し言ふべからざるものあり。阪を下りて、左は海、右は山

の間を行けば、漁村錯落として顯はれ、漁網高く夕日にかゝりて風光畫くが如くなるを見るべし。

福江町 島村の地、町制を布きて今福江といふ。衣ヶ浦の水長く灣入して風情なる入江を爲し、人家これに臨みて連る。漢詩に謂ふ所の江村とはかゝる所ならんと思はる。芭蕉が門人たりし杜國の墓は其町にあり。これより一路坦として伊良湖に通じ、松聲濤聲次第に俗塵を脱却するを覺ゆ。

伊良湖岬 は此の半島の絶端にして、其岬の盡頭を小山といふ。伊良湖の名は萬葉集に既にこれを載せ、昔は一箇海中の島嶼なりしものなるが、地形隆起の理によりて、遂に半島と相通するに至りしなりとか。今日猶その海水の通じたりと覺しき跡残りて其間を太平洋より來れる千鳥は群を爲して伊勢灣へと越え行くなり。伊良湖の人家は伊良湖明神社を有する一丘陵の西面に位し、漁家蟹戸相連り、それより下れる路は伊勢灣の沙濱へと出づ。人家を南に貫きて、更に小山の凹所を越ゆれば、太平洋の怒濤地

を捲いて來り、浩蕩渺茫の邊、先づ神島の青螺を認め、遙かに伊勢より志摩にかけたる
 一帯の山影を指點し得べし。其青一髮の東に盡くる處は志摩の大王崎の鼻にして、其少
 し西に、夜は安乘岬の燈臺の火を認むべし。この太平洋の海岸を懸路ヶ浦といふ。その
 浦を右に傳へば十町餘にして牛ヶ首の巨巖あり。其ほとりに二大石門ありて風光頗
 る雄渾なり。この邊、三四十年前までは海嶼多く集ひしといふ。かくてこの鼻をめぐ
 れば、日出の海岸に出づ。此の海岸よりは半島の東側の海岸弓弦のごとく灣曲し、其
 間に漁村相連り、上に越戸の大山の白雲を戴きて立てるを見る。要するに松原の美し
 きと、波濤の環の如くなるとはこの地の特色なり。ことに伊勢内海と太平洋との間、
 伊勢、志摩の山嶺の環の如くなるを見る、實に絶景なり。蓋し、東海道海岸に於ては
 富士山下の風光と相拮抗して敢て下らざるべきか。また、この地に磯丸といふ漁師の
 歌人あり。その名海内に聞え、靈元上皇よりは賞詞ありたること書に記せり。その歌
 にもまた勝れたるもの尠からず。西行山家集に咏じていふ、『伊良湖崎に鯉釣舟ならで



伊良湖崎小山の鼻

浮きはるか波にうかび出で寄る』と。
 芭蕉が名高き『鷹一つ見つけてうれし
 伊良湖崎』の句は石に刻みて、今伊良湖
 村の中央にあり。嵐雪の文集に、海荒
 れてこの海角に漂流したる記事あり。
 日本水路誌にいふ『伊良湖崎は隆起百
 七十二呎の多岩角なり。その東方七鐘
 尖峰あり。高さ五百五呎、その崎西に於
 て、屢々激潮を見ることあり。而して
 潮流は極めて強く、漲潮は北に流れ、
 落潮は南に流る』云々

伊良湖岬に遊ぶには、東海鐵道の豊橋にて下
 車し、停車場前より幸呂まで人車を備ひ、同

所より汽船にて海路十里、島村にいたる。その間他に汽船便もあり。月夜を選びてこれに乗れば清興忘るべからざるものありと云ふ。島村より伊良湖までは二里十町、その間車おれど、歩くもまたおもしろし。

●大山 和地の北方に聳ゆる高峰にして、海拔三百三十米、半島の脊骨をなせる古生層峯の最高山なり。古來舟人はこの山を以て航路の標識となし來りしが、明治二十一年更に燈臺を山腰に設けたり。私設なれどもその光茫よく八海里の外に達すといふ。また半腹に一寺あり。もしそれ山頂に立てば、太平洋と伊勢内海との風光一々目睫の間に集りて、その展望の美なる容易に狀すべからざるものありといふ。

●神島 は伊良湖崎の海上一里餘にあり。志摩國に屬す。その間を伊良湖渡合と言ひ海深甚だ大に、波濤また險惡なり。行政區劃上にては志摩國に屬すれども、伊良湖よりする方むしろ近し。この島漁戸二百戸ばかり、また一別天地にして、風光甚だ佳なり。島の東南端に奇岩窟あり。怒濤澎湃、壯觀を極む。伊良湖よりこの島に渡る便船は絶えざれば、こゝを渡りて更に答志島に行き、それより伊勢志摩の海岸に赴くも

また面白かるべし。傳へいふ、往昔の東國交通路は伊勢の神社港よりこの伊良湖をわたり、渥美半島の東海岸を過ぎて以て駿遠の地に赴むきたるものゝ如しと。その眞偽は知らざれども、かの北島親房が義良親王を奉じて奥羽に赴かんとせし舟路を此に取りたるを見れば、或は事實なりしやも知るべからず。衣が浦の一島篠島は義良親王の際大風に逢ひて上陸したまひし所、今日なほその遺跡を存せり。なほ細しくは尾張國知多半島の邊を参照すべし。

之を要するに三河の渥美半島は旅行家の必ず一遊すべき景勝なるべし。

遠江國

二七八

遠江國は東は三河に接し、北は信濃に連り、東は赤石山脈の一部と大井川とに由りて駿河國に界し、南は海に瀕す。東西十八里餘、南北十九方里餘、面積百九十六方里有す。榛原、小笠、周智、磐田、濱名、引佐の六郡を置き、静岡縣これを管す。地勢一般に山嶽丘陵多く、殊にその北部に於ては赤石山脈に屬する諸山連亘して最も高峻を極め、其餘脈は西南に延びて弓張山脈となる。赤石山脈の南方には所謂三倉層及び其他の第三起層より成れる山嶽起伏し、南方に至るに従ひ、次第に陵夷し、丘陵となり臺地となり、低原となる。赤石山脈は地質構造上日本南嶺の外帯に屬し、雄大峭峻なる趣を呈して、甲、信、駿遠の諸州に跨り、海拔高距二千乃至二千五百米を有し、本邦中稀に見る高峻なる地方とす。北嶽(三一五一米)赤石山(三〇九三米)池口嶺(二四二米)梶谷嶽(二二二米)黒倉山(一五九〇米)熊伏山(一七九三米)等その最も

高峻たるものなり。而して黒倉山と熊伏山の間に、遠江より信濃に通ずる青崩峠(一一五米)あり。水窪川と氣田川との分水界に山住山脈あり。奥黒法師嶽(二二四八米)前黒法師嶽(二〇一一米)三森山(二三〇〇米)山住山(一二〇〇米)等東北より西南に延び、不動山、龍頭山を経て漸く低く、益々低夷して秋葉山(八六六米)光明山(四五七米)に盡く。弓張山脈は赤石山脈の西南端を爲し、東北より西南に走りて三、遠兩國の國境を爲す。國內の平原は天龍川の兩岸に開けたるもの最も大にして、天龍川、太田川、馬籠川、津田川によりて灌漑せられ、東西三里、南北五里、面積十餘方里を占む。國內に於て田岡尤も開けたる地にして、人口の密度又大に、濱松、見附、袋井、掛川、森町、氣賀の諸邑みな此中にあり。されど臺地は屢不毛の地に屬し、唯矮松の發生するに過ぎざることあり。都田川、馬籠川間にある三方ヶ原、天龍川太田川間に挾まれたる磐田原の如き是なり。河川は地形に従つて多く北方より南方に流れ、其最も大なるものを天龍川と爲す。駿河の界を爲せる大井川これに次ぐ。國の西南隅

にある濱名湖は、東西に七料、南北十二料、廣さ大約八九十平方料を占め、湖岸屈曲多く、幾多の小灣入を爲す。此湖もと猪牙湖と稱し、往時は外海と全く隔絶し、一河によりて僅かに通せしものなるが、明應永正年間、數度の海嘯の爲めに、海岸崩壊し全く海と相通するに至れり。海岸は平滑にして變化に乏しく、多くは砂濱より成る。國の東南隅には御前岬長く突出して、伊豆の石廊崎と遙かに相對して騎河灣を抱く。

沿革 古へ國府を豊田郡（今の見附町）に置く。鎌府の初め安田義定守護を以て國守に任じ、建武中興足利直義を以て守護とす。直義國に就くに及ばず、成良親王を輔けて鎌倉に鎮し、兄尊氏と共に反す。延元元年井伊道政宗良親王を奥山城に奉じ、後ち遷りて井伊谷城に居る。州人叛して尊氏に應ずる者多し。是に於て尊氏その將今川範國を以て守護とし、子孫之を襲ぐ。永正の末今川氏親盡く全州を併せ、傳へて孫氏真に至り、永祿の末武田晴信駿河を取り、氏真出奔し本國遂に徳川氏に歸す。家康關東に遷るに及びて、豊臣氏堀尾吉晴を濱松に、山内一豊を掛川に、有馬豊氏を横須賀

に封ず。關ヶ原の役畢り、徳川氏三氏を移封し、濱松を松平忠頼に、掛川を松平定勝に、横須賀を松平忠政に賜ひ、慶長十四年三藩を徙して徳川頼宣を封ず。元和五年頼を紀伊に移して再び三藩を置き、寛永九年横須賀を井上正就に、掛川を青山幸成に賜ひ、寶曆年中田沼意次を相良に封じ濱を併せて都て四藩、王政革新の時盡く之を安房上總に徙し、地皆静岡藩に屬し、別に一藩を建て、堀江と云ふ。既にして改めて縣となし、又廢して濱松縣を更置し、明治九年濱松縣を廢して、静岡縣に併す。

交通 官設東海線は、駿河より大井川を渡りて金谷に來り、此國特有の丘陵に隧道を穿ち、南西に迂回して、堀の内驛に達し、再び小隧道を穿ちて掛川驛に入る。これより周智、盤田兩郡の平坦なる平野を西し、袋井中泉の二驛を過ぎ、天龍川に架したる鐵橋を渡り、天龍川驛より濱松町に至る。汽車はこれより濱名湖の南岸を縫ひ、風光明媚なる舞坂に一驛を置き、長大なる鐵橋を以て、湖の西岸と相連絡す。西岸に鷲津驛あり。東海道の新居より西すれば、白須賀との間に、東海道屈指の名勝湖見坂あり。

道路は袋井より森町を経て秋葉山に至る路あり。袋井より森町まで鐵道馬車の便あり。飯田街道は、濱松町より笠井、二俣を過ぎ、天龍川の峽谷に、浜りて至るものにして、國界青崩峠まで、二十里を算す。この地濱松町より三方ヶ原を経て氣賀町に達し、引佐細江、猪鼻湖の岸を縫ひて、三河の國境に至るものあり。姫街道と稱す。

産業 南方平野地方には米麥の他茶を産するを以て名あり。周智、榛原兩郡は茶の主産地にして最も著名に、旅客は金谷、袋井をすぐる頃、田圃に茶樹の多く栽培せられたるを見るべし。駿河の安倍郡に産するものを合すれば、其産額現今各地方の首位を占め、古來より有名なりし京都を凌ぐに至れり。種類は煎茶を多しとす。林業は松、杉、檜の良材を産し、天龍川沿岸、大井川上流の官林最も著名なり。ことに前者の杉林は特筆大書すべきものにして、林齡未だ高からずと雖も、懸崖絶壁を蔽ひ、森林鬱蒼として雜樹を交へず、林相頗る美なり。水産は東海道中屈指の漁區として名高く、鱧、鱒、鮭、鮒、鯛等を産す。濱名湖には鰻、鯉、鮒多し。織物には、遠州縞

あり。其組織縞柄は粗野質朴なれども、染織堅牢にして、中流以下の實用に適せり。

濱松町の北笠井に其市場を開く。濱松に濱名納豆あり。

○官設東海線沿線 周智の丘陵地を出で、天龍川の平野を西の方濱名湖に及べる間をいふ。金谷町、袋井町、見附町、中泉町、濱松町、舞阪町等は皆其沿線にあり。天龍川驛の下流に掛塚港あり。汽車の車窓より北方に赤石山脈の雄俊なる翠色を望み得べし。袋井中泉附近は單調なる平野にして見るもの稀なれど、一度天龍の大河をわたり、濱松町より舞阪に至れば、湖光歛澹、青松白沙と相映じ、前の單調を全く忘却すべし。

●金谷町 駿河國島田驛より西方約一里四町、大井川の鐵橋を越えて、島田の町と相對す。舊金谷宿、金谷河原、牧野原、菊川村、神谷城村を併せて人口約七千、ことに、地は徳川時代に於て、旅客のみにより町の生活を維持したる後なるが故、現今は對岸島田驛と共に、漸く衰頹の傾あり。東海道線金谷驛は町の南端にあり。金谷阪を

上れば初倉山、その南を初倉の里と稱して眺望よし。富士と大井の流には古き名所圖會中のものなり。

牧野原城址 大字牧野原村にあり。古へ諏訪原の古城といはる。金谷町より無間山に到る途上にして、草深きが中に、僅かに當年の濠渠を殘し天守臺の址と思はるゝあるのみ。天正元年武田信豊、馬場尙房の築く所、同年松平忠次の爲めに陥られて、後數年遂に廢城となれり。附近一帶は、有名なる三方ヶ原に亞ぐの平野牧野原にして東西二里南北七里を測るべし。古への布引の原、今は茶園を開きて、茶樹の培養漸く盛なり。金谷町に再び歸りて、北方二十五町を行けば、榛原郡五和村字志戸呂に、五和村鑛泉あり。後に丘を負ひ、千葉山、相賀山、八倉山その西北に聳え續きて前に大井の流とこゝに展けたる平地を見渡すべし。泉質は食鹽と炭酸曹達とを含有せる冷泉にして、腺病、脚氣等に宜しと。旅館二三月あり。温泉より更に約三里の道を北せば、同村大字高熊に、八高山の北面に懸れる

大垂瀧 を見るべし。瀧は楓樹に隠見して、五十丈の雄垂、二十五丈の雌垂、幅は共に約四間、轟々山底に震ふ、五和村温泉の浴客にして此處に杖をひくもの多し。

菊川の里 往昔は東海道驛次の中、最も繁華なりし處、金谷村大字菊川はその舊稱なり。地の東を流るゝ菊川は、源を淡ヶ嶽の東麓に發し、菊川よりは更に西にながれて國安川となる。地は有名なる大平記中、俊基朝臣再關東下向の事の中に描かれたる、あはれなる物語に、昔南陽縣之菊水汲下流延齡、今東海道之菊川宿西岸而終命とかきて旅館の柱に殘したる光親卿の關東下向と、共に朝權衰頽の挿話を作れる古跡なり。金谷町よりすれば、驛の傍より日坂峠に登り、大井川を眺めつゝ馬の脊を越ゆれば、道は再び平坦にして左の方低き一帶に人家の散在するを見る。之れ菊川の里なり。

小夜の中山 瀛車金谷驛を發して、堀の内驛を過ぎ行く事少許にして隧道あり。之れ小夜の中山の險にして、國道を行けば、日坂峠の中、菊川の里より登るべし。され

〇今は新道開けたればこれによるを便とす。金谷停車場より凡そ一里、堀の内停車場より凡そ一里半を歩むべし。山頂の路傍に有名なる夜泣石、夜哭松、妊婦塚あり。日坂に住ひし妊身せる一婦、ある夜、金谷なる己が情夫に逢はんとして此の山を過ぐる時、小賊の爲めに犯されんとして此處に殺害さる。観音の化身なる一僧、胎兒を出し附近の賤女をして、胎を以て之を育てしむ。由來は唯傳説に過ぎざるも之れによりて今尙峙には胎の餅を嚙げり。峙の中、又子育観音を安置せる眞言宗の一草堂久延寺あり。前述の由來によるものにして僧行基の開基にかゝるといふ。『年たけてまた越ゆべしとおもひきや命なりけり小夜の中山、西行』

八幡神社 東山口村大字八坂に在り。譽田別命、息長足姫命、玉依比賣命を合祀せる縣社なり。桓武天皇の時阪上田村麩勅を奉じて本宮山より之を此處に移す。上古の社殿は丹青を以て塗飾し、さながら佛刹の如かりしといふ。

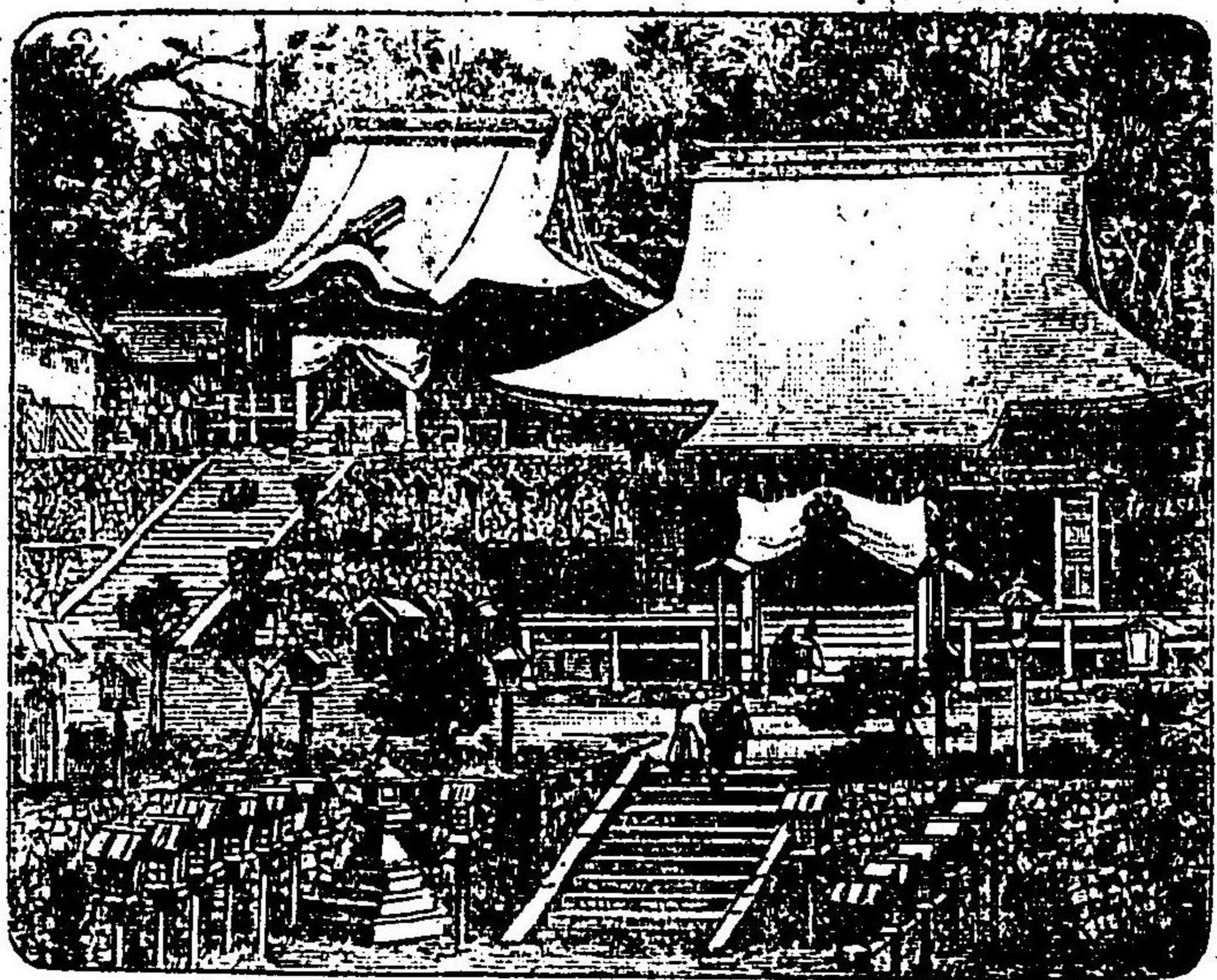
〇〇〇〇 観音寺 淡ヶ岳原谷村大字西山村にあり。曹洞宗に屬し、可睡齋の末寺なり。往時の建築は頗る宏壯なるものなりし由にて、千手観音を本尊とす。聖武帝の御宇當國に鴨平内左衛門といへる獵夫あり。季子八太郎が孝心にて、その殺生を諫止せんとするを憤り之を雪中に殺す。妻之を悲みて狂死し、蛇身鳥となりて屢々人を害す。時に三位中將良政奉勅して當國に下り、變化を退け、前非を悔いたる平内左衛門、八太郎及其の姉なる月小夜姫を憐み、亡きもの爲めに一字を營み又一梵鐘を鑄る。鑄鐘の鏡一面、その主の嫉妬深かりしによりて、鐘となれども未だ鎔けず、之を撞けば、必づ無間の地獄に墜落すと、これより之を無間の鐘と名け、之を此の淡ヶ嶺に埋む。故に又無間山とも稱せり。

〇〇〇〇 掛川町 金谷町よりは鐵道三十二分、堀の内驛を過ぎて溜水隧道を出で掛川町に達す。小夜中山に道を取らば、峙を下り日阪驛を過ぎて到るべし。日阪よりは凡二里、濱松を距る事凡八里なり。人口八千を有し、小笠郡役所、區裁判所、及び縣立中學校の設けありて、郡内第一の繁華を呈せり。種々なる方面よりして古來世に知らるゝ事

廣し。町の北端に掛川の古城址あり。今川氏眞の築く所、永祿十二年城陷ありて彼小田原方面に退くや、石川日向守の手に落ち、後年山内一豊を経て、關ヶ原の役松平定勝の領となり、遂に青山氏に至る。廓遑の跡、歴然として當時の面目を存せり。地より秋葉山の麓に至る道程凡十里、尙、鳳來寺、豊川稻荷を経て御油驛に到るべし。町は静岡縣茶業の中心にして、遠江の東南一帯の地方は茶園多く原野を覆ひて、その製業規模の宏大なる事、實に本邦最大のものなりとせらる。

袋井町、鐵道掛川町より僅かに十六分、東海道第二十七の驛次にして、四面丘陵の圍むありて地勢恰も袋の如し。町に花菴の名産あり。國道によらば掛川町より二里二十四町なり。

可睡齋三尺坊、袋井停車場の北方三十町にあり。古來鎮火の功德を以て名高く、堂前の香煙絶ゆる事なく、賽者の詣るもの頻りなり。又三尺坊可睡齋ともいふ。應永十四年僧恕仲即ち所謂天開和尚、此處に一草庵を結び、五世の孫太路に至り佛刹を營みて東



遠江國

陽軒と號し、十一世等膳和尚の代に改めて可睡齋と稱す。一萬五千坪の廣き域内に、觀音堂、籠堂、六丈、大書院、可與書院、庫裡、學寮を圍らし、中央に高く秋葉總本殿ありて威徳大權現を安置したり。俗に之を三尺坊と稱し、明治六年、秋葉山秋葉寺の廢せられたる時之を此處に移し居りたるものなり。之れより信州街道は更に北進して山梨町を經、袋井町より凡そ三里、輕便鐵道馬車の便ありて、森町に達すべし。

袋井驛より海岸地方に一路ありて岐る。相良町

地方に至るの路なり。

大須賀 海に瀕する方、駿河上新田道によりて相良町及中泉町を通ずる中間にあり。人口凡八千、舊西大淵及中須の二村を併せたり。地の北、高天神山に連なる處、高く城址あり。天正六年、徳川家康、地の西北に在りし馬伏塚の岩を移して、大須賀康高を封せし處、今は全く荒廢してその跡さへ明らかならず。又山中に尙一の城址あり。高天神城址といふ。應永の末、今川氏の築く所、元龜天正の頃小笠原長忠、武田勝頼に降り、諏訪原城と共に、濱松城に敵したる有名なる城址なり。

中泉町 袋井驛よりは僅かに十三分にして達す。人口凡六千、市街の繁華は見付驛に一籌を輸すと雖、古昔遠州の國府ありし處にして古への街道に當り、又東海道鐵道の一驛を置くを以て年々の進歩を見るべし。町に徳川家康が、濱松城にありし頃の別墅の跡あり。

八幡神社 中泉町大字中泉にあり。幣殿、拜殿、本殿、中門、樓門、水屋、神庫等

あり。又境内に徳川家光の寄附せしといふ石の大華表あり。天平寶字年間の古器物及び建武年間の古文書を多く藏す。地は上古國府廳のありし處と傳ふ。足仲彦命譽田別命、息長足姫命を合祀す。

見附町 中泉驛の北方十六町餘、袋井町を距る事凡そ一里十八町餘、人口凡そ八千を有する一小都邑なり。町に磐田郡役所を置く。地の尋常小學校に一の陣太鼓を藏す。昔酒井忠次の打ちたるものなりといふ。

淡海國玉神社 見附町の中央にあり。縣社にして大國主命を祀る。社後、塔の壇山あり。高き事四五十尺、海洋の眺望によろし。毎年六月十四、十五兩日を以て、祇園舞祭を行ふ。境内本殿、拜殿、幣殿、神供所、神庫、中門、水屋等あり。

矢奈比賣神社 見附大字天神平にあり。縣社にして矢奈比賣命、菅原朝臣命を合祀す。本殿、幣殿、拜殿、廊下、玉垣、神供所、水屋、神庫等あり。毎年八月十日、十一日を祭日とす。

天龍川 源を信濃の諏訪湖を發し、深山の底を曲折して流れ来る事凡そ三十里に餘り、その最も急なるは遠江に入りてより中泉驛に至る



天の間及び西渡瀨尻附近より削り立たる絶壁の間、溢るゝ如き水量、兩岸に激して、太古さながらの大森林之れが水聲を含む。赤石山脈の間を流れ、平澤、白倉等の諸山の麓を過ぎ、秋葉

山の西麓に於て氣田川と合し、河心漸く南に向ひ二俣驛に於て始めて平原に出づ。かくて川幅は網状をなして夥しく廣まり、益南して掛塚港の南より遠州灘に注ぐ。鐵

道は中泉驛より天龍川驛を過ぎ、長さ約四千呎の天龍大鐵橋を渡り、濱松の市街に入る。

醫王寺 御厨村大字鎌田にあり。新義真言宗に屬し、天平年間僧行基の創立する所にして、本尊は藥師如來なり。藥師堂、大日堂、御影堂、鐘樓堂、庫裡、客殿、位牌堂、堂守察門、寶藏等あり。境内築山あり。松櫻の年經たるありて風趣に富む。毎年二月六日より三日間、星供養の法會を行ふ、美術的什寶多く、就中、紺紙金泥の曼茶羅空海筆不動明王像、智證筆不動明王像、及び小堀遠州宗甫手記の道中記等最も見るべし。

濱松町 人口三萬に近く、市街の廣さ東西十五町、南北十七町、古來曳馬の里と稱せし地にして、東流道筋及駿河、三河、信濃等の諸街道の要衝に當り、静岡縣下に於て静岡に亞ぐの繁昌を呈せり。旅籠町、傳馬町、鹽町、元唐町等は、就中、豪商軒を並ね、街衢頻繁にして、人家の稠密せる驚くべし。地は維新前井上氏六萬石の城

下にして、後一度、濱松縣廳の置かれし處なり。町の北端に濱松城址あり。四望展けて風景に富み、又城内には壯麗華美をつくせる東照宮あり。城は永祿の末徳川氏の治下に屬せしもの、徳川氏の關東に移るや豊臣氏に屬したれども、關ヶ原役後以來は再び徳川氏に歸して、維新の改革に至りぬ。静岡地方裁判所支部、御料局出張所、濱名郡役所、測候所、警察署、濱松分監等の所在地にして、又縣立中學、商業學校、高等女學校、及び著名なる風琴製作所、製帽會社、その他銀行會社等の設け豊かなり。

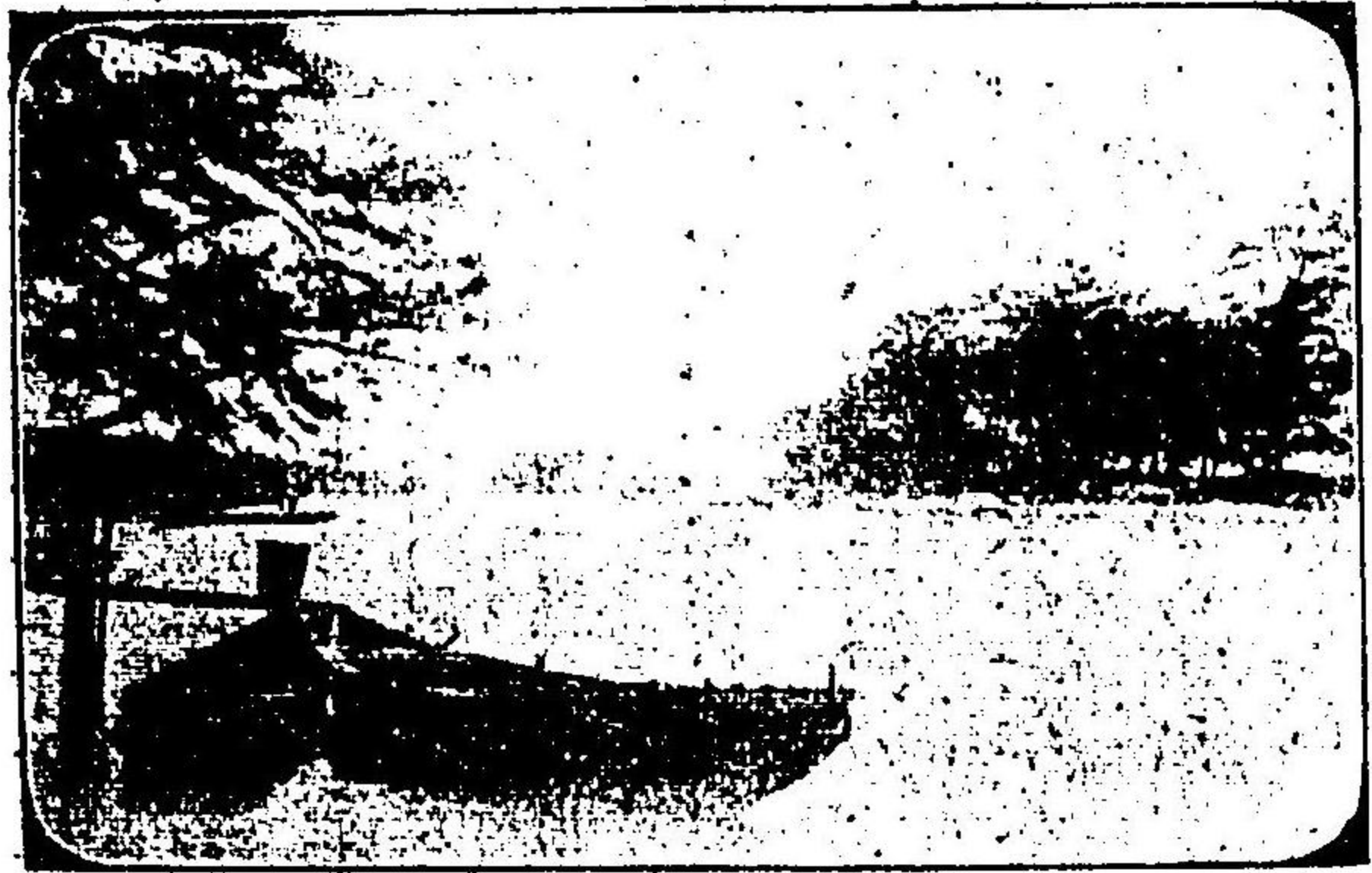
諏訪神社 濱松町字大手先に永祿年中徳川氏入城以來、崇敬最も厚く、社領を寄附し、世子生るゝ毎にこれを産土神となし、尙ほ、神殿、唐門、金爐、樓門、朱鳥居等を修す。次の五社神社と並びて國內の雙美なり。健御名方命、八坂刀賣命を合祀す。五社神社 諏訪神社に近く、同じき大手先にあり。前社と等しく徳川氏の致す所多く、社殿甚だ美觀をつくしたり。縣社格にして天兒人屋命、經津主神、武甕槌神、姫神、太王命を合祀す。毎年九月七日を以て盛大壯麗なる祭典を擧ぐ。境内、祀官藤原

暉昌の碑ありて、眞淵が撰文を刻す。濱松町の東北端に一華表ありて、秋葉山への登路を示す。路は凡て十一里餘、二俣以北は人力車を通せずと雖、西方より行くものゝ、要路なり。途上、三方原古戰場及二俣町を過ぎるべし。

濱名湖名上には、小吃水の蒸汽船あり。湖の東岸及び北岸地方を航行す。碧なる湖上に白き烟を擧げつゝ玩弄具のごとき汽船の駛るを見る、また車窓中の一興なり。

濱名湖 東西一里、南北二里、之を回る湖岸二十里、西北部の囊狀をなしたるを猪鼻湖といひ、東北部なるを引佐細江といへり。湖は舊稱猪牙湖にして、往時は湖と海と隔て、僅かに細河の一流するありて、海と通せしのみなりしも、明應七年の八月二十五日、及び永平七年八月二十七日など、數度の海嘯の爲めに、海岸崩壊して、現今の今切鐵橋のかゝる所を現出し、湖は宛ら裏海の觀を呈するに至れるなり。光行記に曰く「舞阪のはらといふ所にきにけり北南はべうく」とはるかにして西は海の渚近し錦花繡草のたぐひはいとも見えす白き沙のみありて雪のつもれるに似たり其間に松

たえぐく生ひわたりて鹽風梢に音づれ云々。湖にうまさ鰻住めり。湖の中、東北部な



る、即ち氣賀町の南方凡二十町許にある引佐細江は、古歌にさへよく現はれたり。その濱名本湖に入る所は濱せばくして細江十五六町なるが、起伏せる岩、老松をの間にかゝりて、行く水歸る水、岩の水空の松相映帯して景色殊に勝れたり。宗良親王の井伊谷城にあらせられし時の歌に、『夕暮はみなともそことしらすげの入海かけてかすむ松原』とあり。(李花集) 湖の十二勝は辨天島、村櫛、和田、館山寺、赤岩、飛鏢、轉天洲、猪鼻湖、木興寺、濱名館、大崎、北辨天洲、新居これなり。

舞阪驛 町は今切に臨み、新居町と對して、濱名の湖口を扼し、南は渺々たる遠州

灘、北は濱名の全湖を控へたり。濱松驛よりは約七里、人口凡そ三千を有せり。所謂舞阪海水浴場は、濱名湖口の東岸、辨天島といふ地にあり。汽車は少し湖口によりた



濱名湖

る、今切の鐵橋を過ぐ。南は太平洋の末に眼も及ばず、北は湖上幾重の山影を負ひ、海の朝、山の暮、夏の日の心を樂ましむるもの多し。殊に清き水に舟を浮べて、網や釣やに時を過ぐすなと他に得がたき所なり。舞阪停車場を去る西に十町許、人力車

の便あり。

鷺津驛 濱名湖の西岸、濱名郡吉津村鷺津にあり。汽車は舞阪を發して辨天島の一

小驛を過ぎ、こゝに到る。地は湖中に斗出したる岬上に位するが故に、三周に水を臨み、晴たる日富嶽を見るべく、北に御鷲山、東は駿遠の連峯、而も又水色に甚豊なり。海水浴場の設けありて、年々の避暑客多し。

本興寺 鷲津驛附近にあり。日蓮宗にして小山の半腹に位し、堂宇幾棟、水上の林間にもれて、まさに一繪中のものたり。永徳三年僧日乗の改宗する所、十界曼陀羅を以て本尊とす。本堂、千佛堂、鬼子母神堂、大黒堂、祖師堂、客殿、庫裡、釜屋、山門等あり。その他長勝院、車光坊、王葉坊、東林坊等の坊舎あり。後深草院等の大乘妙典及び瀬桑一秀の判物等を什寶とす。

新居町 鷲津停車場を距る事二十町、舞阪驛の西に一里餘、舊名、荒井或は荒堰と作りたりし處、舊時は番所をこゝに設けられたり。人口凡六千。

白須賀町 新居町より一里半餘にあり。地は濱名郡に屬し、東海道新居驛より三河の渥美郡に入るの途上なり。漁車は町の北方を過ぎ、直ちに二川、豊橋の驛に走る。

潮見阪 白須賀町にあり。長さ六町餘。阪路の眺望よろしくして、老松の多きが中に太平洋に面し、西は尾張三河の峯々、遠くは御前崎など、眺めの大にして壯なるまことに尋ね難し。羅山の詩に『天地豈識幾層爛、舒卷古人方寸端、滿目不遮潮見阪、大鵬飛盡水漫々』とあり。阪の中央の北側に、潮見觀音あり。承應三年の春白須賀の南なる海中に夜に光明の發するあり。その三月十日の夜漁人舟を浮べ、掲げて之を見れば、天然木の觀世音なり。今の潮見觀音は乃ち之なりと傳ふ。又町の北方に高師山あり。又高志或は高石ともかく。山高からずと雖、眺矚すぐれたり。

○北部山嶽地方 秋葉山は國中最も著名なる流行佛なり。參詣者常に陸續として絶えず。本街道は袋井驛より森町に出て、堀の内に至り、大屋より山に登るを順路とす。袋井より森町には鐵道馬車あり。濱松町よりするものは、二俣に出で、光明寺に賽し、更に秋葉山に至るべし。これより以北は山深く、谷迫り、奇景多しと雖も、容易に至り見るべからず。山住神社は水窪川の東に位し、深山幽谷の趣を盡せり。

森町 人口凡そ一萬を有し、遠江國東北部の一名邑たり。舊向天方、橋、天宮、城下の四村を併す。町の北方に直ちに丘陵の起伏するありて、阪路六里餘、西北方を指して行かば、秋葉山麓阪下に達し、更に峻峻なる小路を登らば、山上、秋葉神社の鎮するを見るべし。道は森町より三倉まで、二里の間二人曳にして車を通すれども、三倉よりは餘りの山路にて犬居を過ぎ、阪下まで三里半あり。阪本には旅店數十軒あり。こゝより絶頂まで五十町あり。

秋葉神社 を鎮したる秋葉山は、犬居村大字領家村にあり。絶巔より鬱蒼たる杉樹の幹を通じて四顧すれば、遠江三河駿河の地眼下に展げ、遠く遠州灘の大水盤、天龍川の長帶、静美限りなき濱名湖等の景、指點して之を賞すべし。社格は縣社にして、軻遇突智神を祀る。和銅年中、祭神此の山上に鎮座して火を掌る。鎮火神の稱ある所以なり。境内凡二萬坪、樓門を入れれば無數の燈籠左右に並び、大華表を過ぎ礎を昇り、唐門をくれば、拜殿、便殿、神饌所等あり。便殿神樂殿との間を過ぎ石階を登

れば、本社、弊殿、拜殿あり。社前に僅かの櫻樹を植ゑたりと雖、餘は悉く晝も尙暗き老杉を蔽ひ、懸崖前面を限りて、まことに俗傳の如く、火神天狗の棲家なるを思はしむ。毎年十二月十五日大祭を執行し防火の祈禱を行ひ、翌十六日には神輿の渡御あり。その夜、弓削火の三舞樂を舞ひて、防火の祭となす。秋葉路の途上、天の宮村より半里、本宮山の東方、天方村大字葛布に葛布瀧あり。源を黒山に發して、こゝに三條の瀑布をなせり。秋葉神社に參詣するもの、之に立寄るもの多し。

犬居城址 秋葉山參詣の途上にあり。地は犬居村大字犬居、秋葉山の東麓にありて氣田川その南を流れ、村家その左右に散在すれども、道路崎嶇として峻しく、當年要害の地たりしを思はしむ。城は元弘以降天野氏世襲のもの、今は村内の瑞信庵に遺址を傳へ、只塹と壘との跡を存す。

二俣町 中泉町の北方六里餘に在り。人口凡四千、舊二星新田、鹿島、大園、阿藏の諸村を併す。町の西方に岩壘の殘存するものあり。文龜年間、二俣昌長の築く所な

りといふ。所の大字二俣に清瀧寺あり。淨土宗に屬し、徳川家康の開基、王譽春應の開山なり。大宮方の作にかゝる阿彌陀如來座像の一尺三寸なるを本尊とし、又徳川清康の廟、大久保忠世、青木文四郎、吉良於初、中根平右衛門の墓あり。

光明寺 中泉驛より八里、光明村大字山東に在り。天正三年徳川家康の濱松城にある時、甲斐の武田勢、此の山に陣して之を攻めんとす。住僧高繼、竊かに使して之を家康に告ぐ。家康即ち夜に紛れて濱松を出で、大に武田勢を破る。所謂赤豆坂の合戦を以て有名なり。曹洞宗に屬し、養老元年三月僧行基の草創、智滿、能滿、福滿の三體虚空藏菩薩を本尊とす。聖武天皇の勅願所にして、また、醍醐天皇の納めたる紺紙金泥の大乗妙典あり。また代々の徳川氏の祈願所にして、納むる所の摩利支天像、陣刀、福徳の紫印等あり。境内に御身替鐘といふ梵鐘あり。稚子瀧、鹿の通路等その他見るべき風色に富めり。芭蕉「汗の香や衣をふるふ行者堂。」

熊野侍従の墓 池田村行興寺にあり。『さらでも旅はものうきに心をつくす夕まぐれ池田の宿にぞつきたまひぬ。かの宿の長者熊野が女侍従の許にその夜は三位宿せられたり。』と大平記にある重衡海道下りの物語りに、歌よくしける侍従の女の事はあはれなる史實なり。後世藤澤寺の二世紀阿上人此處を過ぎて、その跡を弔ふ。墓は本堂の側にあり。建久九年五月三日没の八字を刻せり。又侍従の母の墳、及びその侍女たりし薺女の墓もこの附近にあり。

根堅鑛泉 中瀬村大字根方にあり。安政五年四月發見する所といへり。山上の眺望頗る展げ、温き間は浴客絶えず。只地僻なるを惜むのみ。秋葉山よりの歸途は、坂下より氣田に出で、舟を利用して氣田川を下り、天龍川に出で、池田に上陸せば、一里を行かすして中泉停車場に達す。然らざれば、阪下より直ちに西して戸倉に至り、天龍川を下るべし。然れども、更に健脚なるものは、勇を鼓して、更に之れの北方七里を行き、奥山村大字山住に山住神社を訪ふべし。

山住神社 の東は門樹山の官林及び京丸山、南は遠州灘を遙かなる山丘を隔て、眺

め、三河伊勢の巒影さへ一望の中にあり。信濃路の衝にあたれる水窪驛より登る事二十町にして社殿に達すべし。本社、幣殿、拜殿、及び末社二十二座等、廣く高き境内に散在す。社は所謂茅原河内神社にして和銅二年伊豫國越知郡大山積神社より遷座したるもの、即ち大山祇神を祀れり。毎年十一月十七日例祭を行ひ、古劍數多を什寶とせり。歸途は山麓水窪驛を経て五里、西渡より舟にて天龍川を下り、池田驛に至るを便とす。水窪には旅舎數戸あり。

更に森町に歸りて、其附近の名勝を記せん、
 小國神社 森町の西北三十町、一の宮村に在り。地は東西北の三面に宮代山を負ひ南方の一帶を一の宮の村落とす。境内平坦、中を本宮諸山の溪流の貫くあり。後山は杉の良材に富み、櫻樹又少からず。祭神は大己貴命、欽明天皇の十六年二月の創建毎年四月十八日を以て例祭を執行す。境内を距る事東北に凡そ二里、本宮山即ち本社の舊地にして、山頂に奥の宮あり。

●金剛密院 三倉村大白山の中腹にあり。養老二年行基僧正の開基にして、新義真言宗に屬す。本堂には銅佛長一尺の大日如來を安置せり。山は、富嶽秋葉の高峰と相對して、絶巔は海拔二千八百五尺なり。麓より院に至るまで登路凡そ二十五町、二王門、客殿、方丈、庫裡、護摩堂、大師堂、一段高き處に、大日堂、繁昌坊あり。毎年一月五月九月の二十六日より二十八日までを會式の執行日となせり。運慶作の隨求愛染二明王の像、弘法大師作觀音像、惠心僧都策阿彌陀三尊の畫、探幽が筆になれる惠比壽布袋、大黒天等を什寶とす。

○姫街道附近 三方原古戰場附近より、濱名湖北岸の地を指さす。氣賀町は人口三千を有する一名邑にして、引佐郡役所の所在地なり。この街道は舊時にありては、東海道の裏街道に屬し、今切の渡しの難所なく、里程又近きを以て、この路を過ぐるの旅客踵を接したりきといふ。南朝の皇子宗良親王の義舉を謀りたまひし地にして、その墳墓今井伊谷にあり。其地は氣賀町より一里餘を距つるにすぎず。この附近、引佐

細江及び猪鼻湖を所々に眺め、風景の明媚なる處少なからず。

三方原古戰場 三方村に屬して、一大平野をなす。元龜三年武田信玄の勢大舉して三河に入らんとする時、之を向へたる徳川の勢を撃破したる處、今は全く拓けて一帯の田地となる。式子内親王の歌「狩衣みたれにけりな梓弓ひくまの野邊の花の朝つゆ」の引馬野は即ち之にして、この古戰場とせらるゝは東西三里、南北二里にわたる。「春霞立ちかくせども姫小松ひく馬の野邊に吾は來にけり」匡房。近附地味堅くして農に適せず。維新の後、徳川の遺臣此處に移住し、開墾に努めたる結果が現今にては有名なる百里園の製茶場を現出するに至れり。地は天龍川の西、濱名湖の東にあたる。

再び濱松の町に歸りて、その附近の佛閣を案内せん、

普濟寺 は富塚村大字富塚にあり。僧華藏の開基にして禪宗に屬す。正長元年の草創にして、もと寺島郷に在りしを永享四年此處に移したるものなりといふ。境域一萬餘坪、堂宇甚だ宏大にして、近邊有數の名刹なり。

龍禪寺 白脇村大字龍禪寺に在り。高野山實性院の末寺にして眞言宗に屬せり。大師堂、經堂、鐘樓、水神祠、護摩堂、行者堂、荒神祠、地藏堂、二王門、及び密藏院、理性院、密嚴院、定光坊、金光院、一乘坊、地藏院、圓覺坊、寶聚坊、行泉坊等の坊舎あり。觀世音を以て本尊とす。

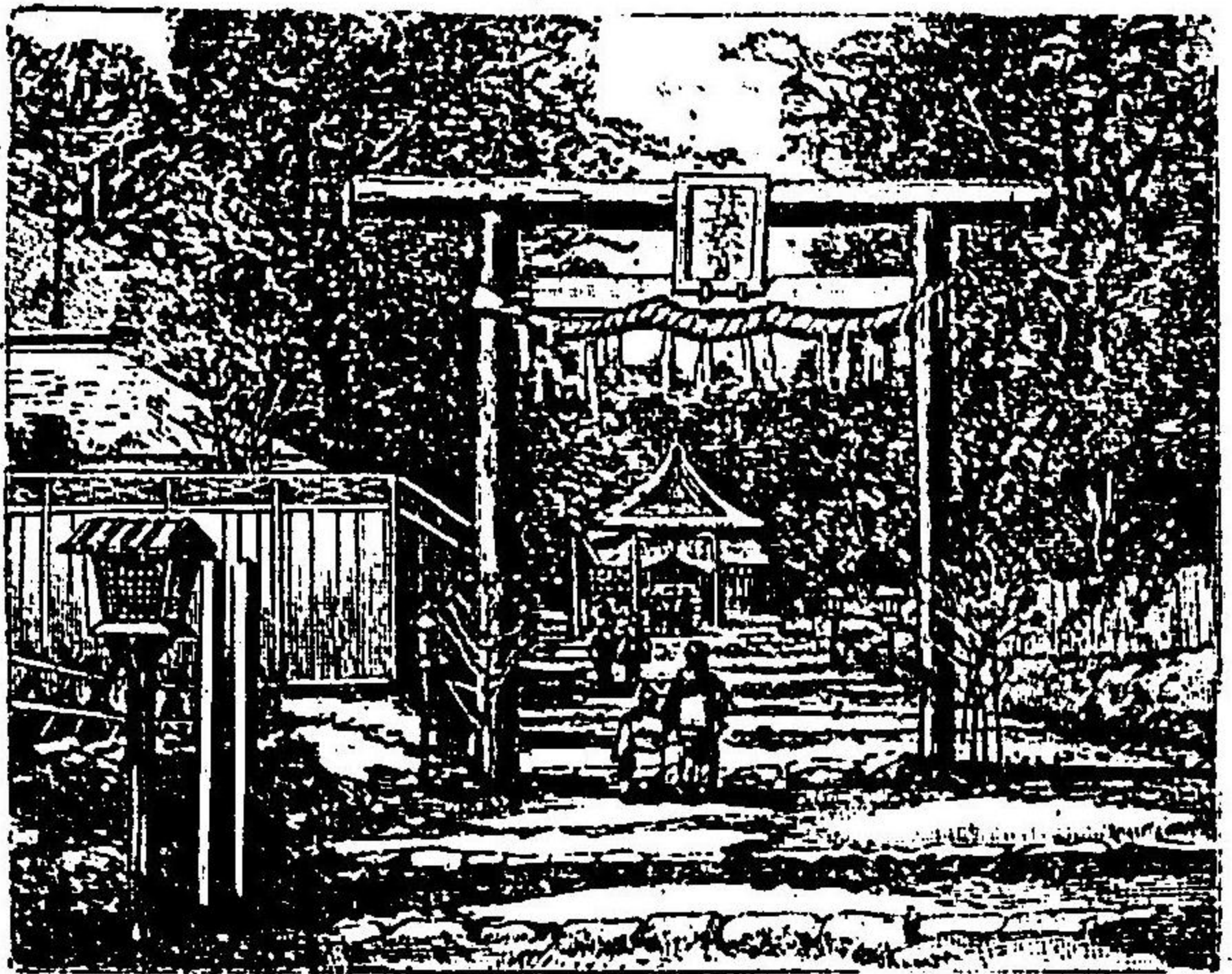
鴨江寺 同じく高野山實性院の末寺にして同宗に屬す。境域方四町ばかり、本堂、御影堂、經堂、鐘樓、行者堂、太子堂、閻魔堂、妙見堂、地藏堂、二王門及び數個の坊舎を數ふべし。觀世音を本尊とせり。よく人の知る芋堀長者の口碑ある所なり。

氣賀町 濱松町を距る事西北凡四里一町、濱松町より三河の御油町に至る姫街道の中間にあり。乗合馬車を仕立つ。地は濱名湖の東北岸に位するが故、風光頗る勝れたり。避暑地として來遊するもの最も多し。

井伊谷の宮 氣賀町の東北一里、井伊谷村にあり。後醍醐天皇の皇子、宗良親王を祀る。延元元年、宗良親王は井伊道政を隨へて奥山城及井伊谷城に據り足利尊氏追討

の事を計る。されど、土民多く尊氏を恐れて宮に力を致さんとするものなし。親王乃

ち去て、駿信諸州の士を尋ね、後ち吉野に赴き
弘和の始、再び此處に歸りて薨す。御墓は本社
の後方にあり四方土手を築き南門あり。墓所の
伊 域凡そ六百坪、宮の境域凡八千五百坪、中に本
社、神門、拜殿、權殿、神饌所等あり。境は後
方山を負ひ、前に瀧名湖の靜波を臨み、そらろ
に神靈のある所を思はしむ。毎年九月二十二日
を以て祭典を執行す。五里半許にして



無文文選聖鑑國師を以て開基となし、本尊に釋迦牟尼如來を安ず。現存せる堂宇二十

元中
方廣寺 井伊谷の宮の西一里許にあり。

元年奥山朝藤の草創にして、後醍醐天皇の皇子、

八棟、皆それぐの壯麗を持せり。國師の墓は寺内にあり。宮内省よりの守部を置く。

又半僧坊大權現といひて、國師入山の時、剃度を受け給ひし護法の權現を祀るあり。

これが爲めに方廣寺又は奥山半僧坊ともいふ。毎月十六、十七の兩日及十月の大祭に

は、賽人山に満つといふ。境内に、白崖峰、虎豹石、羊腸石、游龍窟、抱暖岩、見葉

谿、龍偃杉、玄聖關、靈仙洞、龜脊橋の十勝あり。

氣賀町より再び東海道線に歸るには陸路の風色も亦捨て難しと雖も、舟を雇うて、瀧名の湖を渡り、鷺津舞
坂に至るを最も興味多しとなす、舟賃は高くて一回内外なり、

○御前岬附近 官線鐵路より東南に位する地方にして小笠郡に屬す。此地方は山嶽

丘陵漸く陵夷し、到る處平野を見る。牧野原のごとき其一なり。道路は駿河の藤枝町

より大井川の下流を渡りて、此地方に入り、全く海岸に添ひ、川崎町、相良町を経て

御前岬に達す。又、一路は相良町より西して掛川町に至る。此附近は茶樹の栽培頗る

盛に、地に一種特色の趣を見る。

駿河國

三二二

駿河國は遠江國の東に隣り、東は相模伊豆に接し、北は甲斐に連り、南は駿河灣に瀕す。東西二十里三十一町、南北二十一里二十町、面積二百七方里を有し、一市六郡を置く。一市は静岡市にして、六郡は賀茂、田方、駿東、富士、庵原、安倍、志太即ち是なり。静岡縣の管轄に屬す。地勢概して山嶽丘陵に富み、平行の地は僅かに海濱の小區域にすぎず。國の地貌は東西に於て著しく異り、富士川以西は、幾多の山脈相接して北より南に並走し、大井川、薬科川、安倍川この間を南し、概して北に高く、南方は次第に陵夷して丘陵地となれり。富士川以東は、以西の地の如く數多の山嶽を有せざれども、富士、愛鷹の兩火山嶄然として崛起し、廣大なる裾野を曳き、其西には毛無山脈南北に走り、東には足柄山脈相模との國境を劃し、平地は僅かに富士の南麓海濱の地及び其の東方箱根火山と富士火山との間にある裾合谷黄瀬川沿岸に存するの

み。國の西北部は赤石山脈信濃の東境より駿遠の境上を北より南に走りて一大山脈を成し、赤石山(三〇九三米)大無間山(二三三二米)等最も高峻を極む。赤石山脈の東方、田代川の縦谷を隔て、白峰山脈蜿蜒し、北嶽(三二二九米)農鳥山(三〇四二米)の高峰を起す。而して安倍川の水源地方に於て二派に分れ、一は安倍川の西方を正南走して安倍郡の全部を占め、一は甲斐を境に添ひて東に折れ、更に東南に連亘す。安倍嶺(一〇四一米)龍爪山(一〇四一米)等最も著名なり。國の東半部即ち富士川以東は毛無山脈富士山の西麓を擁して南北に走り、毛無山(一九四五米)天子嶽等あり。而して毛無山の東方には本邦第一の高峯富士山屹然として聳立するを見る。富士山は駿河甲斐に跨り、高さ三千七百七十八米を有す。富士山裾野の傾斜は十七八度より十五度に至り、次第に緩漫となり、四方に廣大なる裾野を作る。愛鷹山は又一個の火山にして、富士山の東南方に横はり、主峯越前嶽は千五百米等の高距を有せり。峯頭は犬牙削立恰も鋸齒の如く、左右の溪谷また深刻なり。富士山の東方、黄瀬川の谷を隔て、足

柄山脈あり。金時山(二二二三米)丸嶽(二一〇〇米)三國山(二一〇二米)等ありて相模との國境を成す。かくの如く、國の地勢北に山を負ひ、南、海に瀕せるを以て河川は概ね北方に發して、南方又は東南方に流走して駿河灣に注ぐ。西より數へて大井川、瀬戸川、安倍川、興津川、富士川、潤川、狩野川等あり。大井川、安倍川、富士川最も大なり。富士南麓の平原は東は沼津より西は富士川に至り、東西五里、南北一里半、面積凡そ百三十平方軒を有し、富士火山より噴出せる火山砂礫の堆積より成る。中央浮島原のある附近は地多くは卑濕なり。静岡附近の平野は安倍川瀬名川の灌漑するところにして地味豊饒なり。これと一小丘陵脈を隔て、扇狀を爲して展げられたる海岸平原あり。國中最も豊沃の地にして、藤枝、焼津の二邑此處に發達す。

沿革 景行天皇の御宇皇子小碓(日本武尊)東征して浮島ヶ原に至り、賊の叢原を燎きて、皇子に抗する者を討つ。治承年間源頼朝兵を舉げ、平維盛等大軍を率ゐて之を討し、富士川に陣す。一夜水禽の起るを聞き、誤りて敵軍已に至ると爲し、大に潰走す。

す。頼朝頼朝府を鎌倉に開くの後、源廣綱、三浦義村等守護を以て國守を兼ね。正平六年足利尊氏今川範國を以て守護とし、府中に治す。八世義元に至り勢ひ頗る強大、兵を發して尾張に入り、織田信長と戦ひて敗死す。子氏眞嗣ぎ、國人離叛す。永祿の末武田晴信襲ひて府城を陥れ、遂に當國を奪ふ。子勝頼に至て、織田氏の亡す所となり、國織田氏に歸し、家康乃ち府中城に居る。天正十八年豊臣氏之を關東に移し、中村一氏を當國に封じ、後ち徳川頼宣、同忠長相繼で封を此地に得、寛永九年忠長罪ありて國除せられ、城代を府中に置き、士隊及び騎歩卒を置きて之を成らしめ、松平忠重を田中に、松平信治を小島に、水野忠友を沼津に封じ、戊辰の亂定まるの後ち、三氏を安房上總に徙して、徳川家達を當國に封じ、府中を改めて静岡と云ひ、廢藩置縣の令出るや、更めて静岡縣を置き、今は伊豆、駿河、遠江の三ヶ國を管轄す。

交通 官設東海線は相模足柄山中より來りて御殿場驛に達し、富士山を西に足柄山脈を東にせる高原を北より南に下り、三島驛に至りて伊豆鐵道を東に岐ち、遂に狩

野川口なる市街沼津町に達す。これより全く西に海岸に沿ひて原、鈴川の二驛を経て、富士川をわたり、岩淵驛を経て丘陵の中に入る。薩陀峠にトンネルを穿つ。此附近、最も風景に富めり。これより暫らく海岸に沿ひて南し、興津を過ぎ、江尻より丘陵の間に入りて静岡市に達し、焼津、藤枝を経て、島田驛に達す。又鈴川より大宮町に至る馬車鐵道の線あり。

産業 米麥は多く海岸平原に産す。特用農業物には安倍郡の茶あり。遠江の榛原周智兩郡と相接して、共に有名なる『静岡縣産の茶』の主産地を成せり。林業は大井川上流、田代の官林最も著名なり。水産は東海道西半部中最も大なる漁業區域を有し、鰯、鮪、鯛、鮭、鰯等最も盛なり。殊に鯛を以て聞え、興津鯛の名あり。其他烏賊、鰻、鰒、鱒、石花菜を産す。水産製造物には鰯、乾鰯、鰹節等最も盛なり。工業は養蠶製糸業共に他國に比して甚だ振はず。駿河半紙は古來此地の特産にして各郡盛に栽培する三極を原料とす。製作工業品には竹細工あり。石材は沼津附近より第三紀層の堅

固なる富士岩と軟き凝灰質岩の二種を産す。

○官設東海道沿線 官設東海道線は相模より來りて、御厨町、御殿場驛に達し、富士の秀峯と箱根山脈との中央高原を南に向つて下り、駿東郡の中央を横斷し、佐野、三島の二驛を経て沼津町に達す。三島驛より北伊豆狩野川の流域を貫通する伊豆鐵道の一線東に岐る。沼津町は駿河灣の東部の一灣入の處に位置し、此處より西伊豆西海岸の各港に巡航して下田港に達する定期汽船發着す。東海鐵路はこれより全く西して海岸に沿ひ、北に富士の秀峯を仰ぎ、南に田子の浦の波濤の音を聞きつゝ、原、鈴川の二驛を経て、富士川の鐵橋を渡る。富士山此處に至りて稍東し、其秀容眞に描くが如し。鈴川よりは大宮町に通ずる道路岐れ、大宮馬車鐵道の馬車鐵道其間を往復す。富士川以西は、地形全く以東と異り、富士山と全く脈を異にしたる小丘陵起伏し、海岸は處々徒崖を成し、汽車はこれが爲めに處々にトンネルを穿つ。蒲原驛より興津驛に至る間は、風光殊に明媚にして、まことに東海道中第一の好景なり。伊豆半島の天城山脈

ことに偉大なり。興津に至りてや、海岸に離れ、又海岸を見る。三保の長嘴清水港を擁して、風光また甚だ可なり。江尻より海岸を離れ、久能山を有する丘陵と北部丘陵との間なる狭長なる平地の間を西に向ひ、遂に静岡市に達す。静岡市は小平野の中心を爲し、安倍川は西南を流る。汽車は安倍川をわたりて、全く舊東海道を離れて、再び海岸に近く、宇津の谷峠の餘脈に隧道を穿ちて焼津驛に達し、これより西して志太郡なる豊饒の海岸平野の中央を横断して、島田驛に達す。大井河は驛外を流る。即ち遠江との境を爲せり。此線路中伊豆に赴くものは三島驛より下車して伊豆鐵道によるべく、大宮町地方に赴くものは、鈴川驛を下りて大宮馬車鐵道によるべし。

御厨町 東海道線御殿場驛の在る所、居民は多く農或は樵にして、その數凡そ八千、町は舊字御殿場、新橋、萩原、二枚橋、東田中、西田中、深澤、北久原、仁杉等を併せて町制をしきたるもの、駿東郡の東北隅に位し、山北小山を経て、東より入る者の先づ第一に見るべき小市街なり。而も年々の富士登山者にして東よりするものは勿論

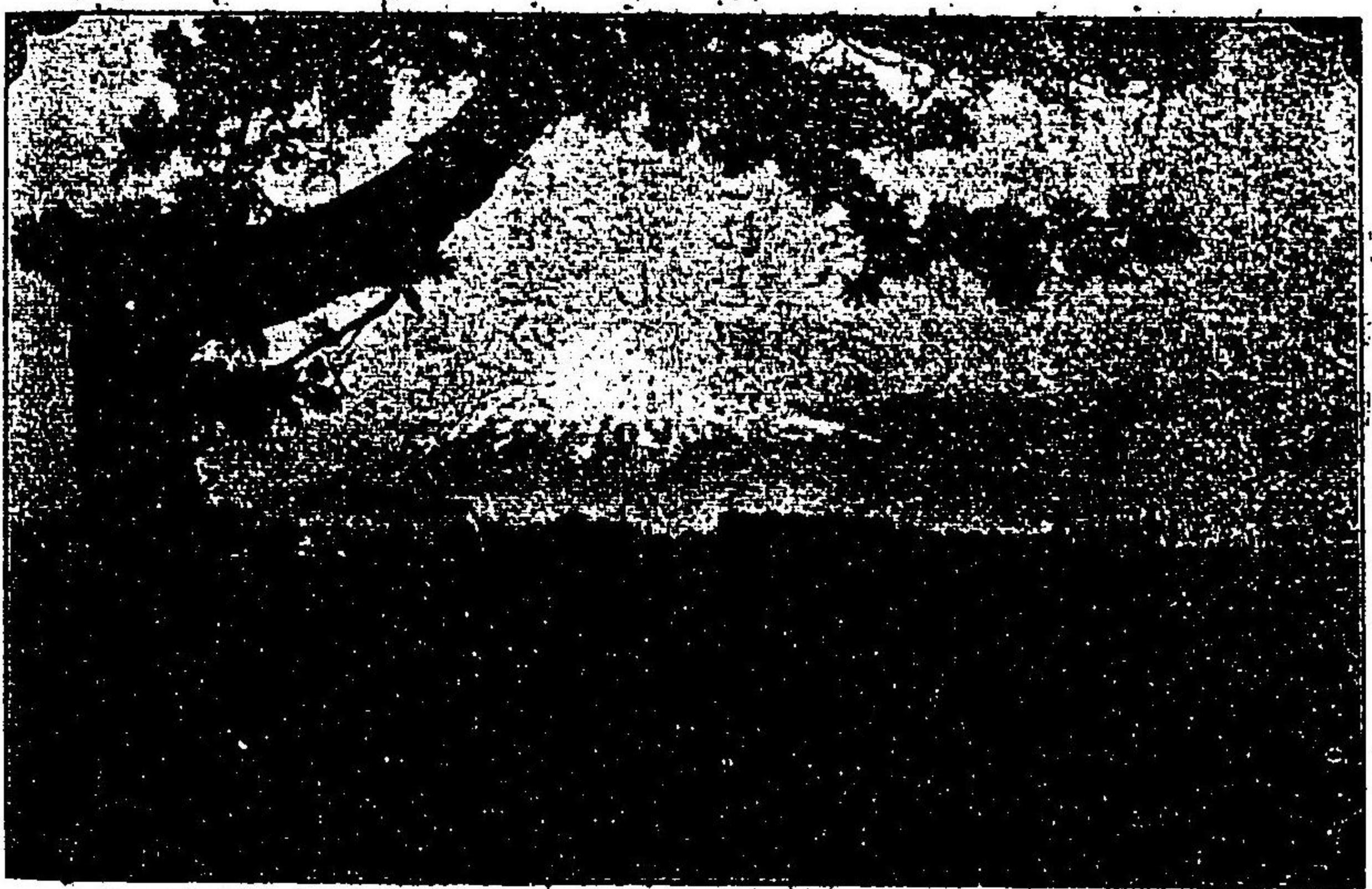
多く此の地よりするを以て、夏季となれば、全町之が爲めに繁榮を極む。往昔徳川家康の遺屍を當國久能山より日光に移す時、此處に假殿を造りたるより此の稱ありと傳ふ。町の旅店の他に、夕刻驛に著きて翌日登山せんとするもの、爲めに驛より十二町を隔てたる舊御殿附近にも旅店二三あり。

東表新道 富士登山の案内をすべし。登路に數條ありて、富士郡大宮町淺間神社の後方よりするを表口又は西口といひ、駿東郡須山村須山よりするを須山口又は南口といひ、同郡須走村よりするを須走口又は舊東口といひ、甲斐國南都留郡福地村吉田よりするを吉田口又は北口といふ。さて御殿場より一合目までは三里八町あり。道は平坦にして一直線なるが故に、車馬自由に通じ、而も關西方面より來る者は多く表口によりと雖、關東方面より來る者は大抵これによるが故に、到つて賑かなり。先づ登山者は町に剛力を雇ひ、之に隨ひて愈登嶽の途に着く。町はづれに東表口神社即ち淺間神社を拜し、一里にして瀧川村、八大龍王堂にては、ある者は堂前の飛泉に浴して水



垢離を取り、尙一里餘を行けば中宮淺間神社の前に至る。此の邊樹木漸く矮少に、山の涼しさもさして御殿場と異ならざれど、社頭より一里路は次第に爪先上りにして馬返しの茶屋に達す。已に馬を返す、道の行手漸く峻なるを覺ゆるなり。行く事尙僅かにして太郎坊に達し、此處に金剛杖を買ひ、足の甲を没せんとする砂礫を突きて、一合目の休泊所に至る。一合目より絶頂まで六里、之を十區に別ち、十合にして達す。一區の長さ十五町より二十七八町迄、一區毎にある休泊所は、石を疊みて造れる石窟にして、せばき事僅かに十數人を容るゝに過ぎず。要するに夜氣と山風を防ぐのみ。四合目以上は地に尺木寸草を見ず、山骨全く露出し、滿目之れ焦土、たま／＼白雲の冷氣をふくみて駛走するを見る。身の全く自然の偉大とその凄慘たる荒廢轉變の中に没せるを思ふべし。かくて五合目に至れば、阪は益々峻峻にして定路なく、沙愈深くして用意せる杖をつくに由なく、又足を失し易し。箱根、足柄、雨降の諸山は正に脚下にあり。左に寶永山を眺めつゝ登るに従ひ、眼界刻々に廣まり、壯快身の峻峻にある

を忘る。これより六合七合を徑、胸突八丁の難所を過ぐれば山嶺に達す。健脚ならざる人は、六合目或は八合目に一泊す。翌朝起き出で、日の出の偉觀を見るに宜し。富士山絶嶺。その高さは海拔實に一萬二千三百七十尺、駿甲二國に跨りて餘脈を縦横に走らす。即ち東南に向ふものは箱根の群山、及び伊豆の天城山に接し、東北に走るものは甲斐の天目、初鹿野、大菩薩の諸山を見、武藏に入りては秩父の群山に接す。尙西進しては、久能、賤機の名山、遠江に黒法師、秋葉の諸山、三河に鳳來寺山等皆なこれと相接觸す。或は雪白の大扇を倒懸するが如く、うす紫の笠に太白を流したるが如き、秀麗を集めたる芙蓉の峰の雄大を思ふべし。絶頂なる淺間ヶ嶽に富士山宮奥の宮あり。傍に籠處及都良香の富士山記の碑あり。碑より南に行きて、鱒池と稱する河原を過ぎ、三島ヶ嶽を左に見て、絶嶺第一の峻たる劍ヶ峰に登る。峰の高さ四百尺、堅硬なる岩質恰も利刀の如くに峙つ。麓に野中至氏の測候所の跡あり。北なるを馬の脊、雷巖、白山嶽を過ぎ、釋迦の割石を見て、東に出れば久須志嶽あり。久須



志神社を拜して少しく下り、山の東側に
出で、伊豆嶽、成就嶽を廻る。此の邊常
に地面蒸氣を填出せり。かくて東麓の河原
を過ぎ、巨岩を縫ひて行けば、銀明水あり、
八ツ子の梯子を登れば駒ヶ嶽にして、大石
俵石あり。之れを外輪廻りといひ、約五十
町あり。之等の峯を總稱して富士の八峰と
いふ。さて剣ヶ峰より下りて、噴火口の岸
なる西麓の河原に至り、馬脊山を左にして
行けば、白山嶽の麓に金明水あり。之れよ
り噴火口に沿ひて岩石の上を辿れば即ち東
表目に達すべし。之れを内輪廻りといふ。約

三十町あり。富士山記の碑を後方に數歩すれば、舊噴火口上に出づ。直徑凡十三町、
坑底は常に雪を蓄へたり。之を内院といふ。口壁の南方に一怪巖の突出せるあり。虎
石と稱す。絶頂の眺望は、千里一回觀に集まつて、際涯なく、津々たる大平洋、唯動
かざる波頭の如くに打續く箱根足柄、愛鷹、天城の峯々、眞滴の如き蘆の湖、浮島沼
山中湖、絲の如き諸川の群を縫へる村落と市街と唯、斑々たる黒點の如し。若し夫
れ朝暎の東海に進むの時に至れば、下界未だ全く暗々たるに、東方の大空仄かに白み渡
り、淡紅となり深紅となりて、その美觀を言ふに遑なくして、旭光群嶺の頂に走り、
漫々たる朝の海洋忽ちにして輝ける紅波を漲らす。夜明けて萬物悉く光の中にある時、
四顧限りなき一大パノラマは展けて、身のまさに天界に在るを思はしむ。されど中腹
以上は雲霧多くしてかゝる好機を得る事殆ど稀なり。歸路は、何れの登り口にても、
沙走りの道といふがありて、絶頂より僅かに三時間内外にして麓に達すべし。されど
又、特に案内者を雇ひて所謂御中道巡りをせば、風景を賞するには最も妙なり。大抵

六合目位の處、山腹を一周す。寶永山、崩れ穴、牡丹畑、鬼ヶ澤、天の浮橋、冠石、姥ヶ懐、大澤、石瀧、木花澤、佛石澤、神の御庭、小御嶽等奇勝を見るべし。

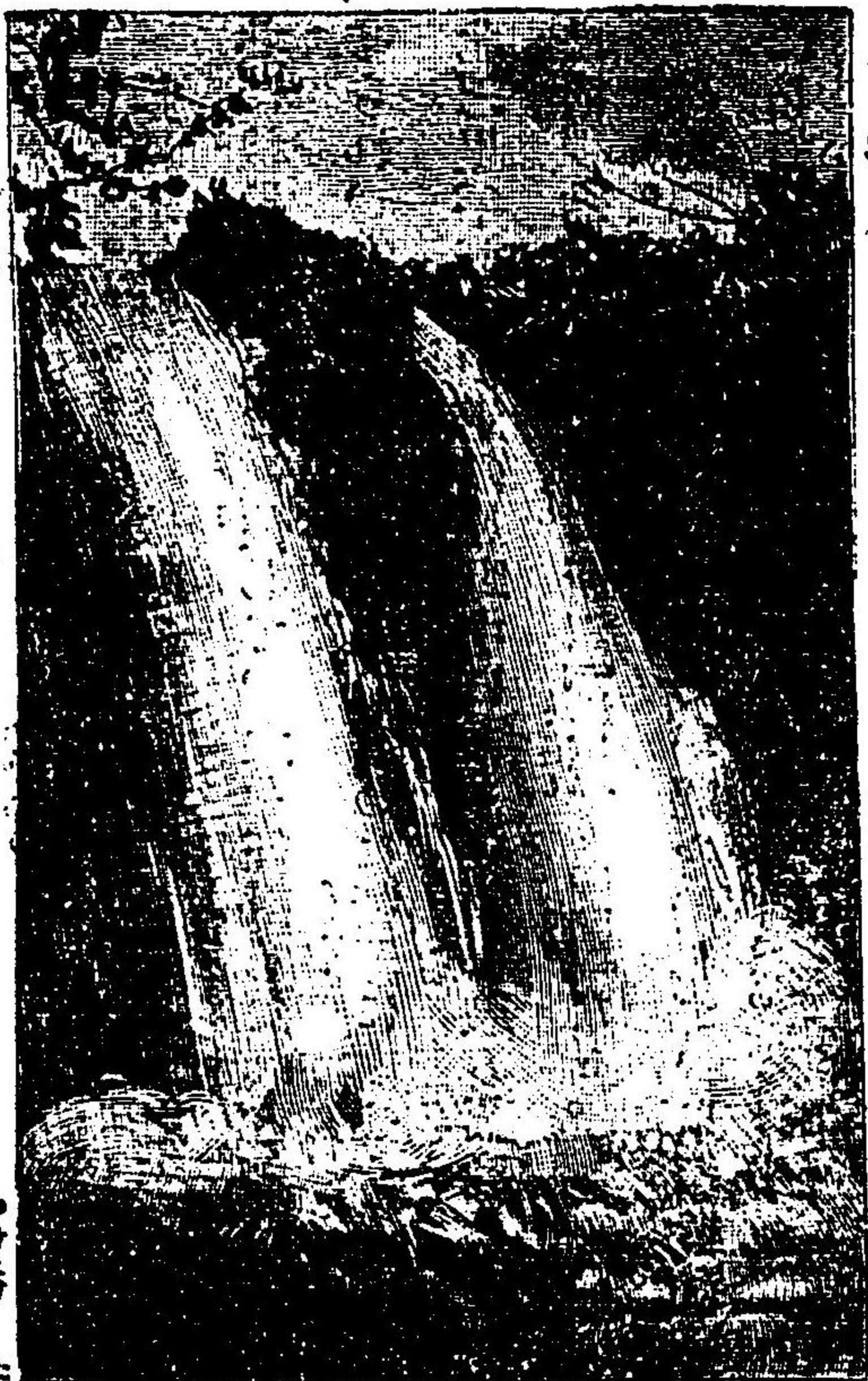
富士山を讀せる記文少なからず、今一二を採取せんに先づ山邊赤人の詠あり。『あめつちの、わかれしときゆ、かむさひて、たかくたふときするかなるふじのたかねを、あまのほら、ふりさけみれば、わたるひの、かげもかくるひ、てるつきの、ひかりもみえず、しらくもい、いゆきはかり、ときじくぞ、ゆきはふりける、かたりつき、いひつきゆかむ、ふじのたかねは、遠塚属水氏其『不二の高根』に記して曰く。『靜かに起ちて窓を推せば落日袖にあり。寒星人と親しむ。微茫の中物あり、簾々として來りて石室を去る數尺の處や過ぎる。白衣冠して白馬に騎するものあり、白幡を撃ぐるものあり、虚を渡りて聲なく寂々として行く。嶽上の鬼物この夜闌げ人籟絶るの時に當り出で、遊ぶなるならんや、燈を執りてこれを照せば、馬や幡や車や忽ち消え、青沙の如きもの袖邊を掠めて飛び、一氣あり水よりも冷かに來りて燈を吹き滅し、一團の白氣上方に向つて去る、蓋し夜雲の行くなり。大靜大寂久しく立つべからず。終に扉を鎖して寝ぬ。輕寒蒲團に上りて眠然し難し。曉ならざるに短夢回リ來れば主人は既に爐に歸して飯を炊く、余や既に萬古の雪に嗽ぎて心下に一塵事なし、靜座して以て日出を俟つ。既にして石室の主人磨きて曰く、日將に出でんとす。起ちて扉邊の平石に歸して之を見る、始め東方昏黒の中紫氣あり掃曳し、漸く變じて微紅となる。余眸を凝らす俄かにして炬の如きものあり、色温丹の如し、或は弄り或は降る。會ま彷彿として上峰に天鷄の聲を聞く。石室

の人曰く是淺間神社の鐸聲なりと。余屏息して立ち、石室の人跪きて恭拜す。須臾にして冥中混沌のところ依稀として五彩の斑文を作し、次第に鮮明を加へて光銜陸離遂に混じて猩血の色をなす。裡に物りて浮べり。双黄の卵子の如し。忽ち合して熔銅の色を爲す。石室の人曰くこれ太陽なりと。熔銅の色は再び變じて爛銀の色を爲し、環らすに紫金を以てし、終に白燃鐵の色を爲す。忽ち大鍵の一下に達ふ如く百千道の金箭直ちに天を射り、冥中猩血の色逆ち起ちてこれを追ひ、太陽乃ち躍如として昇る。天地茲に清明なり。』

再び御厨町に歸りて附近の探勝をせん。

藤原宗行卿の墓は町の字新橋にあり。承之年間北條高時の暴威を憤り、光親卿と共に後鳥羽上皇を補佐して、之を征討したれども、不幸にして官軍敗れ、三帝は謫遷せられ、宗行光親は、武家の爲めに斬罪に處せらる。又光親卿の墓は、御殿場驛の西北三里半許、須走の原野中にあり。四邊頗る荒廢して、直ちにそれと見分難し。附近は清少納言が枕草紙に所謂『横走りの關』なり。

佐野驛 東海道線は、御殿場驛を發して、足柄街道に沿ひ、疾き事矢の實く、十分にして當驛に著すべし。地は有名なる佐野瀑園を以て知られ、園は停車場の西北十二



町餘の處にあり。私設にかゝる者なりと雖、境域廣濶、或は富士の野中心よりなれる岩石の配置、鏡面をつらねたる泉清く湛えて、已に人工を脱したるの跡を見る。五條の瀑布あり

て、深々林間に泉石を打ち、高さ二丈或は四丈、雪解の瀧、富士見の瀧、月見の瀧、銚子の瀧、狭衣の瀧之なり。五瀑相並びて小崖に懸るに、下は池、池の畔に亭あり、又蘆ぶきの旅館あり。池は即ち黄瀬川の上流にして、漫々たる上に舟を泛べ或は釣を垂れて消暑の遊となすべし。園の北方六七町にして萬山あり、景ヶ島はその一丘陵を

指すものにして、躑躅、眺望を以て名あり。此の地を経て富士登山口の一なる須山村字須山に至るべし。

佐野神社 佐野驛の西數町にあり。村社格にして明治九年の創建、拜殿の側に一碑あり。谷干城氏の撰文を刻す。社は即ち建武の二年、後醍醐天皇尊良親王を奉じて、此の地に尊氏と戦ひて死せる藤原爲冬の靈を祀るものにして、その墳墓及び侍臣十三人の塚は社の背後にあり。

沼津町 東駿の一名邑にして、駿東郡の南端に位し、西北に愛鷹山を負ひ南方駿河灣に臨む。狩野川は町の東南を流れて、灣内に注ぐ、注ぐ所即ち沼津港にして、船舶常に幅濶し、又伊豆の下田、松浦、戸田に通ふ汽船日に二回づゝ出帆す。人口凡そ一萬三千、街衢は方形をなすに近く、中に静岡地方裁判所支部、駿東郡役所、區裁判所、警察署、監獄分監、測候所、中學校、高等女學校、商業學校、農林水産學校等あり。此他銀行會社より劇場遊廓等に到るまで備はり、商業の繁榮も亦甚だ見るべきもの多

し。字に本町、上土、三枚橋、城内等あり。地は三島驛より二哩七十二鎖、海岸は浦の水、沙上の翠、所謂千本松原の絶勝を控ゆるが故、氣候緩和且空氣清涼、別荘等も多し。町より三島町に電車を通ず。

沼津城址 大字城内にありたれども今は悉く拓かれて舊觀全く存せず。地は町の北方にして今の停車場附近なりといふ。今川氏の築く所にして、永祿年間その敗死するや、武田氏に歸し、後徳川氏の下にありて交々封を之に推し、維新に至る。沼津町の海に頻せる一帯には舊蹟多く、車返坂源右府牧狩旅館の址と傳へ、又東門間千本濱の六代松は平維盛の子六代の斬られたるところなりといふ。此他龜鶴墳、門間閻羅、道喜塚等あり。

日枝神社 町の東端なる字新田に在り。郷社格にして、大山咋命を祀る。華表の東に高さ五尺許なる石ありて、前面の富嶽を圖に刻す。探幽の筆なりと傳ふれども遽かに信すべからず。又源頼朝が富士の牧狩に用ゐたりといふ大釜あり。社の西に一里塚

あり。徳川幕府の頃里程を示さん爲めに榎樹を植ゑたるもの即ち之なり。社は毎年九月二十四日を以て例祭を執行す。

丸子神社 町の字淺間に在り。縣社格にして國常立尊を祀る。又内に郷社淺間神社を合祀せり。丸子神社はもと市道の北にありて、住時は社殿頗る端麗なりしかど、天正年間、武田勝頼、織田氏と戦ひて敗績せしを憤り、祈願所たる本社を焼き拂ひたるを、後今の地に移せしなり。淺間神社は、毎年九月十五日例祭を執行す。

沼津町の海岸 は又千本松原と稱し、一帯の沙濱に翠松群生し、眼を上ぐれば、鏡の如き靜かなる駿河灣の一碧を臨み、田子の浦、三保の松原、久能山、北に富士の芙蓉を仰ぎ、南には海上三里を隔て、伊豆大瀬崎に對す。地は往古、乘運寺の開祖、増譽上人海風の荒きを防がんが爲めに、一松に一經を誦して之を植ゑたりと傳ふ。松原の東端に長谷寺あり、觀音佛を安置す。

牛臥海水浴場 沼津町より南行して右折し、狩野川に架せる湊橋を渡れば十餘町に

●原町 沼津町より四哩七鎖、五十三次の第十三宿、人口凡六千を有し、舊原宿、大塚町、一本松村、助兵衛新田、植田新田等を併せたり。駿東郡の西南海濱に位す。地に植松氏の帶笑園、松蔭寺等を見るべし。

●松蔭寺 町の字原宿にあり。禪刹にして弘安年中天祥西堂の開基、悟道明達の擧、宗教史上に高き白隠禪師は寶曆年間此處に住し、明和五年當寺に寂滅す。神機獨妙禪師の諡によりて、寺域東隅松の枝交らふ中に葬られたり。荆叢塔即ち之なり。本堂に本尊釋迦如來を安置し、又兆殿司筆十二薬師、衣川の湯釜、武田信玄伽羅枕等を藏して什寶とせり。

●浮島の沼 町の西方一里餘、郡の西端、國道の北方に在り。富士郡に跨れるが故に又富士沼と稱し、古人の須戸の湖なり。東西三十六町、南北二十四町、四邊は古來風光の佳なるを以て稱せられ、源平の古戰場としても亦有名なり。沼の水は西なる潤川に落ちて海に至る。東海道線列車窓よりしてその髣髴を見るべし。藤原基政「舟よはふ

富士の川上に日は暮ぬ夜半に下行かむ浮島が原」後京極「あしがらの關地越行く東雲に一むら霞む浮島が原」鬼貫「うきしまや露に香うつる馬の腹」

此のあたり、列車の窓は前面田子の浦の白沙青松を畫き、駿河灘の波頭雪を翻へし。富士の大麓に沿ひて西に走る。忽にして鈴川驛なり。

●吉原町 鈴川の北三十餘町にあり。元吉原村大字鈴川に屬す。富士郡の中心地點にして、人口凡を四千五百、富士郡役所、區裁判所、警察署等あり。市街は稠密して殊に豪家多し。妓樓軒を連れ、繁盛を極めたり。鈴川停車場よりは鐵道馬車の便あり。町を経て大宮町に至る。これより甲斐との國境まで凡を九里半、大宮町、北山、人穴等を経て甲斐國西八代郡本栖村に至る舊街道あり。鈴川停車場の南に當りて一丘あり。天香久山又沙山といひ、北は富士山より西に田子の浦、三保の松原、久能山等を望む。山の東側に妙法寺あり、毘沙門天を安す。こは聖徳太子の作にかゝり、長け八尺、肩上に太子の立像あり。又堂前に鎧石といふ奇石あり。町の東北に平家越と稱する地あり。

源平の戦に平軍一夜水禽の起つを聞きて走るの處なりと傳ふ。

平家物語「富士川の事」の條に曰く「さる程に治承四年十月二十四日の卯の刻に、富士川にて源平の矢合せとぞ定めける。二十三日の夜に入りて、平家の兵ども、源氏の陣を見渡せば、伊豆駿河の人民百姓等軍に恐れ、或は野に入り山に隠れ、或は船に乗りて、沙河に泛びたるが譬の火の見えけるを、あなおびたしと、源氏の陣の遠火の多きに、實に野も山も海も河も、皆な武者にてありけり、如何せんぞあきねける。その夜半ばかり、富士の沼いくらもありける水鳥どもが、何かは驚きたりけん、一度にはつと立ちける羽音の、雷大風などのやうに聞えければ、平家の兵共、あはや源氏の大勢の向ひたるは、昨日齋藤別當か申しつるやうに、甲斐信濃の源氏等富士の裾より搦手へや廻り候はん。敵何十萬騎かあるらん。取込まれては叶ふまじ。殺むば落ちて、尾張川鬘股を逃げやとて、取物も取りあへず、我先にくと落ち行きける。余りにあわて騒ぎて、弓取る者は矢を知らず、矢取る者は弓を知らず、我馬には人乗り、人の馬には我乗り、つなきたる馬にのりて馳すれば、株を廻ること限りなし。其邊近き宿より、遊君遊女ども召し集め、遊び酒宴しけるが、或は首斷割られ、或は腰踏み折られて、なめき叫ぶこと懸びし。同じき二十四日の卯の刻に、源氏二十萬騎、富士川に押し寄せて、天も響き大地もゆるぐばかりに、鬘を三箇所作りける。平家の方には、鬘より返りて音もせず。人を入れて見せければ、皆な落ちて候ふと申す。或は敵の忘れたる鐵取りて登るもあり、或は平家の捨て置きたる大暮取り歸るもあり、凡平家の陣には、鬘だにも廻り候はずと申す云々。」

福泉寺 吉原町の北方一里餘なる鷹岡村字久澤に在り。馬車は厚原にて下り、右手

の舊道數十を行くべし。曹洞宗に屬し、建久四年曾我兄弟を埋葬せし後、虎御前の來りて結庵せしを草創となす。現今は假堂の中に藥師如來を安置す。境内の東北隅に曾我兄弟の墓あり。五重輪塔二基、小堂の裡にあり。古墳の蒼然たるもの暗き小堂の中に立つ、祐成は二十二歳、時致は二十歳、行人佇んで默想之を久しうせざるなし。寺にその位牌二基を藏せり。此の邊一帶大淵、富士根、北山の諸村より須山村に亘りて、茫々たる高原の末遠く富士風に吹かれて荒涼たるは、即ち富士の裾野なり。建久四年五月源頼朝が數萬の將士を率ゐて收狩をなせし夜の出來事は、皆人のよく知る所なり。地に三極、濱梨等を産物とす。

田子の浦 富士郡の南端、田子の浦、これ吉原村の二村に亘る一帯の海濱なり。青松白砂を壓して北に富嶽の雲を繞らすを仰ぐ。西には三保の松原、南ははてしもなき大平洋、長汀十里を打ちよする浦の波を、富士うつす田子の浦わの夕なぎに舟こぎよ

する山の上まで『田子の浦の風を長閑けき春の日に霞を波に立つばかりなり。』親しく逍遙して之を賞さんには、鈴川驛に下車するを便とす。その東なる一本松に要石あり。如何なる高潮と雖、海水の之より北に入り来る事なしといふ。

●大宮町 鈴川停車場より吉原町を経て四里、馬車鐵道の設備あり。舊大宮町、大宮西町、萬野原、黒田、星山等の諸村を合併したるものにして、富士裾野の西端、甲州舊街道に衝れり。人口凡そ一萬二千餘を有し、殊に夏季の間、富士登山の客市街に満ちて繁昌を極む。製紙製茶の業甚だ盛んに、又馬車の停まる入山瀨には、富士製紙會社の第一工場、平間に第二工場あり。何れも規模宏大にして、附近煙突の林立するを見る。昔、駿河より魚鹽を甲信の地に送る者、又は下つて甲斐地方より東上するものは皆此の舊街道に據りたるなり。されど現今にては富士川西岸の新道による旅人少く、又富士川の水利を多く貨物の運輸のみにして、人の之によるもの多からず。所謂大宮口即ち表口は關西よりするもの、富士登嶽路にして、登山口の側、大字大宮に官幣大

社なる富士大宮あり。

●淺間神社 木花開耶姫を祀り、合殿に邇々杵命、大山祇命を祀る。社殿は垂仁天皇の三年富士郡山宮村に創建したるもの、大同三年阪上田村麿、勅を奉じて此の地に遷す。代々の天皇、就中後醍醐天皇の如き最も崇敬を深うし、武田徳川二氏も或は什寶或は神領の寄附、社殿の造營等に致す所多し。寶永、安政等の天災に依りて今は僅かに本社拜殿の外、三の宮、七の宮等を残すのみなれども、往昔は社殿に百八十間の長廊をめぐらす等、壯嚴なる建築なりしといふ。境内には麗しき垂枝櫻數株あり。社頭には明鏡池、玉泉洞神立山等、往時十二勝の殘存するものあり。社傍なる富士溶岩流の末より涌き出づる清泉は、湛えて玉碎池といひ、又神立山の麓より来る泉は湧玉池をなす。

●大宮口 は即ち右の淺間神社を後よりするものにして、登山者は右の池に身體を淨め、社前の旅店につきて登山の用意をなすべし。道は社の西よりその後方に出で、右

に行く事一里にして村山に至る、こゝに淺間神社の攝社たる根本淺間神社あり。それより草多き東宮ヶ原を登り、里餘にして大華表の跡ある札所、更に一里を登りて八幡堂に著す。大宮の町より八幡堂までは馬あり。

富士登山會社 八幡堂にあり。山中の茶券、食券、宿泊券等を賣るなり。これより一里を登れば笹垢離に至る。雲切神社あり。更に一里、一合目に達す。以下御殿場の登路と同じ。

本門寺 大宮町の北一里許、地は北山村大字北山にして、富嶽は東北に、渺茫たる大洋は平野を超えて南方に輝きたり。老樹の森々たる溪流の淙々たる、幽邃を極む。寺は日興上人の開山にして文永九年の草創、法華宗に屬せり。本堂には本尊として大曼陀羅を安置す。御影堂、垂跡堂、客殿、五層塔、芙蓉書院、及び日興上人の廟等あり。堂宇の宏壯にして華嚴なる事、一里を出で、尙之を指摘し得べし。

大石寺 本門寺の北一里になり。本門寺と共に日蓮宗の巨刹にして富士五山の一なり。

り。正應三年の草創、同じき上人の開山なり。地は上野村大字上條にして、境内よりする眺望は本門寺と略相似たり。山門、二天門を過ぐれば、本堂には開祖日蓮上人の妙法大曼陀羅を本尊として安置し、又日蓮、日興二僧の像をおく。左折して鬼門を入れば、客殿、書院、方丈、對面所、庫裡等の巨堂並び立ち、その他賽路の左右にある蓮藏坊以下の支院等を擧ぐれば、大小實に百餘の堂宇あり。客殿の傍に日興上人手植の杉あり。本堂の背後には板倉、池田の諸侯の墓、各高僧の廟、その右方には五層塔の時つあり。老樹古櫻茂生して境内の氣真に森々たるものなり。

白絲瀧 大宮口方頃の裾野には有名なる勝地にして、白絲村大字原村の北方に在り。處は富士の西麓、大宮町を距る三里なり。幅四十餘丈、直下八丈、その最も大なるものを雄瀧雌瀧といひ、水の落つるさま、凡て數千條の白絲を懸けたるが如し。瀑を繞りて藤、躑躅、楓等茂生し、中に『時しらぬ雪解の水か神代よりとはに落ち來る白絲の瀧』といふ加茂季鷹の國風を刻したる碑一面を立つ。瀧を距る四五町にして工藤祐經の

墓あり。同じ村の狩宿なる井出氏の宅地は、源頼朝が、建久四年五月富士の牧狩を催せし時、設けたる旅館の舊趾なり。井出館舊趾といふ。同家には盃、太刀、甲冑の拜領物、今川、北條、武田諸氏の古文書を藏す。門前に駒込櫻あり、又下馬櫻ともいふ。白糸の瀧を距る一里、上井出村大字人穴に、

富士人穴 と稱するものあり。仁田四郎が往復一晝夜を費したりといふもの之なり。松明により洞口より石階を下れば、中は廣さ二間餘り、底には常に冷水を湛ふ。

洞口より二町にして極まり、石を積みて入る事を禁す。富士詣者の籠處たる小屋二棟あり。窟を出で、北すれば、淺間神社及び富士講の開祖角行上人の墓あり。

東海道線は鈴川驛を發して、程なく富士川の鐵橋を渡り、

岩淵驛 に著す。驛は庵原郡富士川町大字岩淵に屬し、川の西岸、河口に瀕して位

す。所謂甲州新道は此處に發して松野内房の諸村を經、南巨摩郡萬澤村に至る。即ち甲斐國南巨摩郡身延村なる日蓮宗總本山久遠寺の賽路にして、道路峻辛じて人力車を

通すと雖、賃金高し。又當地より曳舟の便によりて十八里の富士川水路を泝るものあれども、殆ど二晝夜を費し而も水流の急と礁岩の峻とは勢ひ賽人旅人をして遠路を迂廻せしむる事多し。停車場と河とを通ずる運河ありて、甲斐畝澤より來る貨物を運搬す。又河口の西方海濱一帯を稱して、

吹上の濱 といふ。富士河口の海に注ぐ吹上の淀を受けて、茫々たる外洋に南面する處、清見瀧、三保の松原、田子の浦を一望に收め、北方の空に芙蓉の峯を仰ぐ。風の趣の勝れたる田子の浦に匹敵すといはる。

富士川 源を甲斐に發せる日本三急流の一にして、その笛吹、釜無、蘆の三川を併せて南に流れ、當國富士、庵原の郡界を走り、内房村に芝川と合し岩淵驛の東方にして海に入る。當國に屬する部分は、凡そ五里の流にして、内に俵石の奇勝あり。水路の便あれども、水勢の峻急なる真に人を運ぶに適せず。岩淵より甲斐國南巨摩郡畝澤に至る十八里の間、舟頭に長綱を曳きて以て登る。屏風岩、藤橋、俵石等の奇勝あり。

此の行程殆ど二晝夜を要するに反し、緬澤より下るものは僅かに六時間にして岩淵に達す。水夫の熟練定らざるか、近年にては身延山に詣づる者の外には、之を利用するもの少し。川は永長年間徳川家康の疏鑿する所といはる。沿岸の風景は一として旅人の心を喜ばしめ、又は探勝者の眼をしてその奇と峻とに驚かしめざるはなし。委しくは甲斐の部を参照せられたし。

蒲原町 舊蒲原宿、小金村、中村、堰澤村、神澤村等を併す。庵原郡の南端に位し岩淵驛の西二十町、町の西方なる家續きの由比町を併せて、人口凡そ八千を有す。蒲原古城址は又城山ともいひて、富岳を脊にし、三保の松原、伊豆の山々を見晴し、景趣掬すべし。その山腹を穿てば、鮑、帆立貝等の化石を發見すといふ。町大字なる蒲原宿の南に

淨瑠璃姫の墓 あり。墳は殆どその形を辨せざるまでに頽廢し、松之を圍繞せり。昔此姫矢矧の宿より牛若丸の跡を慕ひて、陸奥國へ下る時、蒲原の宿まではつきたれど



も、心の疲れ身の疲れにいらしき最期の骸を此處に止めたり。里人あはれがりてよりて此の塚を立つと名所圖會は言へり。淨瑠璃姫の事は、天正の妓小野於通が筆になりて、淨瑠璃の中祖とせらる。

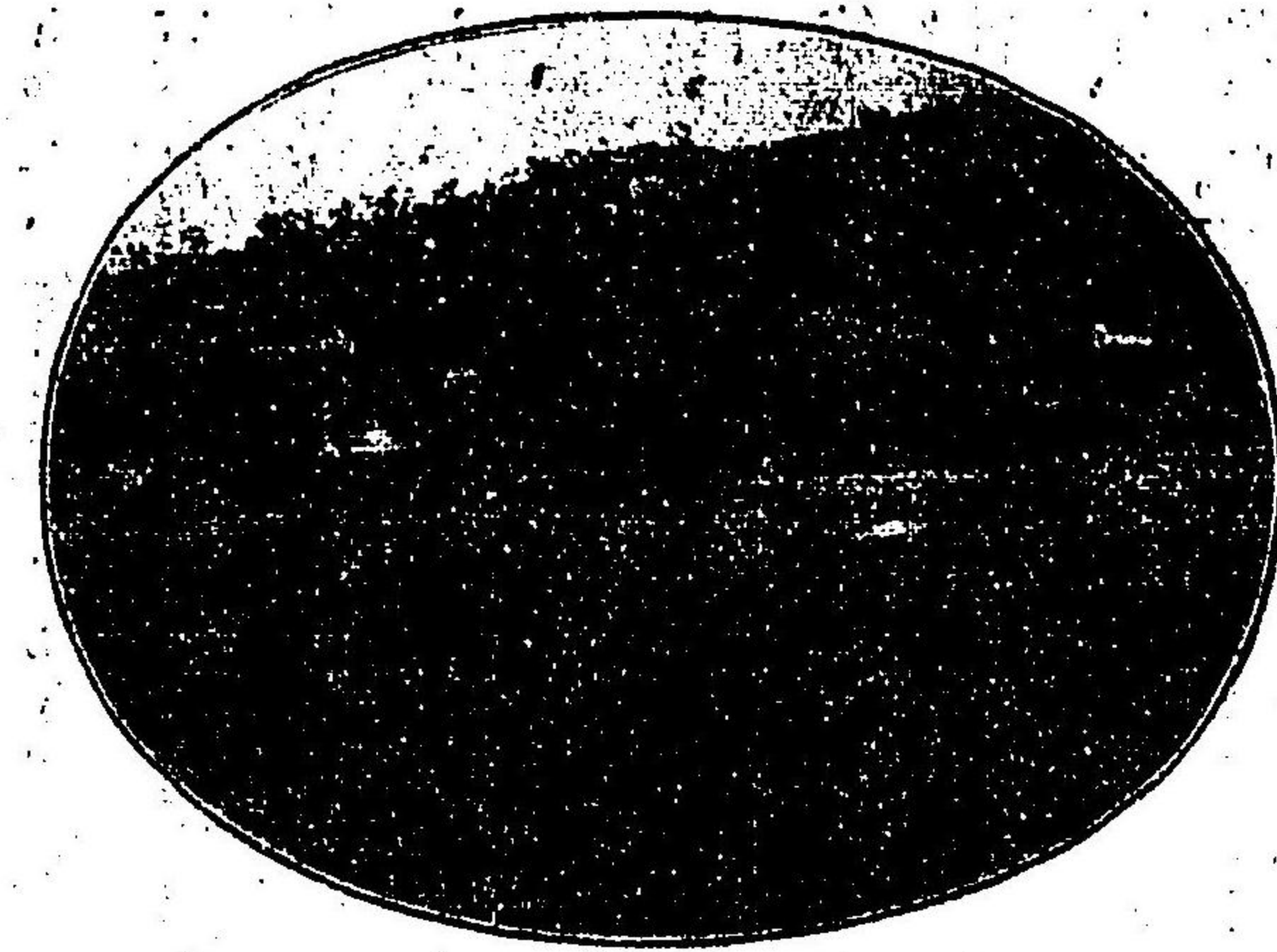
山 豊積神社 由比町大字町屋原に在り
遠 延喜式内に列し、木花咲耶姫を祀る。天
宮 武天皇御宇の創建にして、大同年間坂
上田村應東夷征討の時の祈願所たり。
又今川義元が駿府在城の頃、常幣社司
たりしものとなり。毎年四月初酉の日

を以て、例祭を執行す。蒲原驛より興津驛に至る間、小嶺薩垂峠の隧道を過ぐ。峠は即ち東海道國道に横はるものにして、東の麓なる西倉澤の望岳亭は懸崖の上に設けられ東北には富士、愛鷹の二峰南は渺茫なる大洋を見望したり。而して由比も三保も左右指願の中にありて真に屈指の勝地たり。一番阪、二番阪、蜂ヶ澤、山の神平の頂に至る。之れその東面なり。牛蒡阪、葛籠阪、女夫阪を降りて興津川畔に至る。之れその西面なり。観音二年足利氏兄弟の相戦へる處、又永祿の武田今川兩氏同じき十三年の武田北條兩氏等の古戰場なり。されど現今の旅客は鐵路之を穿ちて、多く此の勝を知らず。さて之れより僅か二十分の間、左に駿河灣の波岸を洗ひ、三保の松原長く海に浮ぶを見て、

興津町に達す。人口凡そ八千を有し、庵原郡役所、警察署、農商務省園藝試験場等の所在地にして、商業の繁榮、市街の賑ひ、而も町の海濱（停車場より約六町）は清見瀉の勝地と海水浴と、以て町の状況を察するに難からず。此處より甲斐に入る一

街道あり。身延山まで十三里餘、關西より之に詣づるもの、取るべき道なりとす。物

産は興津鯛、魚煎餅、羽衣飴。



清見寺

清見瀉海水浴場は町の大字興津宿の海濱にして、一帯遠淺の沙濱に巨岩の水際に起伏するありて、自然の防波堤なるが故に婦女子の浴するに至極適當なり。地は正前に三保の松原、西南には清水港、及び久能龍華寺の峯とを仰ぎ、東南駿河灣を超えて豆相の山影を望み、東北の天には富嶽、愛鷹の聳ゆるを見る。地はまた新橋停車場を距る百八哩程にして、六時間許にて達す。停車場にては鯛飯の美味を賣れり。

清見寺 興津町の北なる大字清見寺の高丘にあり。鐵路此の下を過ぐ。此寺門は往

な』
 清水港 安倍郡に屬し、巴川の河口に位す。江尻停車場を距る僅に十町、人口六千餘を有し、北方八町に在る入江町と共に繁昌せる小市街なり。港は町の東部に於て東西二十町、南北二十三町、船舶常に輻湊し、而も尙慶長以來良港の稱ありて、嘗ては幕府より、四十二軒の間屋を命ぜられしといふ。甲斐地方山間の物産は一に此の地によりて輸出せらる。特別輸出港なり。地に船具會社、セメント會社等あり。其東北部の海濱には海水浴場の設備あり。町に徳川氏の御殿址あり。中央に金毘羅の祠を鎮す。龍華寺 不二見村大字村松に在り。清水町よりは南方僅かに十町に餘る。境内は最も富岳を眺むるに適し、脚下は茫々たる駿河灣を一時に集め、景趣壯大にして快瀾備前の服部洪齊が之を以て天下第一の觀となし、こと敢て誇張の言にならざるを思ふ。之に依りて寺は觀富山と號し、法華宗に屬し、日近上人を以て開山とす。廣き境内には大蘇鐵、鶴松、霸王樹等の名木あり。その最も眺望よろしきを得たる所に、故高山



久能山 清水町の西南五里半、海濱三保崎に沿ひて行けば、久能村根古屋に久能山はあり。清水又は江尻又は静岡より行くも何れも行程に大差なく、車馬の便あり。山しかく高きに非ざれども嶮要容易く犯し難し。山上より遠望すれば、南は茫々たる大平洋を展き、東北、駿河灣を隔て、富岳を仰ぎ、眼下に指點してその風葉を賞すべきもの、三保の松原、清見瀨、清水港

などあり。山上徳川家康の靈を祀る。別格官幣社久能神社あり。元和三年徳川家康の遺骸を山上に埋めて一祠を建てしが、後之を日光に移すに及び、彼是共に東照宮と稱して靈を留む。根古屋村は山の南麓に在り。之れより石階十七級を登りて外門に達し更に十數町を登りて社前に至るべし。勅額御門、神廟、社務所、唐門、鼓樓、神樂殿、神饌所、唐銅の華表等皆彫刻の美を盡し、金紅の交彩、燦然として英靈を守るが如く、靈祠金門の奥深く鎮して、華麗壯嚴、地の嶮要と秀麗と相待ちて、眞に神境の思あらしむ。その他、手植の松、高野槇、實割梅の碑、五重塔遺址等散在す。

安居神社 山の南方、久能村大字安居にあり。武内宿禰、國常立尊、猿田彦命を合祀す。俗に白鬚の社と稱し、古來此の地の産土神なり。天武天皇の十二年を始めて官幣を奉じ、後清和天皇の貞觀元年、陽成院の元慶二年、文和年中等、數度に奉幣使を差下さると傳ふ。

草薙神社 有度村大字草薙村に在り。郷社にして、式内の有度郡今安倍郡三社の一なり。日本武尊を祀り、景行天皇五十三年の創建、一時頽廢せしを正平年間改築し、天正十八年家康本社を今の地に移して大に修補を加ふ。本社殿の傍側に數座の末社あり。社頭にある一株の樟は高さ二丈、周圍九丈、稀有の老幹なり。地は有名なる日本武尊東征の物語に現はる、焼津に續く草薙の舊址にして、焼津村なる焼津神社にも亦尊の靈を祀れり。

豊田八幡宮 豊田村大字八幡にあり。應神天皇を祀る。社は南に面して小丘を負ひ、丘上に山王社、若宮八幡、應之宮等の末社あり。毎年八月十三日を以て例祭を執行す。

此の邊一帶、三保、久能、大谷等の村々に跨る海濱の五里許、右に御前崎を遙望し、左の伊豆の青山を視る處風色殊に優れたり。名けて有渡の濱といふ。而して北方少しく東に偏する處には、北境白峯の支脈を受けて、西は安倍郡東は庵原郡に跨り、直立三千五百尺、静岡市の正北に峙てる龍爪山あり。その支脈は安倍郡に入りて、麻

機、賤機の二山となり、老樹全山を蔽ひ、山麓には多く白芍薬を繞らしたり。

静岡市の西を流る、安倍川の西岸長田村大字手越に、

手越古戦場 あり。建武二年新田義貞大軍を率ゐて、矢矧、鷲坂より此の地に陣を

構へ、川を隔て、大ひに北條の兵を敗る。川の支流薬科川を、遡ること五六町にし

て

風の森 といふあり。その名清少納言が枕の草子にもあらはれ、又は『住みわびぬ

うつらふ人の秋の色に身を風の森の下つゆ』定家卿その他の人々の詠にも見ゆ。地

は南薬科村大字牧ヶ谷の北にあり。薬科川の水中にある丘にして高さ百尺許、樹木密

生し、巖に一小祠あり。應神天皇を祀り、側に一碑を建て、本居宣長の撰文を刻す。

柴屋軒舊址 長田村大字九子宿の西部を去る北方六町許、字泉谷にあり。禪刹にして

天柱山柴屋寺と號す。連歌師宗長嘗て此處に庵を結び、柴屋軒と稱す。宗長は宗祇

が頃の連歌師にして當國島田驛の人なり。境内にはその碑石あり、堂にその像を藏す。

寺の東方に吐月峰あり。その北に崎つを天柱山となす。

誓願寺 丸字宿に在り。臨濟宗妙心寺派に屬し、阿彌陀如來を以て本尊とす。源頼

朝の創建にして、往時は壯嚴を極めしも、後年火災の爲めに全く烏有に歸し、天文年

間文益和尚の再興にかゝるもの現存す。本堂、庫裡、書院等あり。庭に片桐且元の墓

あり。側に石標を建て薨去の事を録す。地は國道を距る二町餘なり。

安倍川 安倍川の稱は、梅ヶ島村安倍嶺に發する大河内川、井川村大白嶺の北に發

する中河内川、玉川村大字横澤に發する西河内川の三流の玉川村に合したる處より始

まる。かくて南して足久保川及薬科川を併せ、静岡市の西に沿ひて安倍郡に入り、大

里村の西部にして海に注ぐ。下流に東海道線の鐵橋を架す。木枯山、蘆中山、舟山は

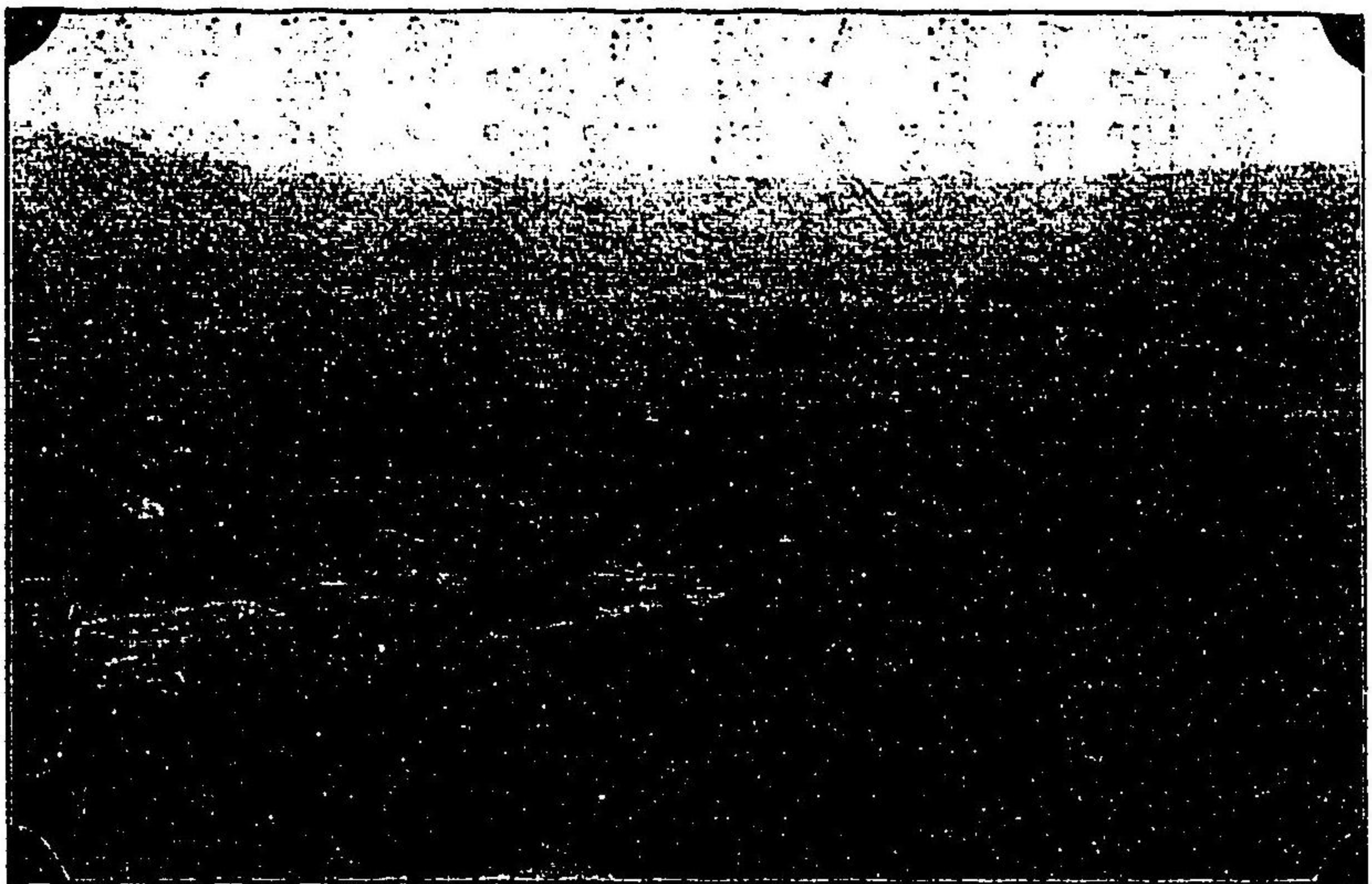
薬科川より下流にあり。水源に黒水淵、馬蹄石等を産す。河口に近き東岸に彌勒茶屋

あり。名物安倍川餅を賣る。薬科川の南岸なる服織村大字建穂村に

建穂神社 あり。式内に列し、又馬牽明神ともいふ。後山松叢を産し、境内櫻樹多

し。白鳳十三年道昭法師、此處に佛刹を建て、建穂寺と名け、境内に一鎮守を建つ。今の神社の始なり。近年その寺を廢し、神社を改築して頗る舊觀を革めたり。

静岡市、東海道線江尻驛を距る六哩餘、久能山はその東に、賤機山はその北に、安倍川は町の西を流れたり。市の中央に所謂駿府城址はありて、街衢百二十七の市坊は此の四面を繞り、東北より漸次西南に向いて延びたり。人口凡そ五萬を有す。町の中央本丸の中には第三十四聯隊の兵舎あり。之れと内濠を隔て、後方外廓の内には師範學校、監獄署、安倍郡役所、聯隊區司令部、稅務署、商業學校等あり。静岡縣廳と議事堂は前面の大手内にあり。之と外濠を隔て、大手の外には、市役所、警察署、憲兵屯所、地方裁判所、御料局支廳、静岡農工銀行等の官衙銀行を主とし、之等と濠を隔て、追手町にある静岡御用邸は、壯大なる和風造の宮殿なり。城の前面より西して安倍川橋に至るもの、之れと交叉して南北に通ずるもの、前者は新通町にして後者は吳服町、共に本市街の重要なる道路なり。第三十五銀行、静岡銀行、商業銀行、商業會議所等



あり。富商家の大夏櫺比せり。西なるは兩替町にして南なるは紺屋町、二町は有名な静岡の遊樂地にして旅館、料理店等相連りて繁昌を極む、此の他製絲會社、製紙會社、或は静岡民友新聞社、曉鐘新聞社等あり。安倍川町又は二長町は妓樓の軒を並ねて弦歌を絶たざるなり。停車場は榮町にありて、東海道線中有數の大驛なり。地は中世、府中又は駿府と稱し國府を置き、代々今川氏の城地たりしが、その滅るや、武田晴信に歸し、後徳川家康の天正十八年、濱松より遷り、幾干となくして、家康の江戸幕府

即ち本社殿神部神社なり。淺間神社とは、後年富士淺間の祭神木花咲耶姬命を勸請してこゝに新宮となせるもの、神部神社は總社の稱にして遠く崇神天皇の御宇の創建にかゝり、大己貴命を祀れり。貝原益軒が、日光東照宮と之れとを擧げて日本神社の二壯觀となせるも必しも失當の言に非ず。境内に一古鐘あり。文暦年間の鑄造なりといふ。緑深く彩りて古氣掬すべきものあり。社に東隣して東照宮あり、又西隣して奈古屋神社あり、大山祇命を祀る。

賤機山 山は安倍郡南賤機村に屬すれども、その南麓は全く静岡市内、淺間神社の境内をなせり。往昔は青葉ヶ岡と稱して山頂に今川義元の築ける古城址あり。山に松多く、頂に至りて回顧すれば滿目何等のさへざるものなく、脚下に静岡の全市を見渡し、之を繞るものに、師範學校女子部、又山の前面數町を距る安東村には縣立中學校東には青草滿地にしきたる練兵場を見るべし。北麓に鯨地といふ小池あり。下流は江尻川といひ巴川に合す。『今朝見れば霞の衣をおりかけて、賤機山に秋は來にけり。』後

法性寺入道。静岡停車場よりは約十二町を隔つ。

寶台院 停車場の西三町、下魚町に在り。淨土宗に屬し、永正三年觀譽上人の開山にして龍泉寺と號す。境内凡そ一萬坪本尊彌陀三佛を安置せる十五間四面の本堂、徳川家康の影像及びその持佛たりし白本尊等を安ずる大書院、其他寶台院殿の靈廟、小書院、玄關、庫裡、鐘樓、不動堂、地藏堂寺悉く壯麗なる構造なり。總門より中門を過ぎて堂に至るの間凡九十間、老樹四邊に茂生して白鳩の群屋上に聲を絶えず。寺の寶台院といふは、天正十七年徳川家康の妾、寶台院殿一品夫人を此處に葬りしによりて改めたるもの、後三代將軍家光、大に堂宇を造營したり。之を以て、毎月十九日には寶臺院殿の法會を營み、十月には十夜法要、春秋の彼岸には彼岸法要、三月に御忌法要を執行し、賽人雲集して之に加はるといふ。

華陽院 静岡市字人宿町に在り。淨土宗に屬し、天正年間の創建、徳川家康が讀書の師たりし近江の人眞譽上人の開山なり。後年之に因みて家康自ら開基となす。祖母華

陽院殿、又第五女の二照院殿市姫等の香華院となす。維新前の堂宇は頗る壯麗を極めしも、嘉永大震の後、又屢々火災に罹り、現今にては前述の二廟所及び本堂、庫裡を有するに過ぎず。

臨濟寺 淺間神社の東北三四町の地にあり。禪宗臨濟流の總本山にして、天文年間今川義元の創立にかゝり、本光國師の開山なり。境域廣く、山門、六丈、大書院、大庫裡、護國道場、傳衣閣等あり。安置する所の本尊、阿彌陀佛は佛工春日の作にして、長一尺五寸。その大書院の一隅なる四疊半の一室は家康未だ幼少の頃此室に起居して二世の住職 太原和尚に就きて漢學を學びし處、天井に畫かれたる龍は狩野探幽の筆なり。後奈良天皇は、開山本光國師の教に深く服し給ひ、此處を以て當時の勅願所と定められたり。爾來、伽藍其の他の再築、修繕は必づ勅命によりて國司の行ふところ、即ち現今の六丈は、天正年間、家康の勅を奉じて營む所なり。本堂の背後に、今川氏郷、中村一氏の墓あり。之れを距る二町許にして今川義元的首塚あり。塚の高さ四尺

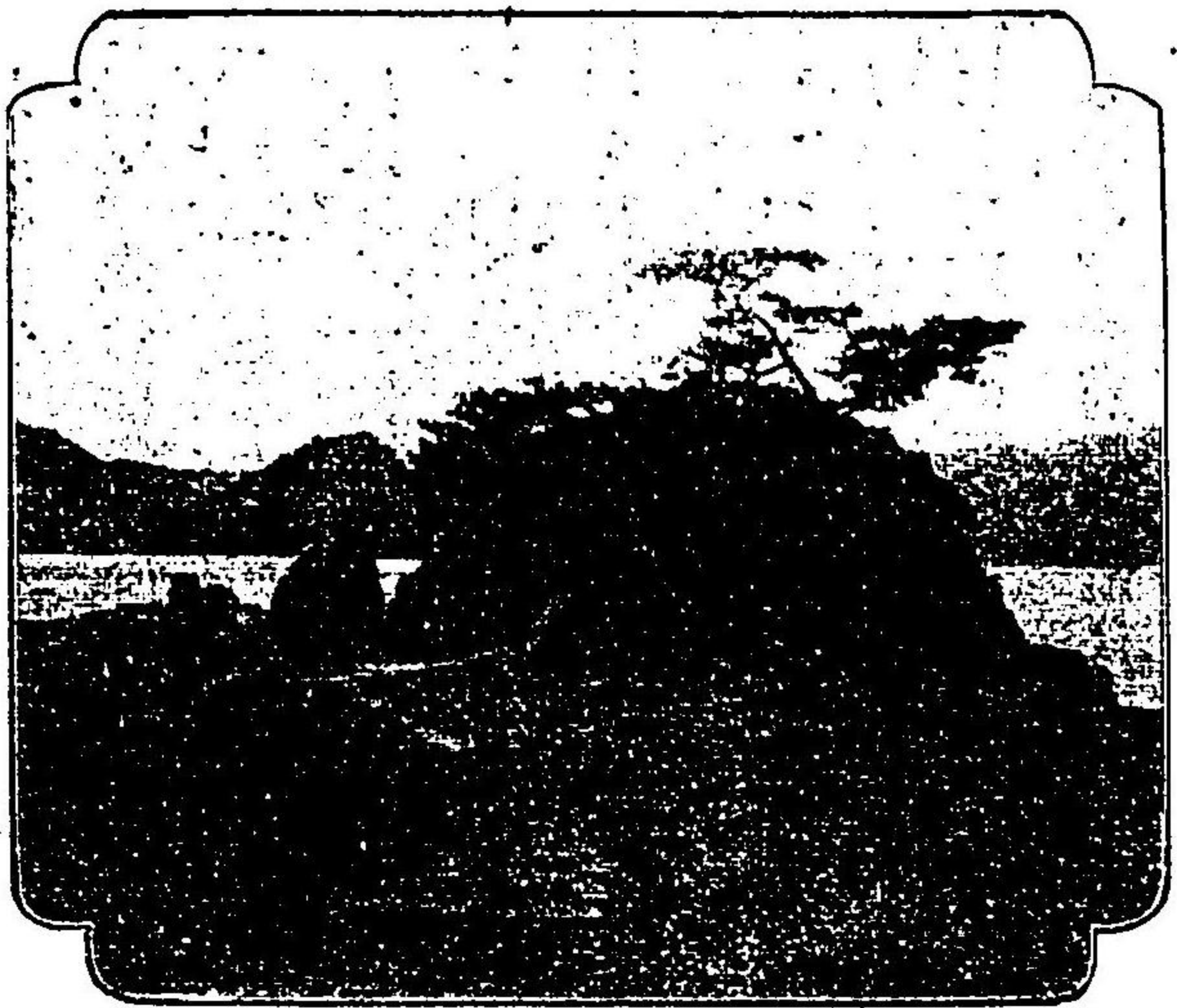
許、外圍に方二間の堂を建て、今川氏の位牌を安置す。

足久保觀音堂 足久保川の上流、美和村字足久保に在り。寺は法明寺と號し曹洞宗に屬す。本尊は行基僧正七體觀音佛の一にして、之に用ゐたる樟の片破の樟といへるは、注連を圍らして附近にあり。

蓮永寺 千代田村大字沓谷に在り。日蓮宗に屬し、文永十一年の開基、日持上人を以て開山とす。慶長年間、庵原郡にありし芳樹院を遷して、徳川頼宣の母養珠院之が開基となる。現今の堂宇は本堂、客殿、庫裡、仁王門等にして、堂後に徳川氏の靈屋あり。又國內屈指の一巨刹なり。

梅ヶ島溫泉 大河内川の上流、梅ヶ島に在り。静岡市を距る北方十三里十五町、地僻にして道路に便少きが爲、浴客の來る者甚少く、只近傍樵農夫の來りて勞を休むるあるのみ。皮膚病、或は關節の病によし。溫泉の東北七八町にして、大瀧と稱する飛瀑あり。駿甲境の篠井山中より發するものにして、高さ三十三丈、二層をなして下

る。頗る壯觀なり。



静岡の海濱

焼津方面に向ひたるも、今は南方に汽車の通ずるあり。又峠に隧道を穿ちて車馬の通

再び静岡市に歸りて東海線によれば、車は、東海道の街道の南方に一隧道を穿ちて焼津驛に向ふ。此の隧道の北方は即ち、北方より來れる宇津谷の小山脈にして、街道の通ずる處

宇津谷峠 となる。されば嶺は有渡郡今庵原郡に編入の西端に位し、西方志太郡に跨り自ら二郡の境をなす。山脈の餘波は南に走つて海に臨み崖を懸く。此處を大崩と稱す。往時は長田村より八町、頂を超えて

行に便したり。頂上の稍南によりて在原業平が古蹟、葛の細道あり。伊勢物語に「宇津の山へのうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり」とある所なり。峠の西部に一碑あり。文を刻して蘿徑記といふ題す。かくて静岡より約八哩、隧道二個を過ぐれば直ちに

焼津驛に著す。驛は海に瀕して、遙かに伊豆の松崎と相對する邊、往古日本武尊東夷征討の時、叢雲劔を揮いて草を薙ぎ、以て叛賊の計を破りしといふ傳説のある所なり。驛を距る八町餘にして、當國古社の一なる

焼津神社 あり。式内の縣社にして、焼津草薙の紀念とし、日本武尊を祀る。本社拜殿及び攝社二座あり。本社は南面して社前の路は海濱二十町に連り、櫻、楓の類を植え連ねたり。社前に一小池あり。これより南一町の邊に華表あり。日本紀に現はれたる尊の事蹟あれど、煩はしければ略す。

焼津海水浴場 焼津驛の東九町許なる海濱にあり。此の邊一帶波靜かに水清くして浴場に適し、而も東方に駿河の灣に近き水を眺め、伊豆の島山、翠に浮び、東北に愛

鷹、高草、富士等の秀峰を負ひ、東南に渺茫たる大洋の水平線を望む。此地月には殊によし。静岡市を距る事、三里餘なり。

岡部町 宇津谷峠の西南半里許に位し、五十三次の一驛次なり。舊岡部宿、三輪、内谷、村良、桂島、入野、子持阪等の諸字を併す。人口凡六千、もと岡部美濃守の所采地にして町内に小祠あり。その靈を祀る。町の東端なる宇津谷峠の麓に、西行山最林寺あり。真言宗の古刹にして、西行法師の刻みしといふ千手觀音の像あり。

東海道線は、岡部、藤枝及び島田の町とを通ずる國道とは、弓形をなして、遙かに南の海濱を走る。

藤枝町 停車場よりは二十町を距る北方にあり。岡部町よりは西の方約二里、町は志太郡役所所在地にして、人口一萬を有し、商戸の軒を並ね市街の賑へる、郡内第一の繁昌を呈せり。此の他、區裁判所、警察署、藤枝銀行等あり。停車場近傍に、旅店多し。町を距る十町にして、清水寺あり。聖武天皇の宸翰を藏す。又町の南方、田圃

の打續く中に、

田中城址 あり。天正八年甲斐の依田信蕃の城く所、同年徳川氏の兵と戰敗れて甲斐に遁れ、以來徳川氏に歸して、酒井忠利を始め、諸侯交々來りて之を守り、文化年間の廢城に至る。

蓮生寺 藤枝町字本町に在り。建久七年熊谷蓮生坊の創建する所、眞宗大谷派本願寺に屬す。境内は老樹鬱然として日光を遮り、中央に、安河彌作の阿彌陀佛を安ずる本堂あり。蓮生坊の木像左右に聖徳太子、見眞大師の二像を安置せる開山堂あり。又見眞大師自筆の名號、寶物數十點を藏す。地は宗祖親鸞上人駐錫の舊趾なり。

志太温泉 藤枝停車場より藤枝町に至る途上、十數町にして、左側、潮生館と示せる所より左折すれば、二十町許にして、青島村大字志太に在り。地は遠州榛原郡の川崎町及相食町に至る岐路のある所、温泉は同字鹽湯ヶ谷に在り。鐵泉は、腺病、皮膚病、子宮病、痲瘋質等に特效あり。その土地高さが故に幽靜旅舎又宏壯にして清潔